DRAGON QUEST

アイテム物語

ENIX

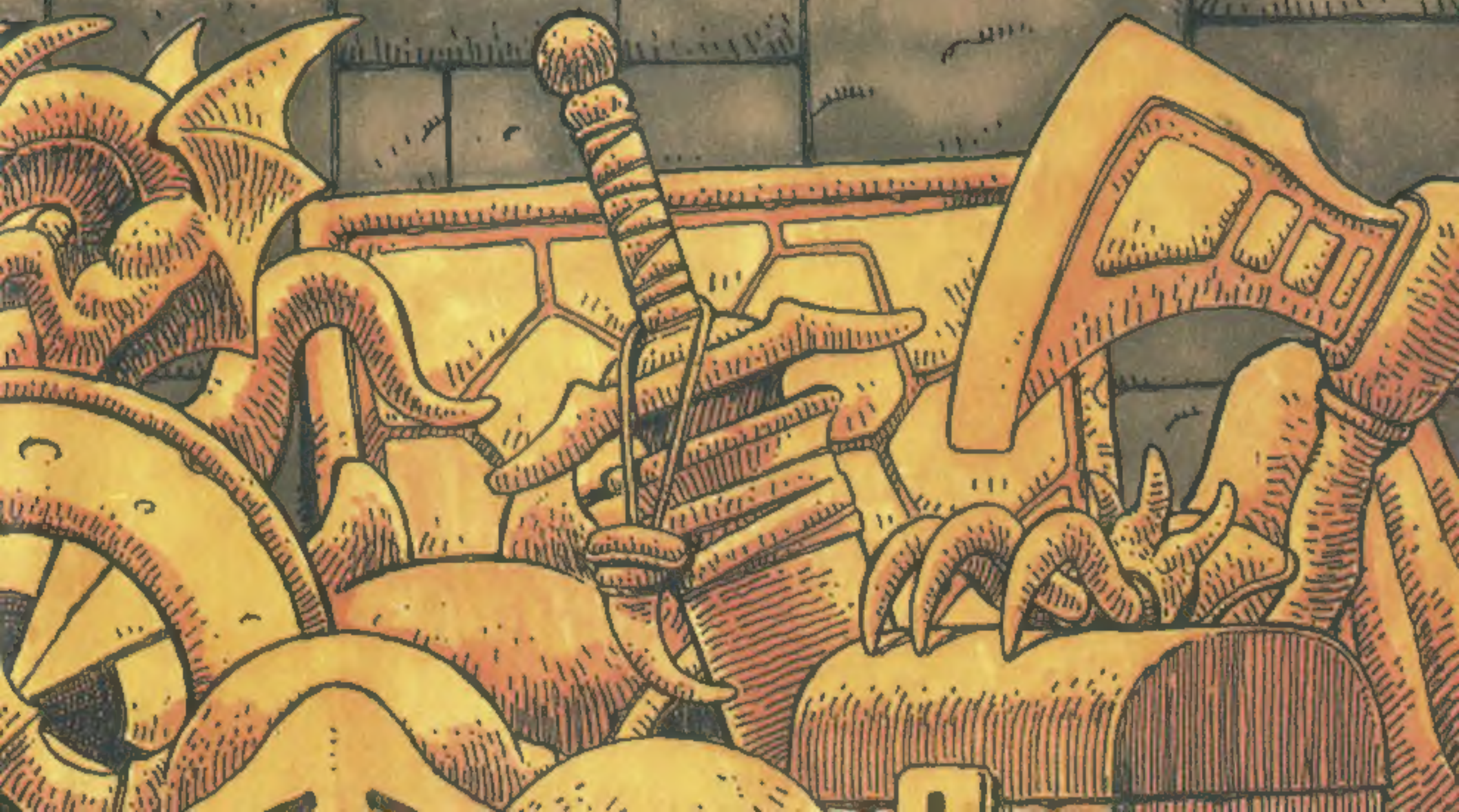
DRAGON QUEST

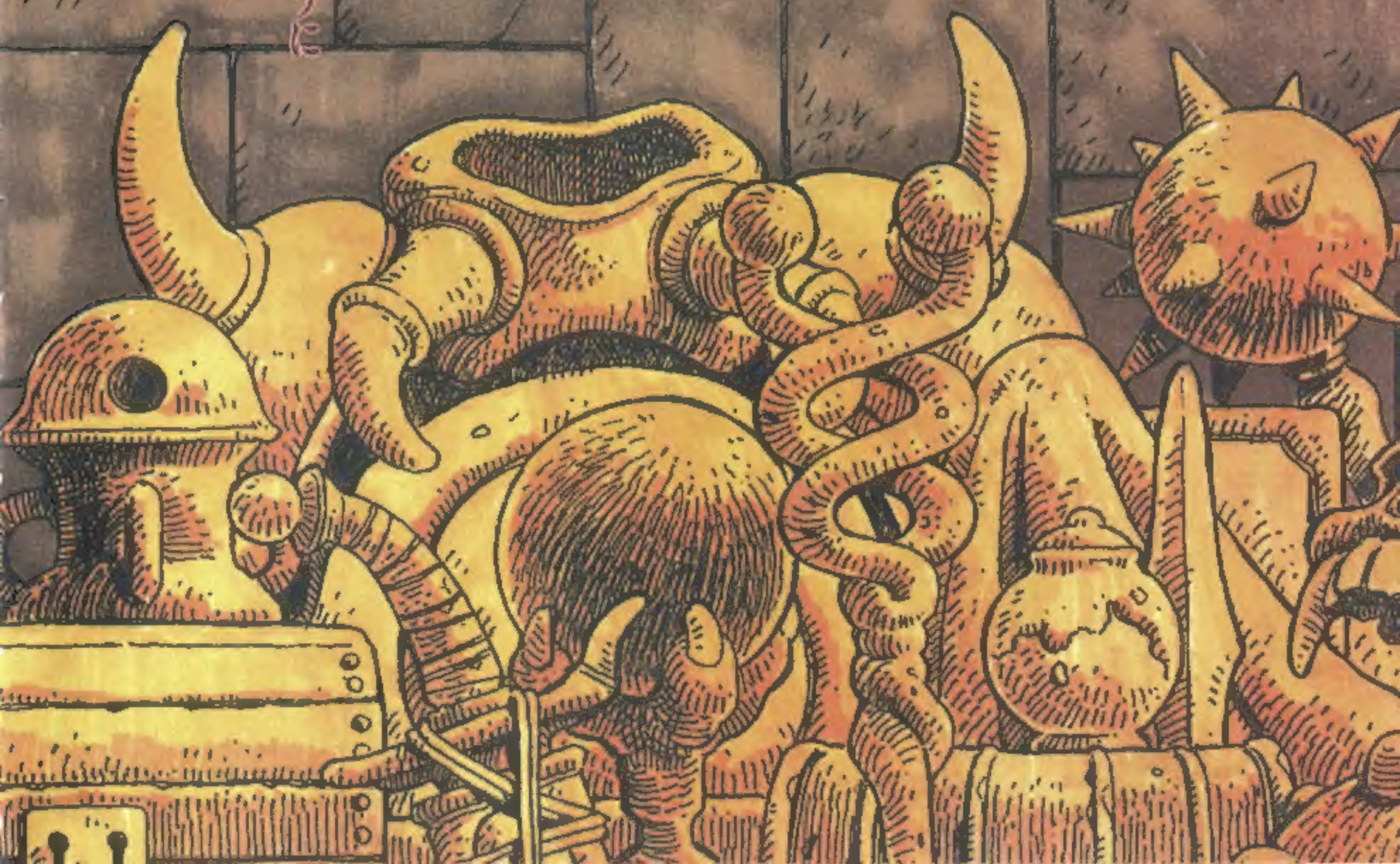
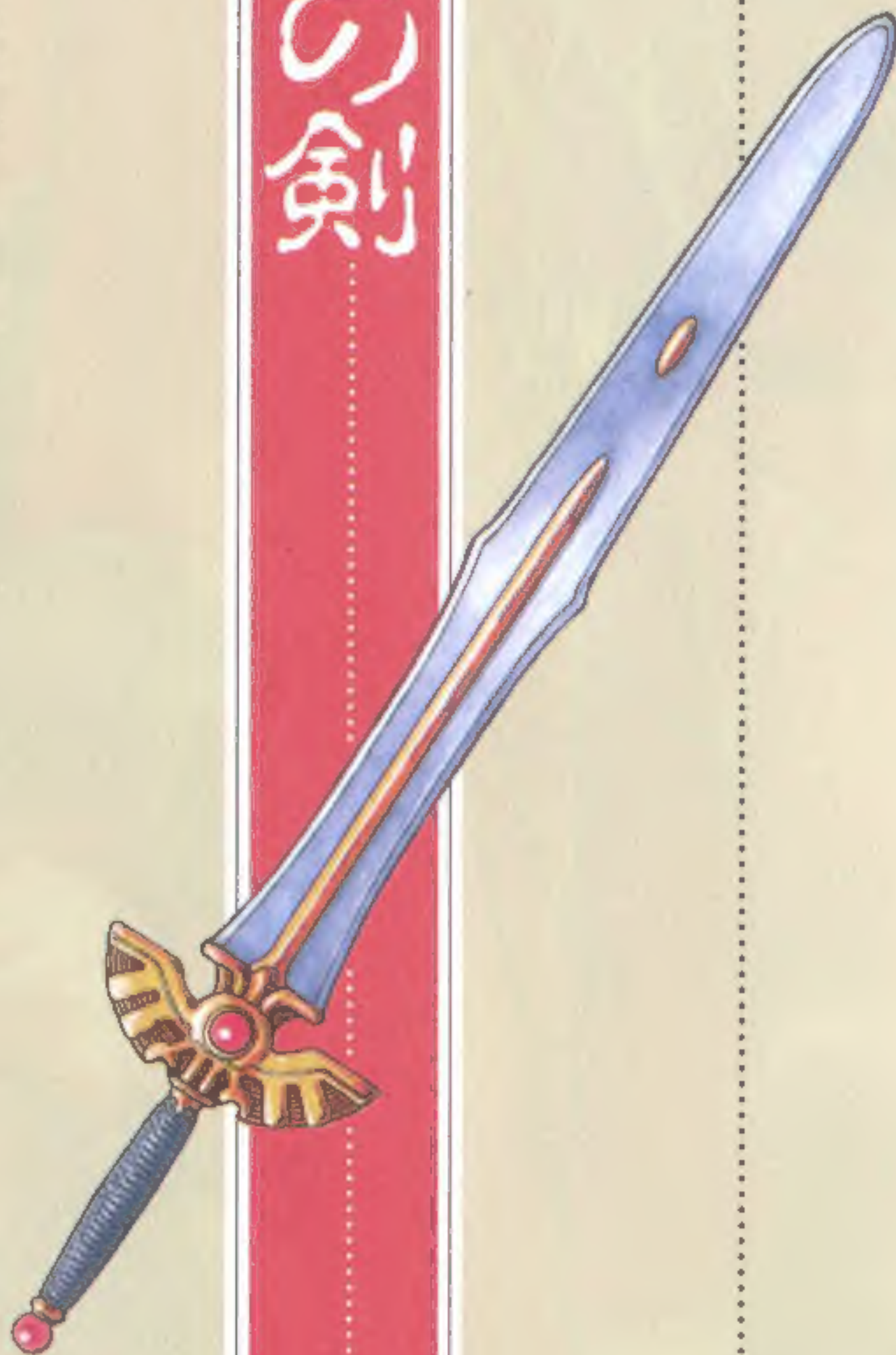
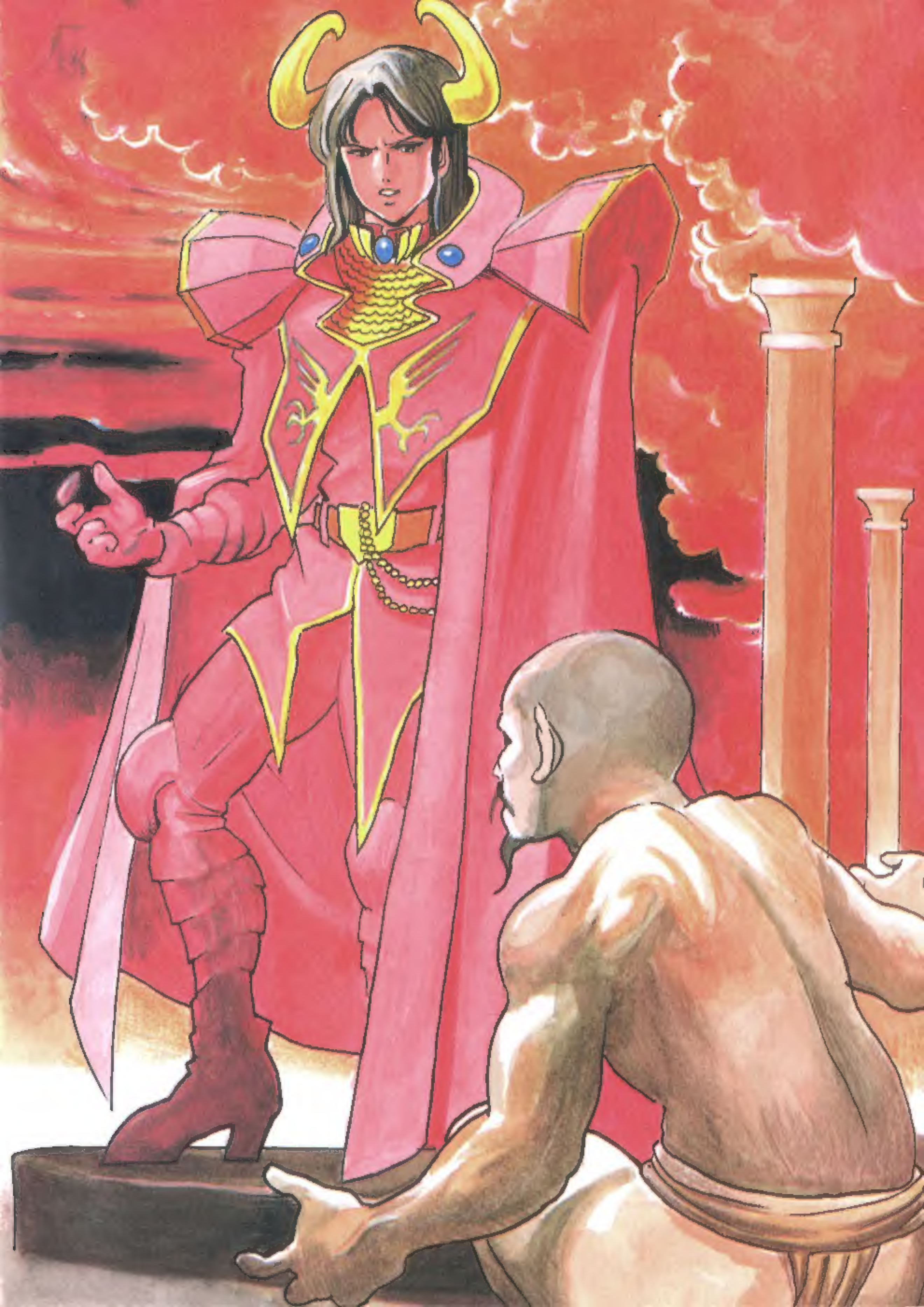
エニックス

ISBN4-900527-24-6 C0276 P880E

定価880円
(本体854円税26円)

ドラゴンクエスト
アイテム物語

E N T S

CONT

万人が求める貴重な品……
忌まわしい呪いの込められた恐るべき凶器……
神々が身につけたと伝えられる伝説の鎧……
あなたがたが手にするすべての品物には
由来があり歴史がある
何の変哲もない日用品、
普段何気なく使っているありふれた品々にさえ
今は忘れられた伝説が秘められている
人よ、冒険の旅をしばし休み振り返ってみるがいい、
たった今道具屋で買い求めた品にも
この世にひとつしか存在しない伝説の剣と同じように
興味深い物語が隠されているのだ

SWORD OF KING
王者の剣
(神の剣　伝説の誕生)
SWORD OF KING

異界の海に猛き国あり
永久の混沌より生まれたる国
オリハルコンの尖塔は紺碧の空にそびえ、
戦士の鎧は銀青色にきらめく
彼の国　はるか昔、神々の手により水底に沈めり
今は幾千尋の深淵にまどろむ
だが人よ、彼の国の興亡を忘れる事なかれ
そのさだめ誓って常世の国に繰り返されん

これははるか数万年前の出来事である。
地上に栄える国々はどこも存在しなかった太古、この世界は一つの超大国、強大な帝国によって支配されていた。今はなきムー帝国である。
当初、辺境の一部族に過ぎなかったムーの人々が類い希な繁栄をかち得た原因……それは大地と炎の神、ガイアが与えしオリハルコンと呼ばれる金属であった。
元来、神々の武具を造るために存在したこの神秘の金属に対する天上界の需要は高く、ガイア神とその配下たちは日々その製造に追われていた。
ある日、ガイアの部下の一人がこう提案した。

「いかがなものでしょうガイア様、オリハルコンの製造を人間どもにやらせてみては？」
通常の金属としても類い希な強度を誇るオリハルコンは、使い方によっては恐るべきエネルギーを生み出すことができた。
「何をもうす！　万一オリハルコンを人間に与えれば地上界は取り留めのない混乱に陥るは必定、そんなことをほかの神々がお許しになるはずなかろう」
「ですから信仰心の厚い人間を選び契約を交わすのです。できたオリハルコンの半分を天界への捧げ物とさせ、残った分についても武器、防具、戦いの道具として用いるのを禁ずるのです」
一時はためらったガイア神も、オリハルコンを造るためのあまりの多忙さに業を煮やし、ついに人間にその製造法を教える決心をしたのであった。
そしてオリハルコンの製造、鉱石の精錬に不可欠な高温を生むための二つの神器を人間に与えた。すなわち太陽の光を熱に変換する深紅の水晶と、月の光を熱に変換する黄金の水晶である。この時、ガイア神と盟約を結んだ人間こそムー帝国の始祖とされるラ・トルテクであった。

以来、三万五千年の長きに渡ってムーの人々はガイア神との盟約を守ってきた。ムーの首都ナーカルの王宮の両側に建つ聖殿には高い尖塔が築かれ、二つの水晶はその上に安置された。そして水晶が生み出す無限ともいえる高熱は、水銀を満たした管を使ってムー全土に導かれ、利用されたのである。

オリハルコンの鋤で耕された畑は毎年、豊かな実りを約束し、オリハルコンの針を携えて漁に出た漁師は、船に積みきれないほどの魚を港に持ち帰った。

ところがムーと南方の蛮族との間に起こった戦いを期に、皇帝の座を獲得したクリチアヌスは幾多の反対者を退け、この盟約を破ってしまったのだ。

「光栄あるムー帝国は、世界に君臨するさだめのもとに生まれた国である！　臣民諸君！　世界制覇こそ選ばれた民族である我がムーの神聖なる義務なのだ」

新皇帝クリチアヌスの演説に国民は熱狂し、わずかばかりの反対意見は抹殺された。

こうしてオリハルコンの武器を装備したムー帝国軍による侵略戦争が始まった。

切っ先から電光を放つ剣が、雷雲を呼ぶ力を持った槍が、つぎつぎと造り出され、ムーの軍勢は瞬く間に世界の大半をその手中に収めたのである。

この戦いで最後までムー帝国に対抗したのは、アトランチスと呼ばれる大国であった。だが勇猛果敢で知られたさしものアトランチス軍も、オリハルコンの武器の前にはなすすべもなく、三年半に渡る激しい戦いの末、降伏したのだ。かくて皇帝クリチアヌス率いるムー帝国は文字通り世界の覇者となった。

この事態に天上界の神々は激怒し、大地と炎の神ガイアは厳しく責任を追及された。主神ミトラは、天変地異によるムーの全滅を決意するが、精霊神ルビスやガイアの嘆願により思いとどまることになる。

何より神々がムーを滅ぼすのをためらったのは、この時代において天上界で使用されるオリハルコンの過半数が、ムーからの奉納品であるという点だった。そしてガイア神はこの責任を追及され、後にネクロゴンドと呼ばれる火山に幽閉されたのである。かくして神々の懲罰をも免れたムー帝国は日増しに富み栄えていった。各植民地から送られてくる産物は市場に溢れ、人々は空前の繁栄を享受していたのである。

だが正に栄華の極みとも呼ぶべき状態に達したこの帝国に、恐るべき業病が蔓延しつつあった。高慢、怠惰、腐敗、いまだに、ほかを圧する権力を得た者のかかる不治の病である。

公徳心は失われ、道徳は地に堕ちた。人々は神を敬う心を忘れ、正義は死語となった。

各所の神殿は荒れ果て、わずかに残った正しき人々が捧げる灯明が、往時の繁栄をしのぶかのようにわびしく揺れていた。

「神たる身に過ちは許されない……が、しかし、我らは過去において過ちを犯したことを今ここに認めよう。自らが欲するオリハルコンを求めるあまり、不義を見逃し正義を施行するのをためらった。見よ！　地上を。見よ！　ムーの地を。腐敗、堕落はその極みに達し、不正と欺瞞が満ち満ちておる」

かくて主神ミトラは、今度こそムーを滅ぼす決心をかためたのである。

だが精霊神ルビスだけがこの挙に異議を唱えた。

「確かにムーの人間たちの所行は目にあまるものがあります。仰せの通り天変地異をもって彼の国を滅ぼすことに反

対はいたしません……。けれど、すべての人間を殺してしまうはいかにも無慈悲。なにとぞ残りたる心正しき者どものみはお救いくださいませ」

精霊神ルビスは天界とも人間界とも異なる亜空間、異界にあらたな国土を創造し、ムーに残った正しき人々をその地に誘いたいと申し出た。

この提案に賛成と反対の二派に分かれた神々は激しく議論を戦わせたが、結局、月の女神ミネルヴァの提案により決着をみることとなる。

「ルビス神の意見ももっともなれど、ここは一つ心正しき人間どもにも試練を課してはいかがでございましょうや？」

女神、ミネルヴァの言う試練とは、一定の期間内に神々に奉納する三つの神器、武具を造らせるというものだった。

「最上のミスリルで盾を、ブルーメタルで鎧を。そしてオリハルコンで剣を造らせるのでございます。ただし過去に与えた深紅と黄金の二つの水晶は取り上げまする」

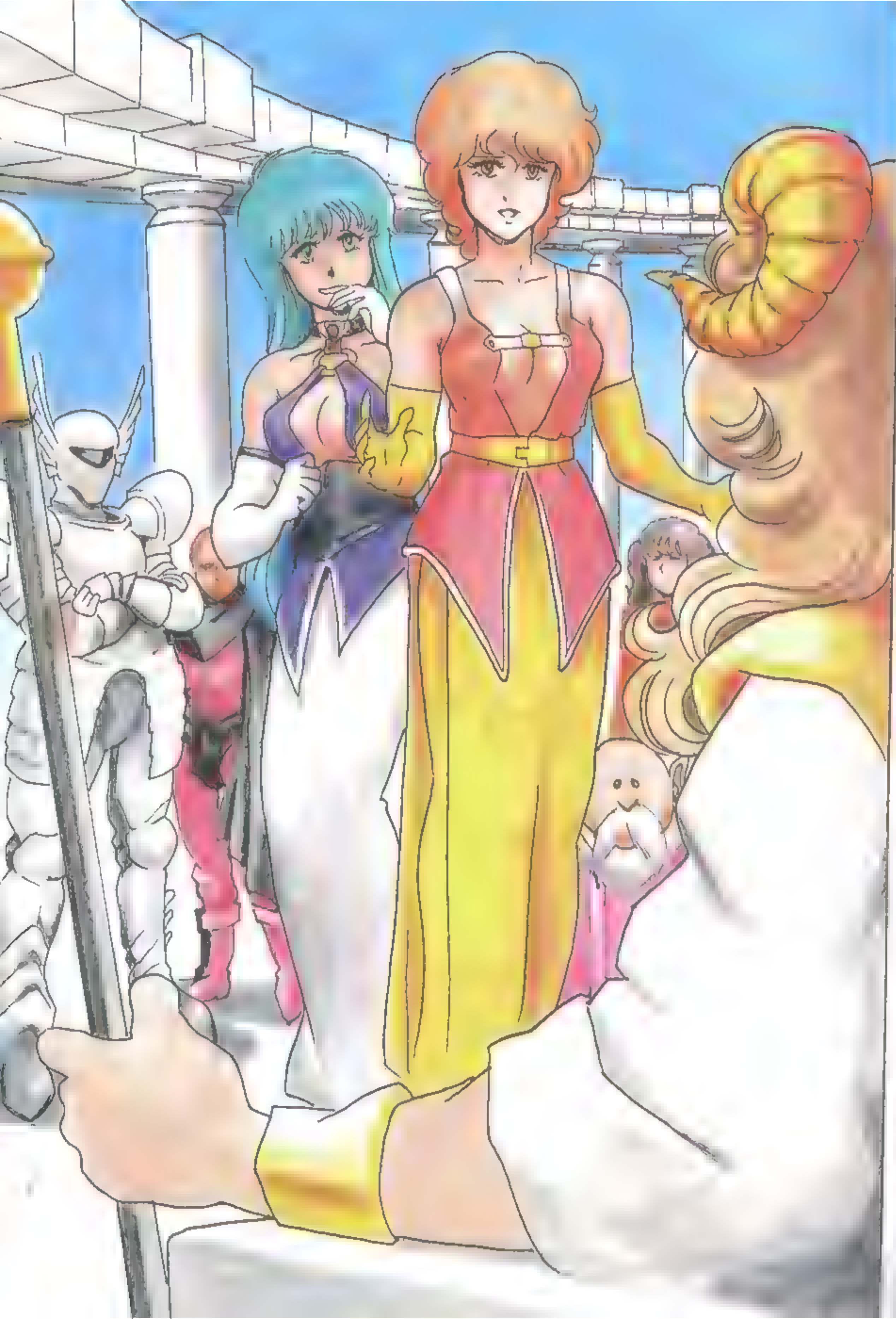
聖殿の尖塔に置かれた二つの水晶は昼は深紅の水晶が日の光を熱に代え、夜は黄金の水晶が月光を熱としていたのである。

二つの水晶が生みだした高熱は、水銀の詰まった管を通してムー各地の精錬所へと送られていた。銅や鋼、そして流白銀と青鍛鋼といった金属の精錬は、通常の石炭を用いても可能であった。だがオリハルコンの精錬には、ほかの金属とは比べものにならないほどの高温が必要であり、それには二つの水晶が不可欠だったのである。

ミネルヴァのおよそ不可能ともいうべきこの提案を、精霊神ルビスは承伏せざるを得なかった。大地と炎の神ガイアが幽閉された今、ムーの人間たちの味方は彼女一人だったからである。

「期限は百日、この間にもし首尾良く三つの神器を造り上げることができたら、その時は新たな世界への旅立ちの祝いとして再び二つの水晶を授けよう」

主神ミトラのこの言葉で神々は散会した。

かくて女神ルビスは地上界へと降臨したのである。この時、ルビスの啓示を最初に受けたのは、ムーの王都にある神殿に仕える一人の老神官であった。後にアレフガルドの地において最も古い家柄となるファン・ドリアン家の始祖、ファン・ドリモス十六世である。ほかの神官たちが腐敗堕落し、儀礼上の名誉と金銭欲のみに奔走している中で、こ

の老人だけはかたくなに、父祖の教えを守り暮らしていたのである。

「急ぎなさい！　残された時間はわずかで、しなければならない事は多いのです。無事に三つの神器が完成したらこの祭壇に奉納なさい。そしてこの神殿に入れるだけの正しき人々を集めるのです」

突如出現したルビスの言葉に老神官は仰天した。無論、彼一人でどうなる問題ではなかったし、滅多な者に話せもしなかった。ドリモスは思案の果てに清廉潔白な人柄で知られる貴族オリゴス侯爵を訪ね、事の子細を打ち明けた。

「それが真なら確かに一大事じゃ。だが、このことをほかの者に話しても信じてはもらえまい。また信じてもらえればもらえたで、収拾のつかない混乱に陥るだろう」

二人は侯爵の屋敷内に作業場をこしらえると、一人の鍛冶屋を呼び寄せた。名をモハルというこの男、腕は確かだが頑固で、気に入った仕事でなければ引き受けないので有名な職人だった。意外なほどあっさりと侯爵たちの要請に応じたモハルは、道具箱を抱え、二人の弟子を伴ってやって来た。

「こ、この者たちは!?……」

「何故かような者が鍛冶屋の弟子に……」

かぶり物を取った弟子たちを見て、侯爵と神官は言葉に詰まった。モハルに付き従って来た弟子の内、一人はホビットであり、いま一人はたおやかなエルフ、妖精の少女だったのだ。

妖精もホビットもこの世界に住む古い種族である。その起源は人類のそれよりさらに過去とされ、伝説によれば天地創造当時から存在したと伝えられている。だが人間の数が増えるに従って彼らの数は減少し、いまでは深山幽谷にわずかばかりが暮らしているだけだったのである。

人間の前に姿を現すことなど滅多になく、侯爵たち二人にしても実際に目にするのは今が初めてであった。

「十日も前になりますか……」

モハルは二人の異種族に目をやると話し始めた。

「夜中に戸を叩くモンがあるんで……。誰だって言うと弟子にしてくれと答えよったんですワ。近頃の若いモンはすっかり根性がのうなって、弟子などとっても三日と持たずやめちまうから最初は断ったんですが……」

あまりに熱心に頼む声にモハルは根負けして扉を開けたと話した。

「なんでもオレん所に近々でっかい仕事が舞い込むとか、その手伝いをするためにはるばるノアニールとかいう地方から出て来たちゅうこってした」

鍛冶職人の言葉に、オリゴス侯爵と老神官は顔を見合わせてうなずきあった。

「これはルビス様の……」

「ウム、まず間違いなく精霊神ルビスのご助力。ありがたいことだ」

二人の言葉にホビットとエルフは黙って耳を傾けている。

「さ、どんな事情かしれないが、さっさと仕事にかからしておくんなさい」

モハルはそう言うとさっさと仕事場に入っていった。

そして明くる日の未明、ムーの王都に時ならぬ混乱が巻き起こった。聖殿に掲げられていた二つの水晶が忽然と消え失せたのである。侯爵たちから事情を聞かされたモハルも事の重大さを知り顔を曇らせた。

「ともかくオリハルコンの剣のこたァ後で考えましょう。いまは普通の方法でも造れるミスリル盾から始めるのが一番だ」

鍛冶屋はそう言うとフイゴを押す手に力を込めた。

確かに通常の火力でも青鍛鋼や流白銀を鍛えることは可能である。だがそれはあくまで理屈の上の話であり、ずっと水晶の力がもたらす熱に頼ってきた人間の職人には至難の技といえるものだった。そしてこの時になって、今までほとんど口をきかなかったエルフの少女が話しかけてきたのである。

「全部の石炭をまとめて炉に入れては駄目ですワ、ホラ、これとこれは素性が良いけどこっちは良くないでしょ?」

そう言われても侯爵たちには石炭の違いなど分かるはずもなかった。いや、それどころか石炭を扱い慣れているはずのモハルでさえ、少女のより分けた石炭と、ほかのものとの違いが分からなかったのである。

だが妖精が選んだものだけをくべると、炉は見たこともないほどの勢いで炎を吹き上げ始めたのだ。こうしてルビスの遣わした妖精、エアリエルの助力の甲斐あって流白銀の盾は三十日後に完成した。

「つぎは青鍛鋼の鎧ですナ、こいつは石炭の熱で加工するのはちっとばかし厄介ですゾ」

鍛冶屋はそう言ってため息をついた。青鍛鋼は流白銀に倍する硬度を持つ金属であり、これを鍛えるにはとてつもない力が必要とされていた。そして、この時になって今まで黙々とモハルの手伝いをしていたホビットが、初めて口をきいたのである。

「どんなに硬い鉱石でもオイラの力ならイチコロさ」

ホビットは白色に加熱された青鍛鋼めがけて大金槌を振り降ろした。
キーン！　澄んだ音が作業場に響き、薄黄色の火花が飛び散る。エドラスと名乗ったホビットの力で、青鍛鋼の原石はみるみる鍛えられていった。
背丈は人間より小さいが、ホビット族の筋肉はとてつもなく強靱である。彼を遣わした精霊神ルビスの配慮に、神官ドリモスとオリゴス侯爵は心から感謝の祈りを捧げた。
そしてこの頃、近所の者たちも侯爵の家で何か不可解なことが起きているのに気づき始めていた。
「青鍛鋼の鎧は、後三日もあれば完成するじゃろうが問題は剣じゃ」
「それもありまするが、そろそろ世間も騒がしくなってきておりますゾ。ルビス様が約束された心正しき者の選抜も始めねばなりませんナ」
二人は相談し、神器が完成した後神殿に集める人々を選ぶ作業に取り掛かった。
「ルビス様が約束された土地にはほかに人間はおらんのじゃろうナ」
「左様、全く新しく創造された世界とのことですじゃ」
「では連れて行ってもらうのは男女同数の方が良いかも知れんナ」
この時、二人は口にこそ出さなかったが自分たちはこの地に残る決心をかためていたのである。たとえ精霊神ルビスから選ばれたとはいえ他者の命運、生殺与奪の権限を行使し、あまつさえ自分たちも生き残ることなど、実直な二人には考えられなかったのだ。
老若、身分の上下を問わず侯爵と老神官が助けるべき人材を決め終わったころ、作業場では青鍛鋼の鎧が完成していた。胸には精霊ルビスの紋章が浮き彫りとして描かれ、裾と袖の縁には金による縁取りが施された鎧に、ホビットもモハルも疲れた顔をほころばせて見入っていた。
「さて、いよいよ問題のオリハルコンの剣ですナ……」
額の汗を拭いながら鍛冶屋が言った。
「こいつばかりはオイラの力でも鍛えられるかどうか分からないですぜ」
ホビットも手にした大金槌にもたれて、積まれたオリハルコンの原石を見つめている。
「でもルビス様が言われた約束の日まで後五十日もありますワ、みんなで力を合わせれば剣だってきっとできますと

も」

妖精エアリエルに励まされた鍛冶屋と、ホビットのエドラスは休む間もなく作業に入った。だが五日経ち、十日経っても作業は進展しなかった。

「やはり水晶の熱でなけりゃどうしようもありませんぜ」

モハルはフイゴの押しすぎでマメだらけになった手を組むと忌々し気に言った。

「このままの硬さじゃトロルだって歯が立たないヨ。なんとかもう少し熱を加える方法を考えなくっちゃ」

さすがのエドラスも半ば諦め顔で原石を見ている。

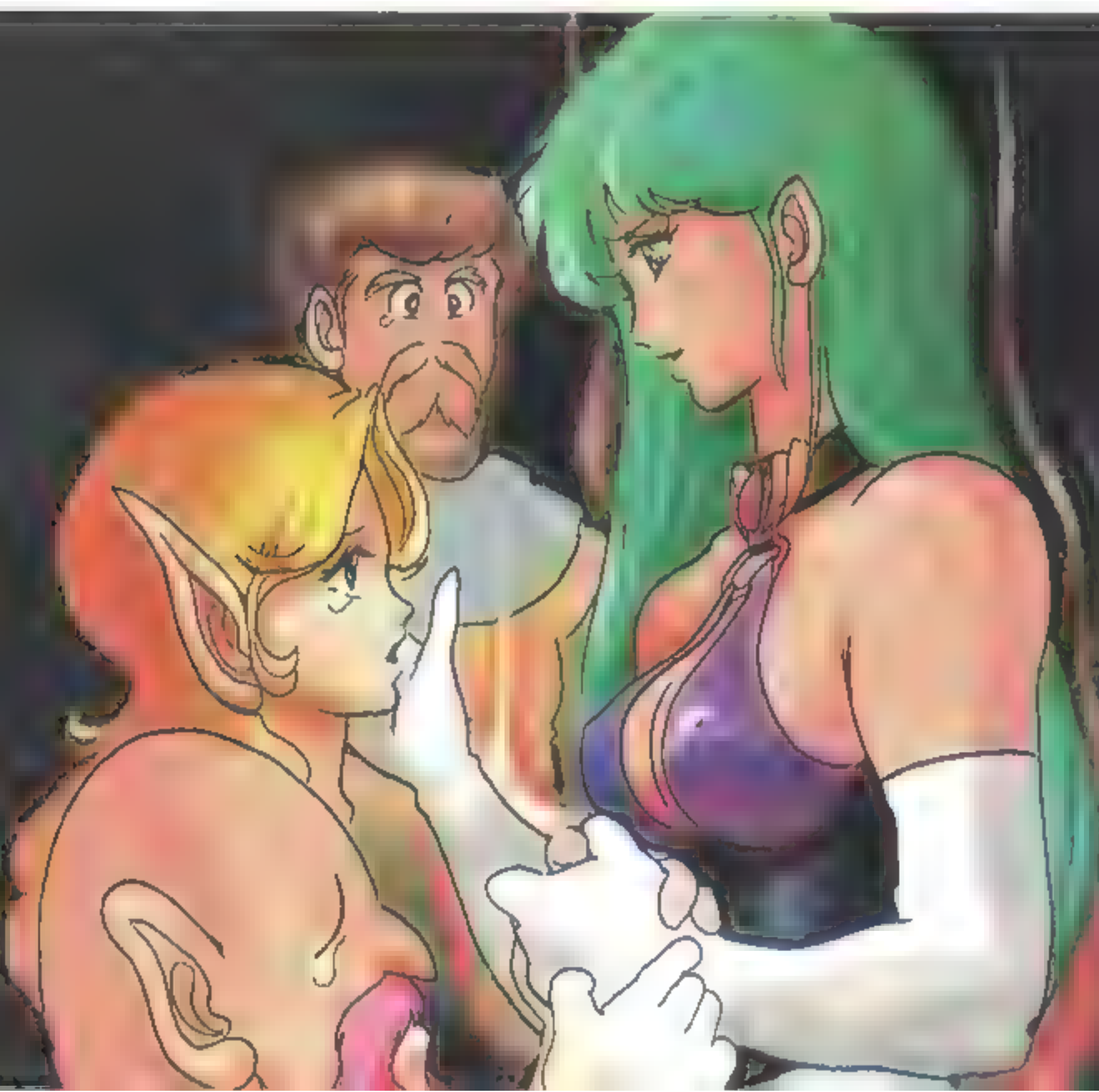
だがこの時までに妖精エアリエルは、侯爵が買い集めた膨大な石炭の中から最上の物を選び出していたのである。

「せっかく二つ揃ったというのに……」

オリゴス侯爵が唇を噛んだ。

と、その時、作業場を突然、暖かな光が包み込んだ。光はゆっくりと凝縮し、やがて美しい衣装をまとったルビス神の姿に変わった。

「ルビス様……」

思わず平伏する一同を片手で制し、精霊神はオリハルコンの原石に歩み寄った。

「よくぞ二つの神器を完成させました。後のことは心配せずともしばしお待ちなさい。あなた方の努力、決して無駄にはさせませぬゆえ」

ルビスはそう言って微笑むと現れた時と同じように光となって消えていった。

だがこの時、さしものルビスにも確たる手だてがあったわけではなかったのだ。神としての自分の力を使えば、オリハルコンを加工するだけの高熱を生むのはたやすかった。しかしそれでは主神ミトラとの約束に背くことになってしまう……。老神官や侯爵たちにはああ言ったものの、ルビス自身途方にくれていたのである。

「ともかく、この上は相談出来るのはあの方しか……」

精霊神ルビスは侯爵の屋敷から瞬時にしてネクロゴンドへと転移していた。幽閉されている大地と炎の神、ガイアに助力を乞うためである。

「子細は分かった。だがわたしとてこの地を離れられぬさだめ……」

話を聞いたガイア神は、己が身体を捕らえて離さぬミトラの封印を見て寂し気に笑った。

「ときにルビスよ、天界の神々は如何なる方法でムーを滅ぼすご所存か聞きおよんではおらぬか？」

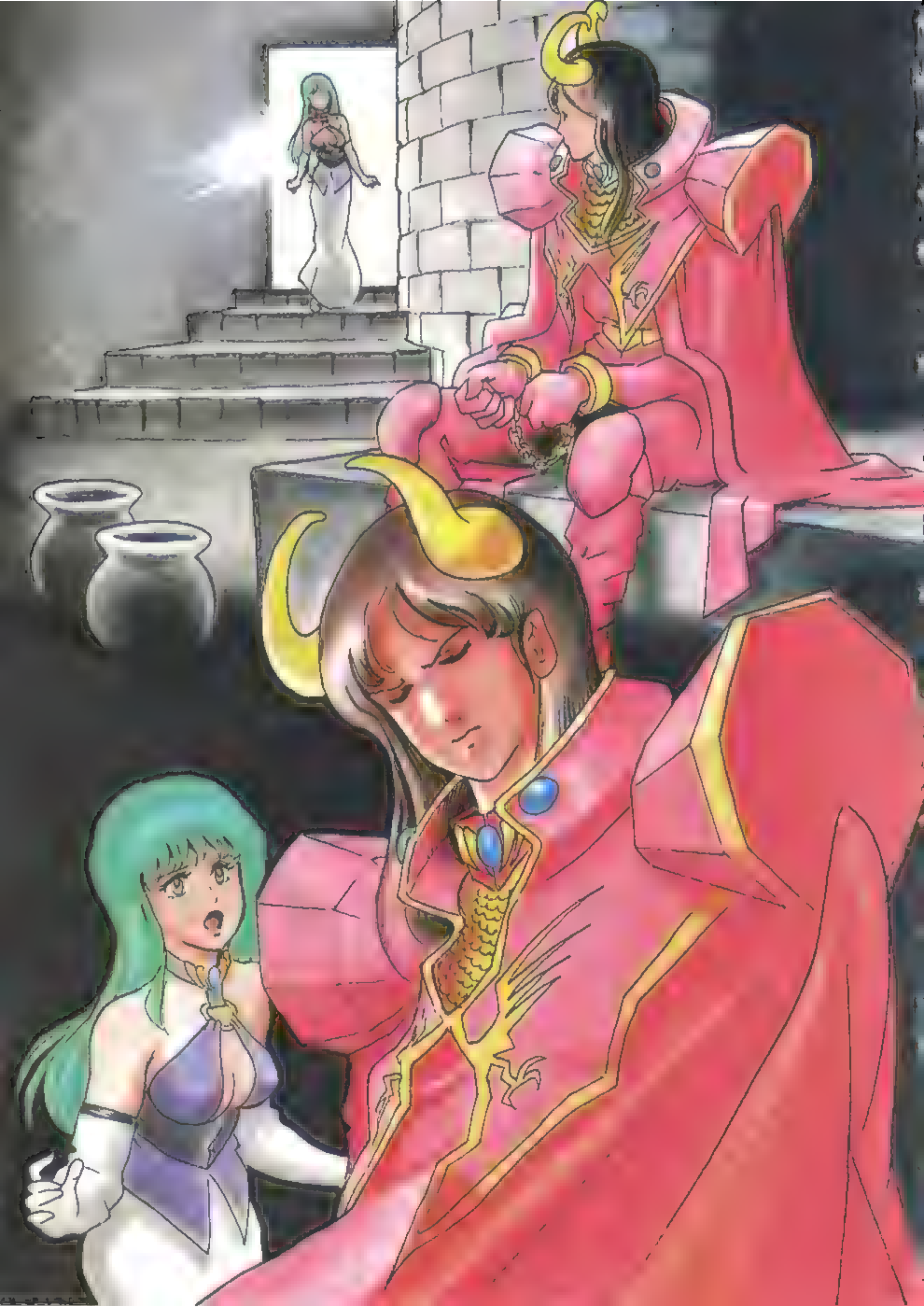
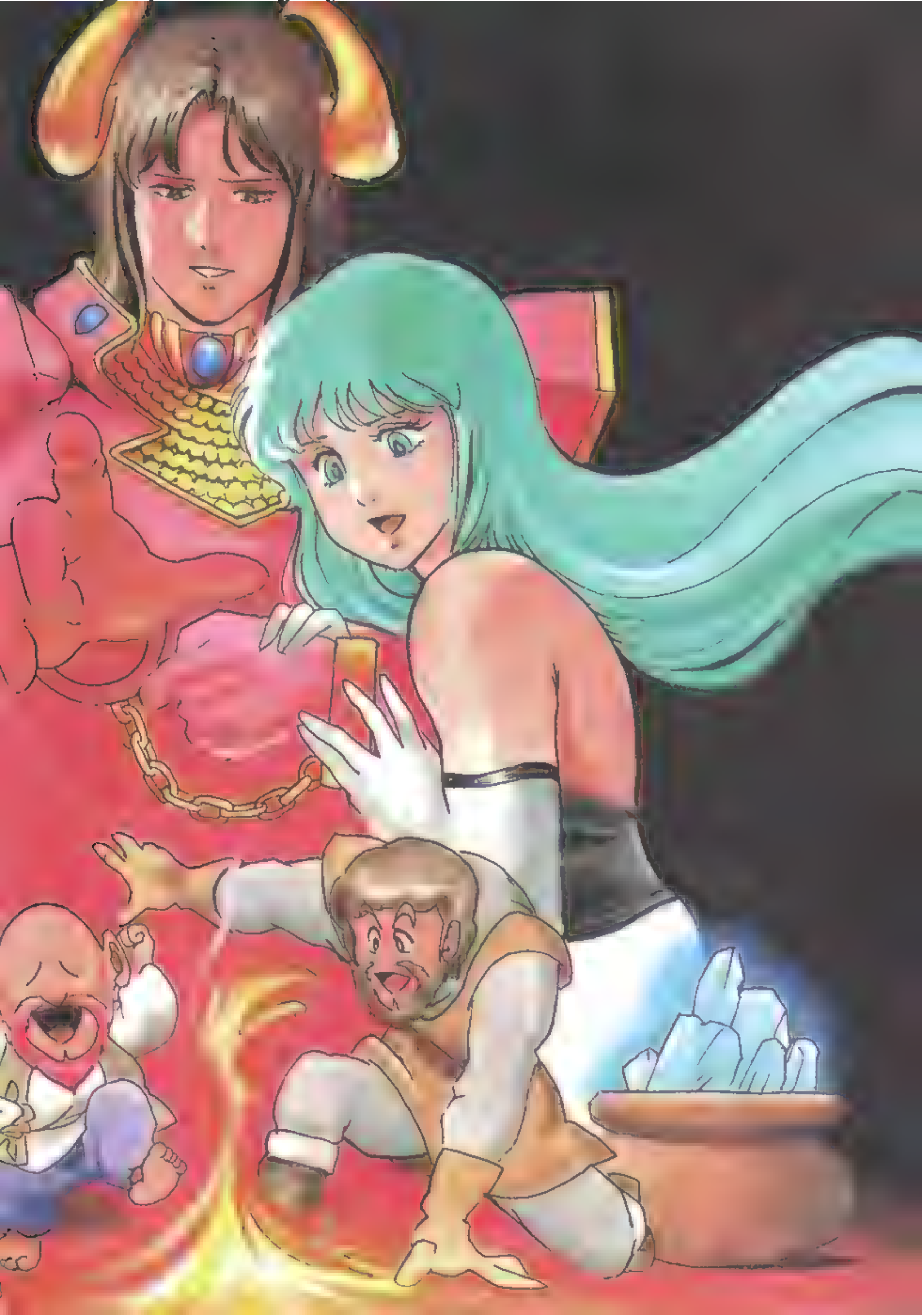
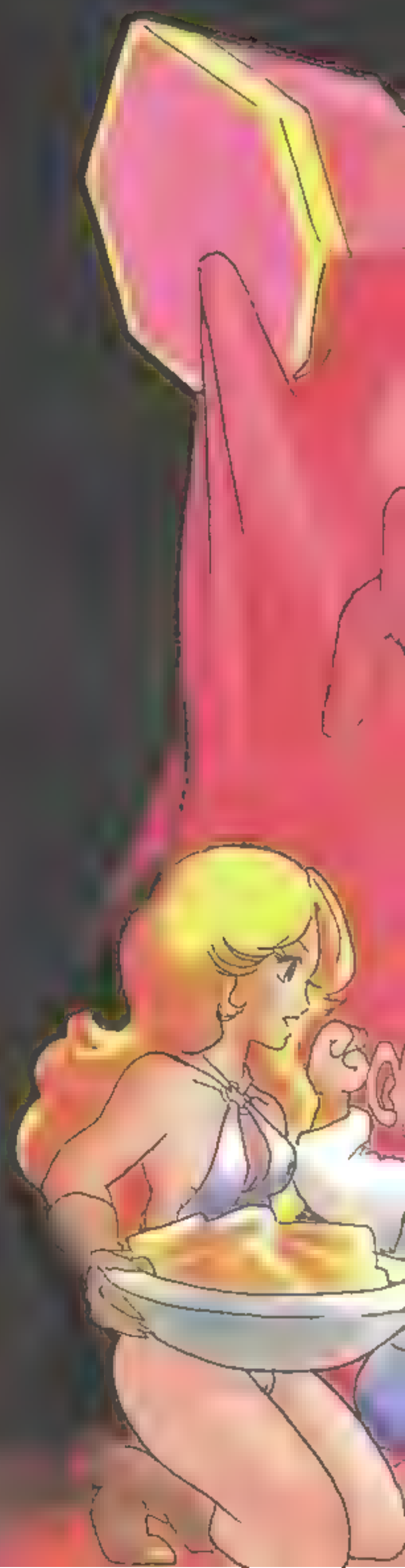
ミトラ神が火山の噴火と津波をもって、ムーを海底に沈めるつもりだと聞かされたガイア神はしばらく考えを巡らせていたが、やがて……、

「ならばこの地からでも何とかなるやも知れぬ。あれほどの大きさの大陸を沈めるのであれば、今ごろは既に地下の溶岩がミトラ神の力によってたぎり始めておろう。わたしの力で溶岩を一筋、その侯爵とやらの作業場まで導いてしんぜよう」

ガイア神は、通常の火山のそれよりはるかに高温の主神ミトラが操る溶岩を、オリゴス侯爵の作業場まで誘導しようと提案した。

安堵したルビスがネクロゴンドを離れたその頃、ムー全土を不気味な地響きが襲っていた。白亜の神殿には黒いひび割れが縦横に走り、慌てふためく人々は普段口にしたこともない祈りの言葉を唱えて逃げ惑った。この日が主神ミトラが約束したムー全滅の日の丁度、十日前であった。

地震に恐怖を感じたのは侯爵の作業場の面々も同じだった。

「いよいよ始まるようじゃの、わしらにかまうことはない。

エアリエル殿とエドラス殿は早急にこの国を離れられるがよかろう。人間の愚かな行為の巻添えを喰うことはない」
エルフとホビットは老神官の言葉に黙って首を振った。ふたりともルビスの命を受けて以来、侯爵たちと運命を共にする覚悟でいたのである。
振動がつづく中、再び光と共に精霊神ルビスがその姿を現した。
「案ずることはありません。この地異は単なる予兆です。それより間もなくこの場に地下より溶岩が噴き上げてきます。それを使ってオリハルコンを鍛え、剣を造るのです！」
呆然としている一同にルビスはガイア神の助力について語った。
「分かりました。ともかく鍛冶屋として持てる限りの力を駆使してご期待にそいましょう。せっかく力を貸してくださった大地の神様やあなた様のお心、決して無駄にはいたしません」
モハルの言葉が終わらぬうちに、振動はいよいよ激しくなり作業場の床に地割れが走った。
「危険だゾ、溶岩が噴き上げてくる！」
だが侯爵の言葉とは裏腹に、地割れから噴出した溶岩は、まるで命があるかのように床に淀んで動かなくなった。
「不思議だわ、この溶岩まるで冷える気配がない……」
恐る恐るのぞき込むエアリエルの言葉通り、溜った溶岩

は杏色に灼熱したままで、一向に冷えはしなかった。ホビットのエドラスは、怪力を振るってオリハルコンの原石を溶岩の中に沈め、愛用の大金槌を手に取った。

　志を一つにした三人の人間と、ホビット、そしてエルフの少女は夜を日に継いで作業を進めていた。かくてミトラ神が宣言した日の丁度前日、オリハルコンの剣は完成したのである。

　こうして約束通り三つの神器を祭壇に奉納した時、神殿には侯爵と老神官の手によって選ばれた人々が集まっていた。侯爵と老神官は姿を現したルビスに、自分たちはこのままムーの地に残り神々の審判を受けるつもりだと話した。

「あなた方二人がそう言い出すのは分かっていました。そのような心根の持ち主だからこそ、善なる者を選び出す役目を与えたのです。しかしあなたがたがいなくて、果たしてここに集まった者たちは無事に異界で暮らしていけるでしょうか？　このムーの悲劇を繰り返さぬためにも、二人は新たな地で指導者とならねばならないのです」

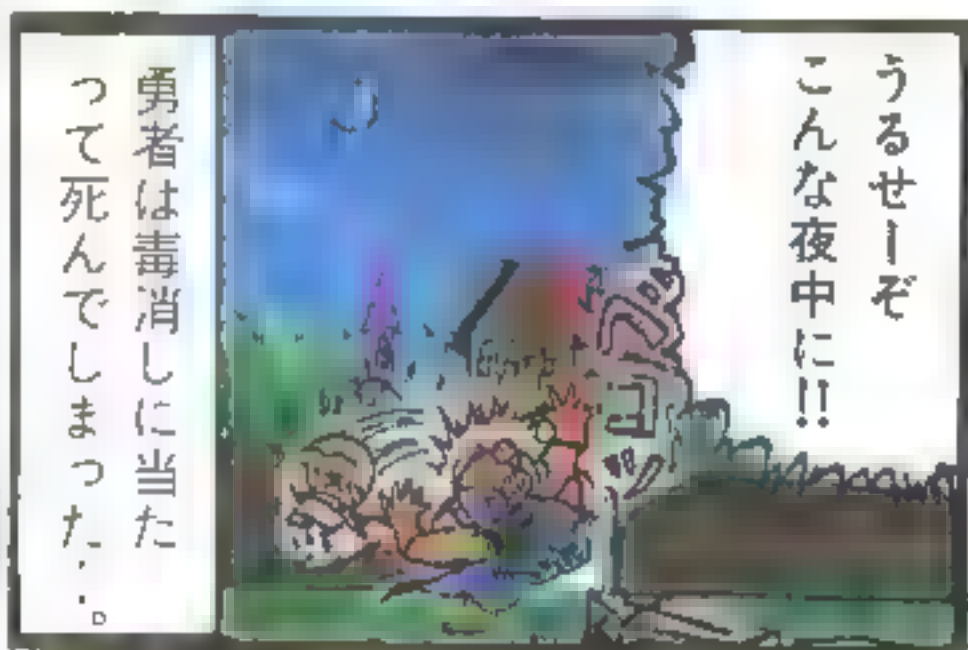
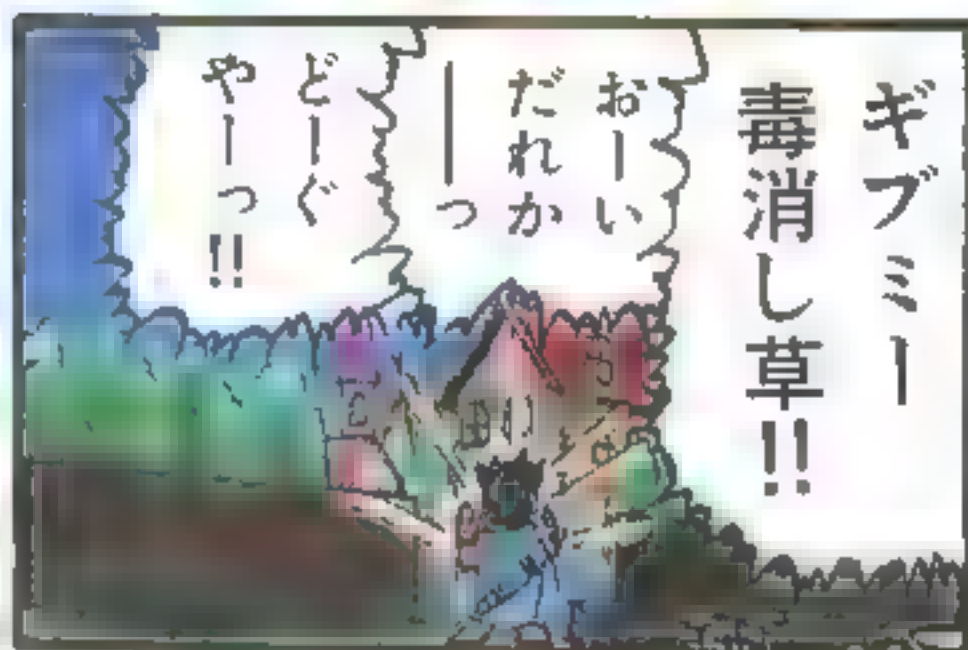
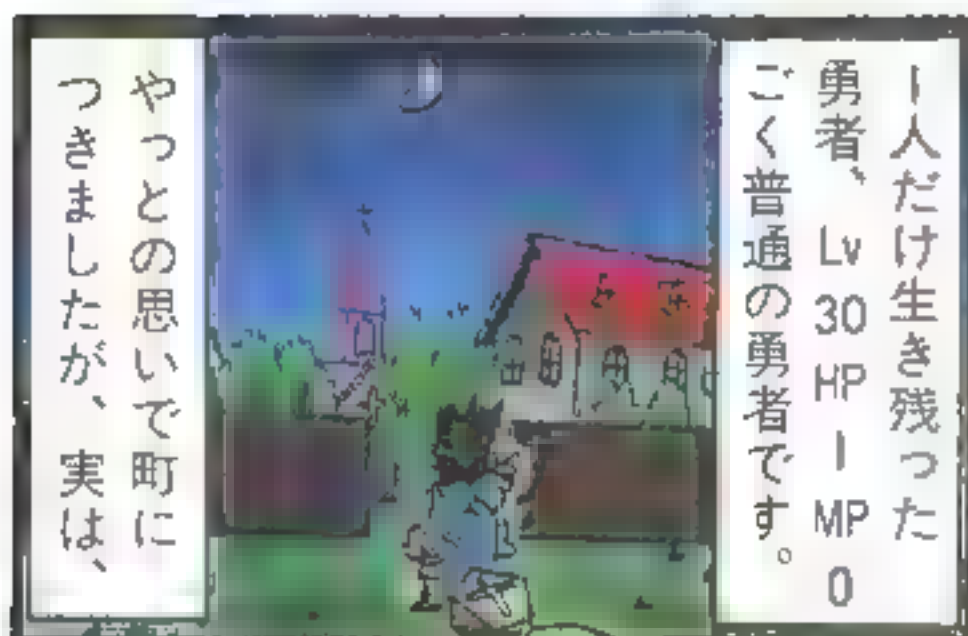
　ルビスの話に集まった人々からも同意の声があがり、二人は涙ながらに精霊神の言葉に従うと誓った。やがてここ一両日激しさを増していた地震は、いよいよ苛烈なものとなり、頑丈な石造りの神殿をも揺るがせるほどとなった。

「主神ミトラよ、今こそ天上界の力を我に！」

　ルビスの声に呼応するがごとく神殿は風に舞う木の葉のように空中に飛翔した。同時に大地の至るところから溶岩が噴出し、いままでのものより一層激しい地震がムー全土を捕らえ揺さぶった。逃げ惑う人々の悲鳴は崩壊する建物が立てる轟音にかき消され、港を出ようとする船は押し寄せた津波に瞬時にして飲み込まれた。

　すさまじい天変地異を眼下に見おろし、天に浮かんだ神殿は一条の光となって消えていった。はるか異空間に精霊神ルビスが創造した地、アレフガルドへと旅だって行ったのである。この後、アレフガルドに着いた人々から流白銀の盾は勇者の盾と、青鍛鋼の鎧は光の鎧と、そしてオリハルコンの剣は王者の剣と呼ばれたという。

　また後に主神ミトラが授けた二つの水晶のうち、深紅のそれは太陽の石として、黄金色の方は月のかけらとして末永く彼の地の人々に伝えられたという……。またムー帝国滅亡後、覇権を取り戻したアトランチスは一時、世界に君臨したものの、新たに起こったサマンオサとの戦争に破れ、長い鎖国期に入ったと伝えられている……。

アレフガルド小劇場

恐怖! 誘惑の剣の魔力

●誘惑の剣●

誘惑の剣…ピンクの霧を立ちのぼらせ敵の心をかき乱す女の子用の剣

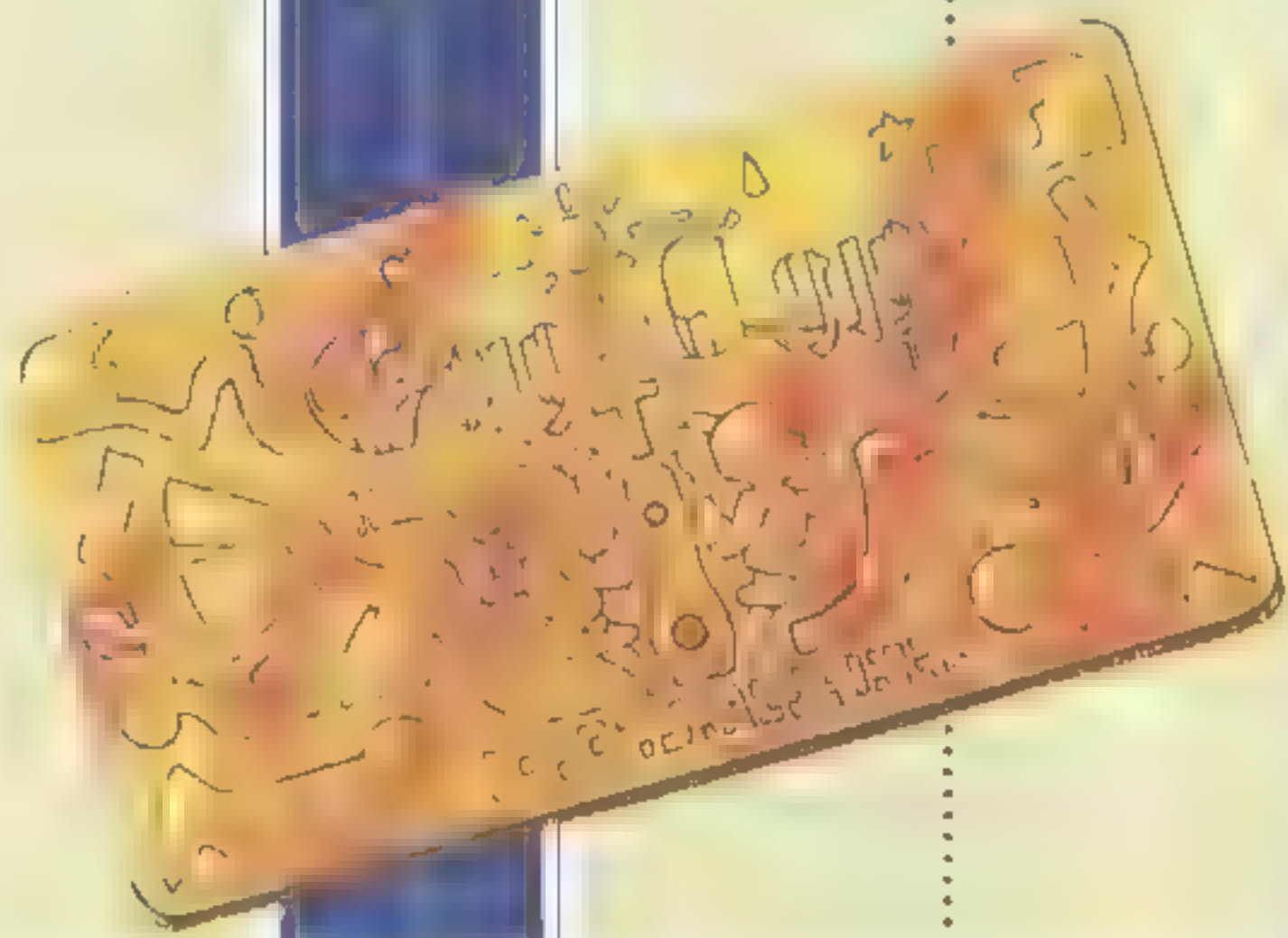
GIVE ME! どくけし草

●毒消し草●

毒消し草・毒に冒されたときのための解毒剤

GOLD CARD

ゴールドカード

（大不況ゴールドカードの誕生）

GOLD CARD

ムーンペタの街は今日も賑やかな物売りの声が飛び交っています。商店街の店先には、ゆげの立つような焼きたてパンや色とりどりの果物や木の実がならべられ、美しい花売り娘や街角で珍しい芸を見せる大道芸人たちが、街をいきかう人々の目を楽しませています。

勇者アレフが竜王を倒し、アレフガルドに平和が訪れてから、はや百有余年がすぎていました。かつては、武器や防具などの戦いのための道具を売る数軒の店と、小さな宿屋しかなかったこのムーンペタの街は、今ではたくさんの商店が集まる商売の街になったのです。

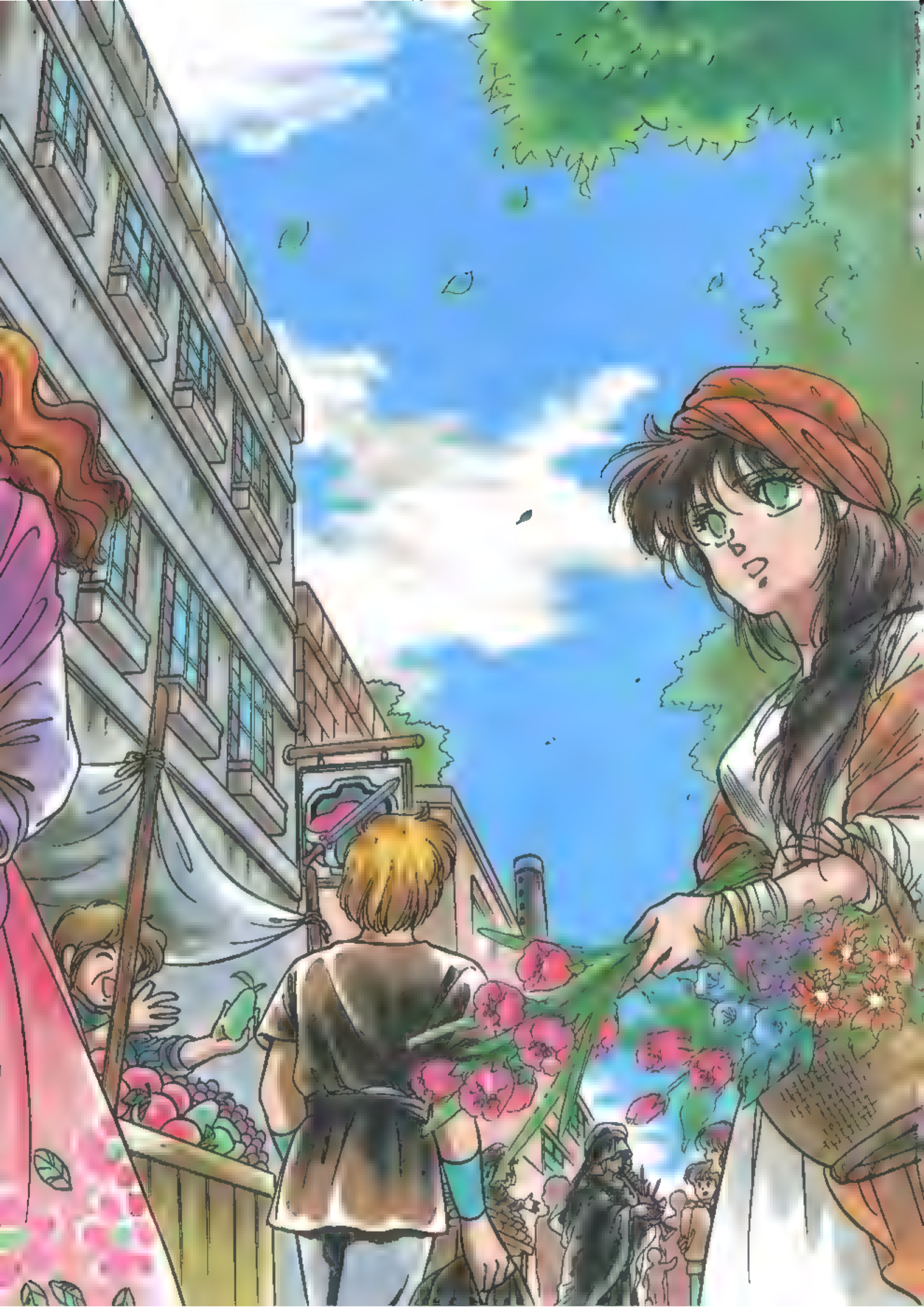
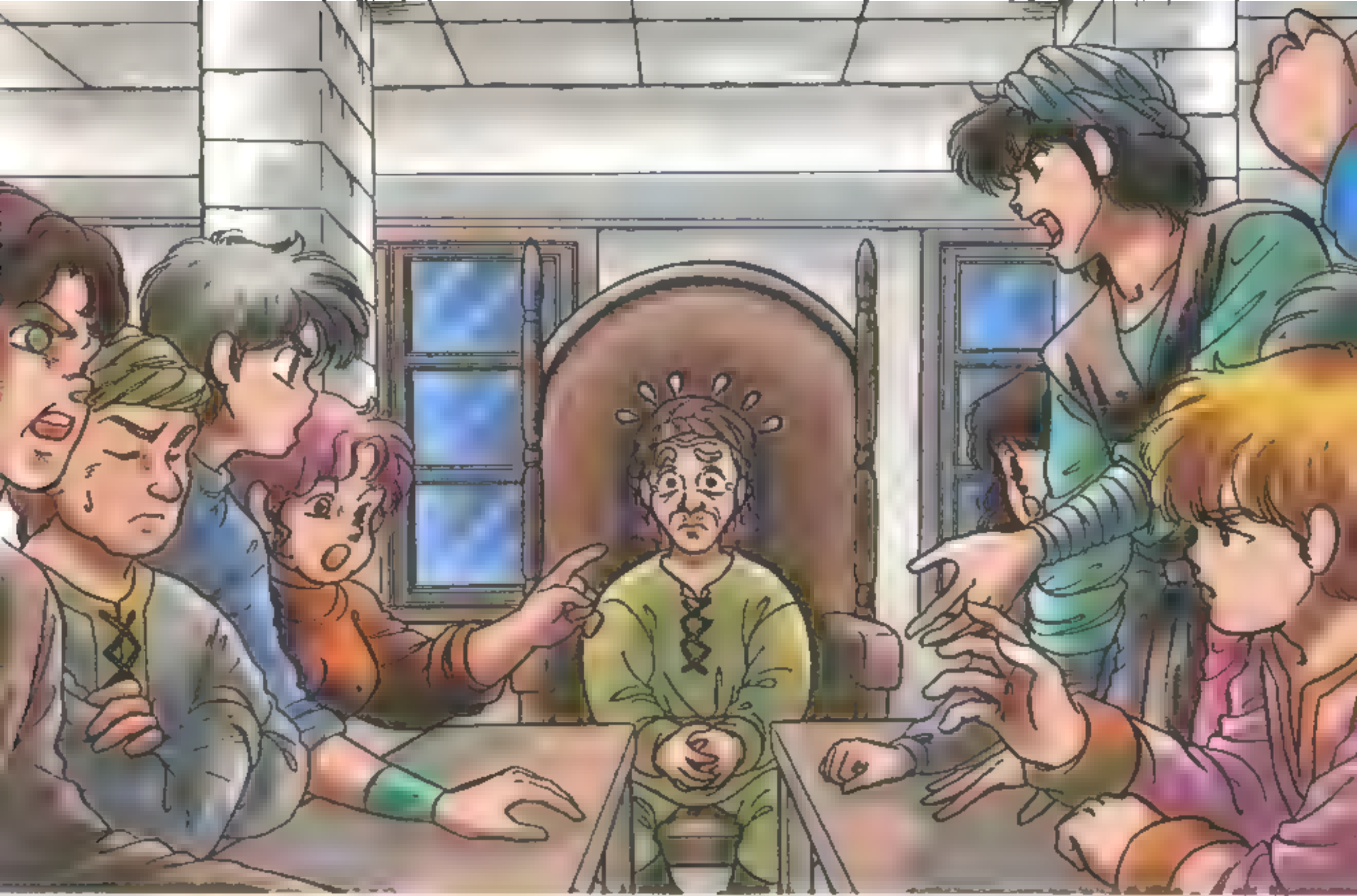
賑やかなこの街の裏通りに、アレフガルド中の商人たちの中心となる商工会議所があります。今日は何か大切な会議があるのでしょう。ここの二階にある大会議室には、すでに五十人ほどの人々が集まっています。

頑固そうな道具屋の主人や、几帳面そうな宿屋のおかみさん。みんなそれぞれに落ち着かない様子です。次から次へとタバコに火をつけては、いまいましそうに揉み消す白髪の紳士。窓から賑わう街の様子を見おろしている青年は、イライラしているのでしょうか、指先でコツコツとガラスを叩いています。

部屋の一番隅にあるソファーには、がっしりとした体つきの男がどっしりと腰をおろしています。この男はリムルダールに住む武器職人。手持ち無沙汰に腰にさしたみごとな細工のナイフを、シャツのそでで磨いています。その隣に座った鶴のように痩せた髭の老人は、メモ用紙をちぎってなにやら折り紙をこさえています。おや？　これはドラキーのようですね。ハーン、これはなかなか器用なモンだ。この老人もきっと何かの職人なのでしょう。

やれやれ、やっとのことでこの会議の議長が到着したようです。大きな椅子にちょこんと、小さな老人が腰掛けました。この老人は、ムーンペタの街で最も古い宿屋の主人。名前はクラップといいます。百年も前から代々宿屋を経営しているのです。

クラップ爺さんがコホンとひとつ咳払いすると、にわかに会議室中に真剣なムードがただよってきました……。

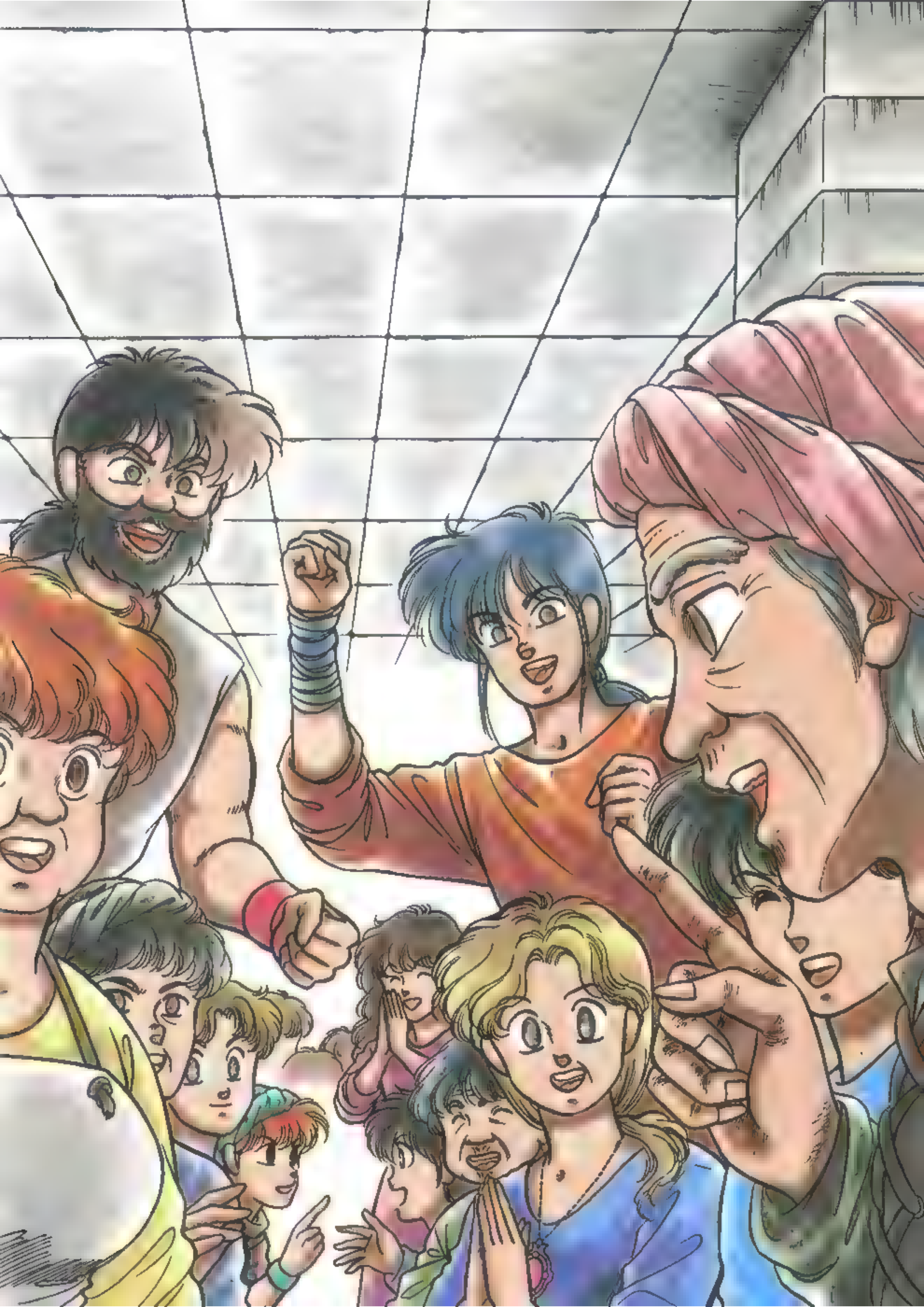
「さてさて皆さん、本日こうして集まってもらった理由は、もう先刻ご承知のこととは思うがの。わしらの商売のことじゃ。こんなことを言っては、他の街の衆にきらわれるかもしれんがのぉ。アレフガルドの地に平和がやってきてか

ら、どうも景気がよくなくなったようじゃ。実際、わしの宿屋じゃが、先月から数えてお客が十人にもならん……」

「お客が十人どころじゃないっっ!! オイラの武器屋なんざぁここ一年、まともに商売した日は一日もねぇ。最近じゃ、料理用の包丁だの、草を刈るカマだのを作ってどうにか商売しているありさまなんで……。ひい爺さんの代から受けついだ武器造りの技が、このままじゃ消えちまうよぉ!!」

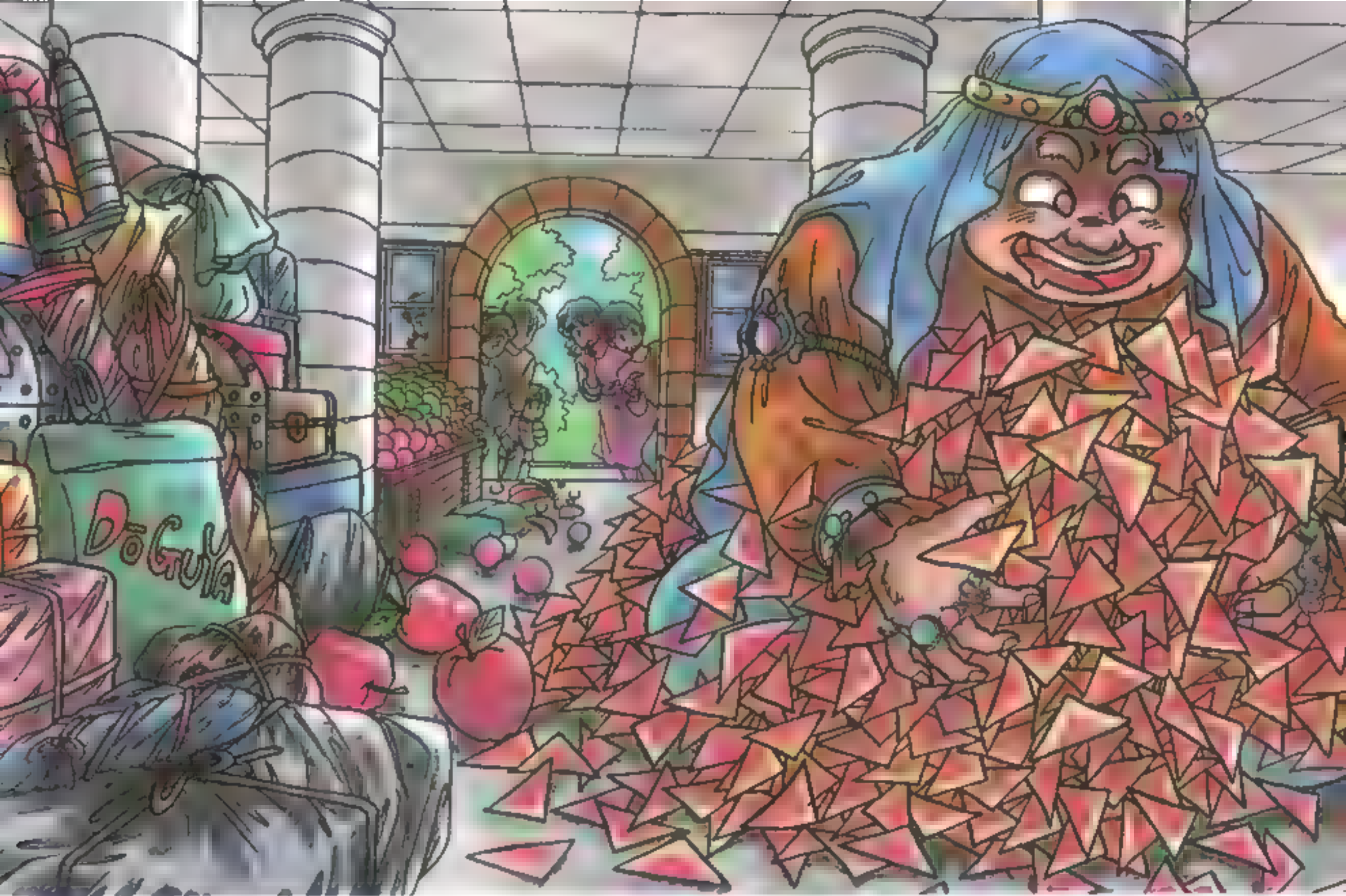
クラノプ爺さんの話が終わらないうちに、たまりかねたように武器職人が喋り出しました。つづけて、防具屋の主人が立ち上がりました。

「私の若い頃にはですな。男たちはみな普段から、おしゃれのためにカッコいい防具を身に付けとったもんです。それが最近じゃ、男までもヒラヒラした洋服を着るのが流行りとか……。遠くの国に冒険して、修行を積もうという若者もすっかりおらんようになった」

「そぉですよ。私はですね。リリザの街で宿屋をやってますがね。旅の勇者なんか、もうめっきりいませんね。ウチも家族づれの観光旅行者むけの宿屋に、商売がえしたんですがね。ホラ、近頃じゃ野山に凶暴な魔物もいなくて安

全なモンだから、キャンプってのが流行ってるんですね。おまけにスライムの餌づけツアーだの、山ねずみやドラゴンなんかを集めたサファリパークが大流行。おかげで客足の方はさっぱりなんですよねぇ」
「まったく、魔物ってのはいてもいなくても厄介モンだ!! ボクの家は魔物の毒に効く毒消し草や薬草を売っているんだけど、ヤツらがおとなしくなってから、襲われる人もいなくなっちゃったんだ。だから、だぁ〜れも薬草なんか買ってくれないんだ」
武器屋や防具屋、道具屋や宿屋さんたちの商売不振はかなり深刻なようですね。
会議の方は、みんなそれぞれに自分の不満を言い合うだけで、コレといった解決策がでないままに時間だけがすぎていきます。最初のうちは、怒りにまかせてしゃべっていた人たちも段々元気がなくなって、なんだか会議室中がシーンとしていきます。重苦しい雰囲気になってきました。
議長のクラップ爺さんは、窓の外の平和で楽しげな街の様子をじっと眺めていました。そして、たまりかねたように、静かにしかし皆によく聞こえるようにこう言いました。
「平和な世の中に、わしらの商売がうまくいかんとは皮肉なことじゃ。ここはひとつ何か、今の平和な世の中に合った楽しい商売の方法を考えたらどうじゃろうか……?」
「楽しいって言うと、たとえば半額セールとか……?」
「いいや!! 値引き合戦はよくないぞ。どんどん値引きがエスカレートして、しまいにはお互いの首をしめるようなモンだ」
どうにも話し合いは前進しそうにありません。
「みんなそれぞれの店ごとに、新製品を開発するってのはどうだろうかね?」
そう言ったのは、メモ用紙で器用に折り紙を作っていた老人でした。
「たとえば、剣やオノなどの職人はより高度な技を生かして、飾り物にもなるような美しい武器をつくればよいし、防具屋さんも、今のファッションを取り入れて、エレガントなヨロイを造ってみたらどうじゃろうか」
「そうか!! 薬草をいろいろと組み合わせて健康ドリンクを作るとか……」
「宿屋も特別にうまい料理を出したり、超デラックスな部屋を用意すれば、金持ち相手に商売できるぞっ!!」

なかなか皆さん、元気が出てきたようです。議長のクラップ爺さんも、ちょっぴり明るい表情です。
「それでは皆さん。今日のところはこれぐらいにして、一カ月後にもう一度集まることにしませんかの。その間に、いろいろと新しい商売の方法を考えるとしましょうぞ……」

——さてさて、あの会議の日から一カ月たちました。ムーンペタの商工会議所に、再びアレフガルドの各地から商人たちが集まってきました。
議長の椅子に座ったクラップ爺さんの表情も、前の会議の時とくらべれば、だいぶいきいきとしています。
「さてさて、どうかの皆さん。商売の方は……」
「前に比べれば、ちっとはましになったようだ。オイラは武器を造ってるんだが、剣のツカやサヤの細工を工夫してみたんだ。だけど、細工を工夫すればするほど、値段がグングン高くなっちまう……」
「そうそう、そうなんだ。ボクも父さんと一緒に薬草を使った健康ドリンクを作ったんだけど、手間ひまかかるモンだから、どうしても値がはっちゃうんだ」
「どの商品にしても、もっとドンドン売れるようになれば、大量生産してもっともっと儲けることができるのにねぇ」
今度の会議は、前に比べると皆さんとっても意欲的なようです。
「新しい商品のことを、もっと皆に知ってもらわなくちゃダメなんじゃないかのう」
「そうですよ、どうにかして、店に来てもらうような工夫が必要なんじゃないですかね」
「そうだっ!! 買い物をしたお客さんに、福引券をあげちゃうってのはどうかい!? みんなで少しずつお金を出しあって福引所を作ってさっ。そうすれば、きっと街中で話題になるにちがいないぞ!!」
「そいつはいいアイディアだ。オイラは賛成するぞ!!」
「ワシも賛成!!」
「賛成!」
「賛成!!」
と、いうわけで、あっという間にアレフガルドの各地の街には福引所ができました。
福引所があちこちにできたばかりの時には、その街によ

って福引の方法はまちまちでした。
ムーンペタでは、スロットで三つのマークを揃えるとそのマークによって景品が当たるという方式。リリザでは三角クジ。リムルダールではルーレットで当選番号を決めるお楽しみカードが配られました。
平和な暮らしを続ける人々の間では、この福引が大流行しました。小さな子供から、ヨボヨボのお婆さんまでみんな福引に夢中です。
街によって、福引の方法や景品がまちまちでしたから、人々はより当たりやすい福引をやっている街へ、よりデラックスな景品をくれる街へと、いそいそと出掛けていくようになりました。
最初の頃は、デラックスな景品といっても、せいぜい『黒コショウ』や『消え去り草』ぐらいのものでした。しかし、街どうしで競争しているうちに、どんどん景品は豪華な物になっていきました。
『祈りの指輪』が初めてムーンペタで景品にされた時、それはもう大変な騒ぎになりました。しかし、今となっては『祈りの指輪』ぐらいじゃ誰も喜んではくれません。
そこでリリザの街では、福引の一等景品に『命の石』を出すことに決めました。この話がアレフガルド中に広がると、たくさんの人々がリリザの街におしかけました。人々は必要のない品でも、福引券欲しさにどんどん買い物をしてくれます。武器屋も防具屋も、道具屋も何年ぶりかの大繁盛に大喜びです。
すると、ムーンペタの街ではリリザに対抗して『悟りの書』を一等景品にすると発表しました。こんどは人々がどっとムーンペタにおしかけてきます。
福引の人気は、それはそれはすさまじいものでした。福引に夢中になった人たちの中には、とうとうそれまでの自分の仕事を放り出して、アレフガルド中の福引所を渡り歩き、賞品稼ぎを商売にしてしまう者まで出てくるようになったほどです。
さてさて、福引券のおかげで品物は飛ぶように売れていきます。アクセサリー用の剣や、外出着にもなるおしゃれな鎧などは生産が間に合わないほどです。薬草を使った健康ドリンクも、各地でいろいろな種類が発売され、リムルダールの街には大きな工場ができたほどです。
クラップ爺さんの宿屋も、福引の景品につられて街から

街へと旅する人のおかげで、最近ではなかなか繁盛している様子です。しかし、クラップ爺さんはなんだか元気がありません。何か心配ごとがあるみたいです。

「福引所のおかげで、わしらの商売はたいそう良くなった。だがの、街ごとに高価な景品を競いあったりして、大丈夫なんじゃろうか……。現に、いまムーンペタで景品になっている『悟りの書』なんぞは、実はこの街にはなくて景品には決して当たらないように仕掛けがしてあるとの噂さえ流れておる。早いこともう一度、会議を開いて皆でキチンと話し合ったほうがいいじゃろう……」

クラップ爺さんの悪い予感は的中してしまいました。

リリザの街で、『命の石』をどうしても手に入れたがった大金持ちが、街中の店でありったけの買い物をして、三角クジを全部一人じめしてしまったのです。

こうなっては何のための福引か分からなくなってしまいました。リリザの街では福引券がなくなると、今度はさっぱり品物が売れなくなるという異常な事態となったのです。

その頃、ムーンペタの街でも雲行きが怪しくなってきま

した。いくらルーレットに挑戦しても、一向に当たりが出ないといって、人々が騒ぎだしたのです。

クラップ爺さんは、大急ぎで商工会議所の議長の名で、アレフガルド中の福引所に、一時閉鎖の命令書を出しました。

福引所が閉鎖されて、一週間後のことです。リムルダールの道具屋の息子がクラップ爺さんの所にやってきました。

「クラップ爺さん！　なんとかして福引所を再開してくれませんか。福引がなくなったら街の人たちはすっかり買い物がつまらなくなったみたいなんです。お願いです。このままじゃボクの店は倒産してしまいます。ついこのあいだ、たくさんのお金を借金して薬草ドリンクの工場を造ったんです。商品が売れなくて倉庫はいっぱいです」

実は、クラップ爺さんのもとには、この道具屋の息子が言っているのと同じような内容の手紙が百通余りも届いていたのでした。

「とにかく、福引所というアイディアはすばらしいものじゃったのだが、どうにもこのままでまた福引を始めるわけにはいかんぞ……。福引の方法や景品について、アレフガルド全域で統一した決まりを作らにゃならんことじゃ……」

それから間もなく、商人たちはムーンペタに集まり、緊急の会議を開きました。

クラップ爺さんが議長の椅子に座る前に、もう商人たちは勝手に話し合いを始めています。

「福引の方法は、やっぱりルーレットが一番公平なんじゃないだろうか？　同じ職人が同じ材料を使って、いくつかのルーレットを作り全国の福引所に置けば、どの街でも公平になるんじゃないかな……」

「それから、景品は一等を『祈りの指輪』と決めましょう。あれなら、そこそこに価値があるし手に入れるのもそんなに難しくないからね」

「よ〜し！　それじゃ決まった。さっそく明後日から福引所を再開することにしよう!!」

「そうしましょう！」

「そうしましょう!!」

商人たちは、とにかく福引所を再開させるために必死です。中には早々に、手紙をつけた伝書鳩を会議室の窓から

飛ばそうとしている者までいます。
「まあまあ、待たんかね。もうほんのちょっとでいいから落ち着いて、ちゃんと話をせにゃいかんことじゃ……。わしは今来たばかりじゃよ」
クラップ爺さんはできるかぎりの大声でこう言いました。
「いいや！　落ち着いてなんかいられねぇ。一時でも早くしねぇと、また前の貧乏武器屋に逆もどりだ！　とにかく何より福引所を再開することが先決だぁ」
「しかしのう……、福引が大人気になったのはデラックスな景品のおかげじゃった。いまさら『祈りの指輪』じゃ誰も喜んではくれんじゃろうて……。そうじゃろう、みんなもそう思わんかね」
クラップ爺さんがそう言うと、商人たちは、ハッと我に返りました。そして皆、しぼんだ風船のようにしゅんとなってしまいました。
「問題は景品だな」
「そうだ、ボクたちが手に入れやすくて、街の人たちにはなかなか手に入らない物にしなきゃね」
「それぞれの店の商品をプレゼントするとか……」
「それじゃ、店の物が売れなくなっちまう……」
「…………」
「……………」
なかなかいい意見が出てこないようです。
「そうじゃ、何かいい景品をわしらで作ればいいんじゃ！　たとえば、う～ん、いろいろな店で使える割引券なんてのはどうじゃろうかの」
ずっと腕組みをしていたクラップ爺さんが立ち上がりました。
「うん！　そうだ。その、いろいろな店で使える割引券ていうのは、福引の景品にぴったりだと思うぜ。みんな買い物をしたい気持ちになるしな。なんかこうかっこいい名前をつけたらいいんじゃないか？」
「一度、手に入れたら永久に割引してあげるようにしようじゃありませんか。そうだ、ゴージャスに薄く伸ばした銀に金箔を貼ったカードにして、名前は『ゴールドカード』というのはいかがでしょうかな……」
こうして、福引の一等賞品として『ゴールドカード』が誕生したのです。このカードは、道具屋や武器屋、防具屋でいつでも四分の三の値段で買い物ができるカードと決

められました。

アレフガルドの各地で、福引所が再開されました。一等の景品『ゴールドカード』は物珍しさからなかなかの評判です。前ほどのすさまじさはありませんが、福引はだんだんと人気を取りもどしたようです。

そうそう、ある日こんなことがありました。メルキドの街にやってきた吟遊詩人が、福引で一等に当たり『ゴールドカード』をもらいました。その吟遊詩人はめったに買い物などしない男だったので、たいして嬉しくなかったようでした。

しかし、この男が、旅の途中で深い森を歩いていた時のことでした。タマゴを産んだばかりで気のたっていたキメラが、突然襲いかかり、男の脇腹にガブリとかみついたのです。

ふつうなら命にかかわる大事件だったのですが、幸運にも彼の上着のポケットには『ゴールドカード』が入っていたのです。キメラがかみついたのはちょうどこのカードの入っていたポケットのあたりだったので、傷はほんのカスり傷程度だったそうです。

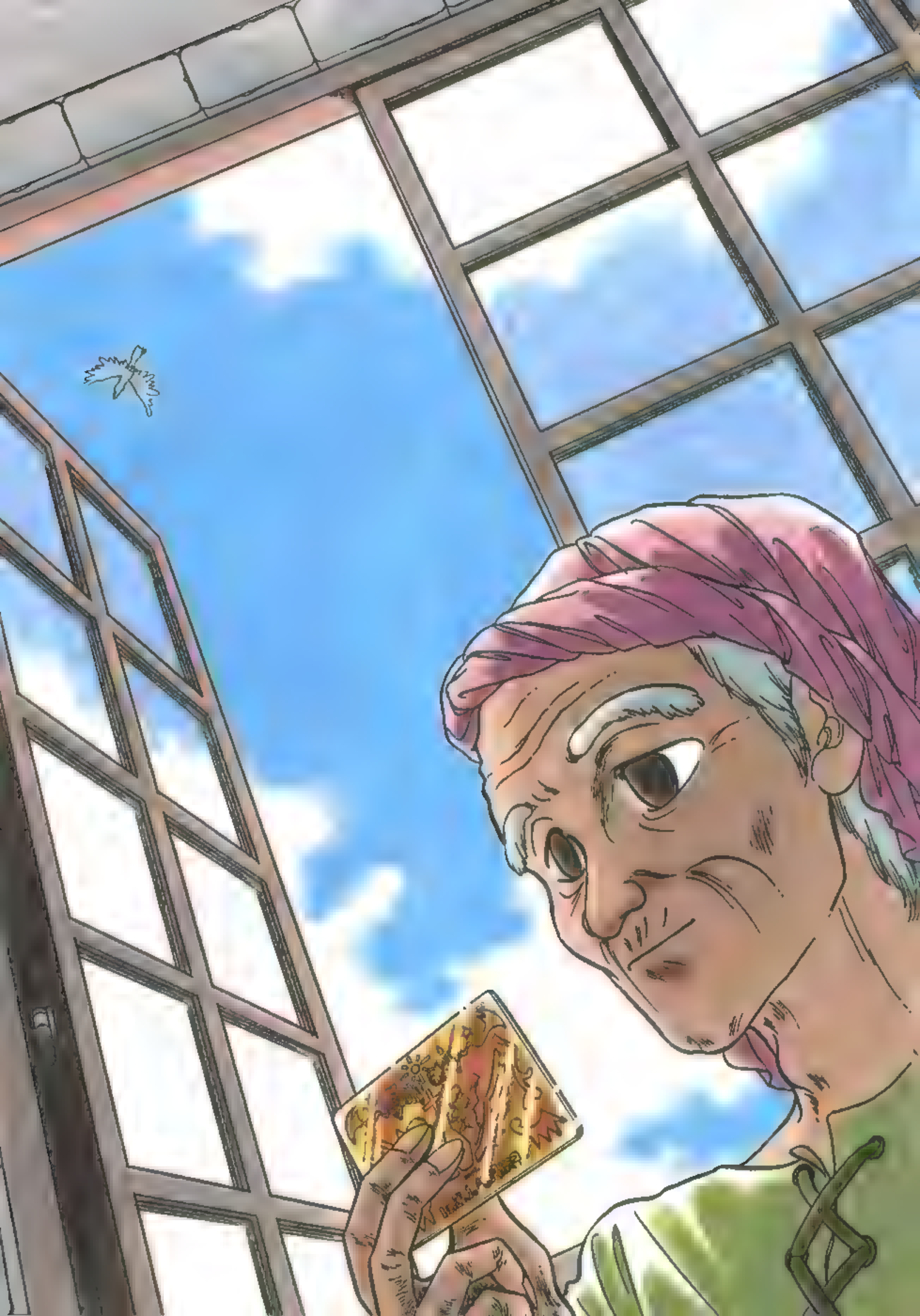
この事件があってから、『ゴールドカード』は『幸運のカード』と言われるようになりました。吟遊詩人が街から街へとこの話を広めるものですから、アレフガルド中で噂になったのです。

カードの発案者であるクラップ爺さんには、特別に『ゴールドカード』が一枚、プレゼントされました。クラップ爺さんの宿屋も最近、おいしい料理と葡萄酒のおかげでほどほどに繁盛しているようです。

「街の噂のように、このカードが『永遠の幸せ』を約束してくれるといいんじゃがなぁ……」

その時、クラップ爺さんの頭の上を真っ白な伝書鳩が、羽飛んでいきました。

鳩の足輪には、ムーンブルグが魔物の大軍に襲われ全滅したとの知らせが入っていたのですが、もちろんクラップ爺さんも街の人々もそんなことは知りませんでした。

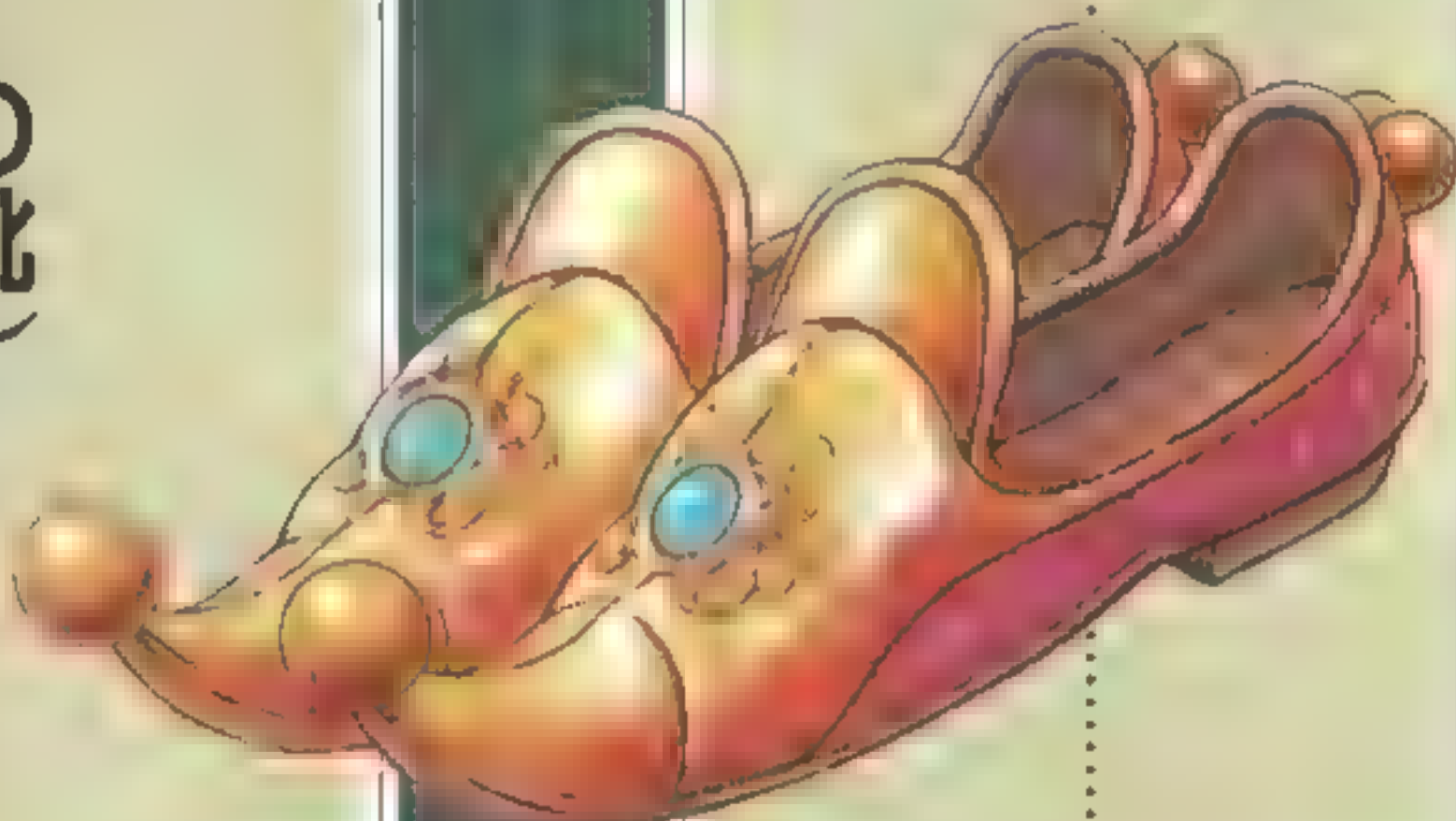
アレフガルド小劇場

おお!ゴールドカード!!

●ゴールドカード●

ゴールドカード…定価の4分の3の価格で買物ができる特別なカード

SHOES OF HAPPINESS

幸せの靴

（アルフガルド創世期　妖精ネリーの靴）

SHOES OF HAPPINESS

今を去る遥か数千年の昔……。
聖霊ルビスがアレフガルドを創造してから、まだいくらも経っていない頃のことでした。
天地創造直後のこの時代は、確かに大地には色とりどりの草花が咲き乱れてはいましたが、まだ生き物の姿はほとんど見られない、静かな、でも少し寂しい世界でした。

初めにこの地へ移り住んで来たのは、はるばるムーの国からやって来たほんのわずかな人間たちと、ルビスを心より慕って集まった妖精とホビットたちでした。

選ばれた移住者たちはいずれも正直で善良な若者たちでしたが、職人や農夫として一人前に働ける者はほんのわずかでした。

そしてもちろん、戦士や魔導師として戦える力量を持った者も数えるほどしかいなかったのです。しかしそれは新天地に平和な国を造るためにはむしろ好都合でした。

戦いで勝ち得た繁栄が元で滅んでいったムーの悲劇を繰り返さないために……。

周囲には恐れる魔物もほとんど出没しないので、暮らし向きは良かったようです。まぁ、あえて恐怖を感じさせるものは、この世界が創造されたときに生み出されてしまったギズモやガストという、実体の失われた魔物たちだけだったようですから。それも、ほとんど襲ってくることはなかったようです。

食生活もだんだんと安定の兆しをみせていました。海では、人間がムーの近海から持ち込んだ魚介類が次第に繁殖し始めたので、二か月も経った頃には、いつでも好きなときに新鮮な海の幸が獲れました。野山にも、木の実や山菜などの食物が豊富に実っているようです。

しかし、彼らだけのそんな平穏な生活も、残念ながら決して長続きさせることはできませんでした……。

この世界が住み良い土地であるということが魔物たちに知れ渡ると、魔物たちは徐々に徐々に侵入してきたのです。日に日に数を増す魔物たちのおかげで、毎日数時間は、魔物と戦わなくてはなりません。

実は、それが、人間と他種族との不和を深めていったのです。

つまり、その要因は人間の戦闘能力の問題だったのです。当初のギズモ程度の魔物でしたら、人間でもゆうに互角に戦えたのですが、後に侵入してきた力の強い魔物相手では、とても歯が立ちません。このような強い魔物と戦うのは、いつも、力の強いホビットや、超能力のある妖精たちの役目になっていたわけです。いくら寛容な妖精やホビットの面々も、これだけは命がけの大仕事。あまりにも負担がかかりすぎていたのでしょう。

ことあるごとに、人間たちは悩みました。

「……やはり僕たち人間は、ダメな種族なのかなぁ……」

「……そうね、私たちの力は、魔物と戦うには弱すぎるものね。それに、それだけじゃないわ。畑で野菜を作っても、海で漁をしても、私たちよりもホビットたちのほうが、ずっとずっと上手だもの」

生まれながらの特殊能力を身につけていない人間たちは、自分たちの力のなさに苦悩しました。争いごとが頻繁になるに連れて、次第に劣等感は高まるばかり……。

一方、ホビットたちや妖精たちのほうも、陰でこそこそしているそんな人間たちを、だんだん相手にしなくなっていきました。毎日襲ってくる魔物の相手をするだけで、もううんざりしている感じです。

妖精やホビットが、人間とまったく口をきかなくなってからしばらくたったある日、人間たちはついに完全に自信をなくしてしまいました。そして、今まで一生懸命続けてきた畑仕事もやる気をなくし、それからというもの、まるで働かなくなってしまったのです。こうなってくると、他種族との不和は一層深まるどころか、絶縁状態です。

それでも、中には必死で努力して力をつけようとする人間や、澄んだ心を失わずに持ち、そんな人間を助けなければと考えている妖精やホビットもいたようです。しかしそれはほんのひと握りの者たちだけで、事実、大部分は反発しあっていました。

こんな状況に、一番心を痛めていたのは、他ならぬ精霊ルビス自身でした。自分が造り出した世界が間違った方向に向かっていくのを、このまま黙って見ていることほど、辛いものはありません。

「このままでは、このアレフガルドを立派な世界にすることはできないでしょう。それどころか、いずれは魔物に滅ぼされてしまうのではないでしょうか。何かよい方法はないものでしょうか……」

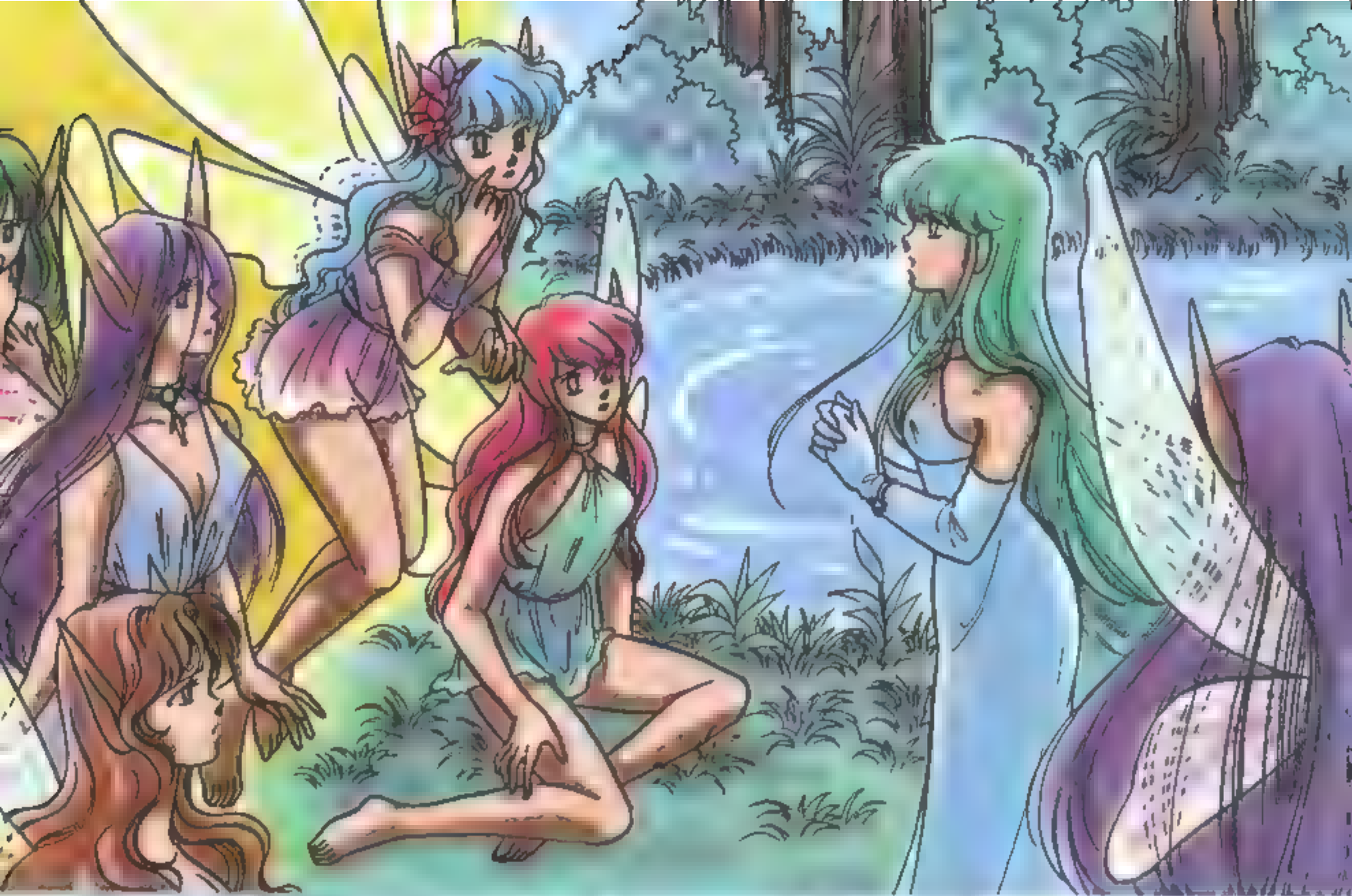
ルビスの悲痛の表情をまのあたりにし、その言葉に申し訳なさそうに側近が答えました。

「ルビス様、もともと人間と他の種族では、その持つ能力に違いがありすぎるのではないでしょうか」

もうひとりの側近は、さも自信ありげにこう言いました。

「そうですとも、やはり、この世界は人間抜きで造られたほうが良かったのですわ。私は最初から、そう思っていま

したとも」
これはどうも、下界に降りずにルビスの周りで仕える妖精たちまでも、人間に対してあまりいい印象を持っていないようです。
しかし、そのとき、一人の妖精が立ち上がり、みんなの前に出てその場をしずめるべく、果敢に発言しました。
「み、みんな、何てことを言うのです！　胸に手を当てて、ルビス様がこのアレフガルドを造ったときのことを思い出してごらんなさい」
ざわめきは一瞬にして静まり、妖精たちは一様に視線を落として困惑しました。
そうです。精霊ルビスがアレフガルドを造る発端となったのは、堕落し腐敗したムーの国を、神々が滅ぼそうとしたからなのです。
しかし、心優しいルビスが、数百万にも及ぶムーの人々がすべて滅びるのを黙って見ていることなど、到底できるはずがありませんでした。そこでルビスは、遥か遠い異空間にアレフガルドという地を創造して、ムーで暮らしている人々の中より、善良な心の持ち主だけを選び出して共にやって来たのでした。

「……みんな、あのことを忘れたの？　この地にいる人間は、ルビス様がお連れになったのです。それを今さら、人間抜きの世界にしようなんて、できるわけないでしょう」
妖精たちは、仲間の言葉に恥じ入って消沈しました。
「今は非力な人間たちだって、努力すれば、これからあと何世代かのうちに、きっと私たちやホビットに負けないほどの力を身につけるはずですわ」
しかし、ルビスは冷静に答えました。
「ありがとう。あなたは、私の心をよく理解してくれていますね。……しかし、残念ながら、人間たちが力を身につけるまでただ待っているのでは、時間がかかりすぎるのも事実なのです。困ったものですね……」
ルビスが言ったとおり、待つ余裕は少しもありません。このアレフガルドを襲ってくる魔物たちは、刻一刻と数を増し、しかもどんどん強力になっているのです。
「……うまくいくかどうかはわかりませんが……」
黙り込んでいた妖精たちのなかから、やや年期の入った声が聞こえました。その声の主は、アレフガルドへ同行した妖精のうち最も年長者である、ネリーでした。
「どうでしょうか、ルビス様。二千年生きたこの私が、こ

この地に同化するというのは……。私が同化すれば、大地に霊気を与えて、少しは人間の力になってやれるのではないかと思うのですが……」

ネリーは、自分の人生を人間に捧げて、彼らに活力を与えようと言い出したのです。

妖精には、人間や他の生き物とは違い、寿命というものがありません。肉体的には、ほとんど無限に生き続けることができるのです。しかし、千年、二千年と生き続けた妖精は、全うした自分の人生を捧げられる大地と同化して姿を変え、その後は土地の精霊として、その地に生きるものを見守るという風習があるのでした。

古来、人間が祝福された土地、あるいは神聖な聖地としてあがめられている場所には、たいがいそういった妖精が宿っているのでした。

ルビスが創造して間もないアレフガルドには、当然ながらまだそんな場所はありません。ネリーは自らの人生を終結し、持てるすべての力を捧げて、このアレフガルドに同化しようと思いたったのです。ですが、それは同化してしまったら、二度と元の妖精の姿には戻れないということも

意味していました。
　思わぬ決意に、妖精の仲間たちは驚嘆しました。そして、必死に止めようと説得しましたが、ネリーの決意はそんなに簡単に変わるようなものではありません。
「私ももうだいぶ年をとったようですから、今が潮時かと思っているのです。どうでしょう、ルビス様？」
「……わかりました。あなたの気持ちは、とてもありがたく思いますわ。でもネリー、せっかくあなたが、このアレフガルドに住む人間たちに力を与えようとしても、広大な大地に同化してしまっては、意味がないかもしれませんよ」
　ルビスの心配はもっともでした。つまり、こういうことです。例えば、美しい泉に妖精が同化すれば、そこは神聖な泉と化します。そこで水を飲んだすべての者に活力を与える泉になるわけです。となれば、もし大地と、アレフガルド全土と同化したなら、いったいどんな結果になるのでしょうか。その地を歩くすべての生き物が、ネリーの与える力を得てしまうことになります。人間ばかりでなく、ホビットや他の動物たち、それに魔物にまで、ネリーの力を吸収されてしまうことになるのです。これでは、かえって逆効果になってしまうわけです。
　しばらく、また沈黙が続きました。でも、今度は皆、前向きな考えを思案しているようです。
「あ、そうだ！　いっそのこと思い切って、生き物ではなく、何かモノに力を与えるようにしたらどうかしら？」
　ひとりの妖精に、とっさにいいアイデアがひらめいたようです。それは、特定の、あまり他にはないような品物に力を与えるという意志をもって、大地に同化してみたらということでした。そうすれば、そのモノを伝わって、それを手にした人間だけがネリーの力を得ることができるはずです。もちろん、うまくいけばの話ですが……。
「でもサ、ありふれたモノじゃダメよねぇ。ルビス様や私たちから、これは、と思うような人間に力を与えたいもの。誰でもいいってわけじゃないわよぉ」
　確かに。誰でもすぐに手に入るようなものでは、あんまり意味がないかもしれませんね。
「そうだわ、そういえば、確か王者の剣を造ったときのオリハルコンが、まだ少し残ってたんじゃありません？」
「そうよ、まだあるはずよ、調べてみましょうよ」

本来は明るい妖精たちのこと、みんなすっかり気を取り直して、画期的なアイデアがポンポン飛び出してくるようになりました。それにしても、オリハルコンとはいいところに目をつけましたね。武器の材質として最も優れているオリハルコンは、まさに万能の金属なのです。薄く延ばしてやれば、まるでなめした革のようにしなやかになるのです。

妖精たちは、この残りわずかなオリハルコンを丁寧に延ばして、ひとつひとつ心を込めて靴をこさえました。何足かの靴ができたとき、もう二度と仲間と会えなくなるネリーの心の準備もできたようです。

数日後、この妖精たちの願いが込められた靴を持ち、ネリーはアレフガルドの一番高い山の頂に立ちました。そしてしばらく瞳を閉じ、満身の力を集中しました。

一瞬、山の頂はまばゆい光に包み込まれました。ネリーは、ついに自らの心と身体を解き放ったのです。

まばゆい光は、やがて妖精の姿にゆっくりと戻り、そして春の空に舞う霞のような緒を描きながら、アレフガルドの大地に吸い込まれていきました。

あれから数年の月日が経ちました。アレフガルドは、少しずつ人口が増え、いくつかの村が構成されるようになりました。妖精たちがしきりに心配していた人間社会も、ルビスが言うように、時間が経つにつれて発展していったのです。それも急激に……。

組織化し、みんなで力を合わせて努力することで、他の妖精たちやホビットたちに負けない力や知恵を活用できるようになったのです。もちろん、そうなれば妖精やホビットたちとも、以前のように仲良くつき合えるようになりました。ただ、違う種族同士で一緒に生活することは、現在ではあまり見かけないようですが。

でも、これはネリーが直接力を与えたものではなく、人間が自発的に努力して得たものなのです。

せっかくネリーが同化したのに、その効果はどうなっているのでしょうか。結果的には良くなったので、特に問題はないのですが、このままじゃちょっと残念な気もしますよね……。

ある日、山で薪拾いをしていた若者が、はぐれメタルの群れに遭遇したときのことです。そのとき彼は、魔法使

いの友人から分けてもらった毒針を一本、運よく懐に忍ばせていました。思わぬ大量の魔物に少したじろぎましたが、彼が身を引きざまに投げた毒針は、見事に一匹のはぐれメタルに命中しました。そして、それだけでもかなりの手柄なのですが、さらにもうひとつ思いもよらぬ良いことがあったのです。そのはぐれメタルが、黄金色に染まった靴を持っていたのでした。さっそく、戦利品のその靴を履いて、若者は家路につきました。

「あれ、ヘンだなぁ。おれは今日、朝からずっとメシも食わずに動き回ってたのに、ぜんぜん疲れてないや。それに、まるで腹がへってないような気がする……。さっきまで腹ペコだったのになぁ」

家に戻ってからしばらくして、若者はいつものように薪割りを始めました。するとどうでしょう、昨日までは、とてもじゃないけど連続では振れなかった重い斧で、今日はポンポン軽〜く仕事をこなせるのです。

「う、うそだろ〜、こんなことってあるのかなぁ。あんなに重かった斧が、うそみたいに軽いぞ。アハハ、こりゃいいや。……でも、待てよ……。こんな夢みたいなことが起こるなんて、ただごとじゃないぞ。ま、まさか、あの靴のせい？　うん、きっとそうに違いないや。やった〜、これでおれも、意外と早く戦士になれるかもしれないな、へへ」

翌日にも、村一番の力持ちである彼は、村の戦士としてみんなに認められるようになったそうです。

この噂は、あっという間にアレフガルド全土に広まりました。それ以来、オリハルコンで出来た靴をはいてアレフガルドの大地を歩む者には、知らず知らずのうちに活力がみなぎる不思議な力が授かるということを、誰もが知るようになりました。

その靴は、底に刻まれた「NELLY」の文字から、しばらくはネリーの靴と呼ばれていましたが、そのありがたい効力からして、もっと親しみを込めて呼ぶ呼び方が生まれたようです。『幸せの靴』……と。

アレフガルド小劇場

再会、母よ……

刃の鎧：全身に刃や刺がついていてダメージをはね返す鎧

光の玉の最後

●光の玉●

光の玉：邪悪な者から闇の衣をはぎ取る力がある、光輝く聖なる玉

GOLD CLAW

黄金の爪

（魔王の叫び声　黄金の爪）

GOLD CLAW

ここは漆黒の闇の世界に聳え立つ大魔城……。
丈が足首にも及ぶマントを羽織った魔王バラモスと、渋い顔をして玉座に座る暗黒の大魔王ゾーマが、何やら互いに腕組みしながら話しあっているようです。
「いや～しかし、いったいどうなされます？　ゾーマ様」
「……う～む。だが、せっかく新製品ができたというのに、それを使わぬのはもったいないと思わんか、バラモスよ」
「確かに。しかし、暗黒回廊があれでは、心配で心配でとてもじゃないけど今は送れませんぞ」
「そうだのう。う～む……」
大魔王と魔王たる者が、二人してがん首そろえて悩み込むのも無理がありません。
今、暗黒界では、エビルメタルという新しい金属が開発されていました。エビルメタルは、魔界で採れる鉱石の中でも、一番硬いとされているエビリアル鉱石を精製して造った金属です。
今まで、エビリアル鉱石はあまりにも硬すぎて、魔界では武器用の金属に精製することができなかったのですが、営々進められてきた研究の成果が実って、このほどついにその精製に成功したのです。

ところが、問題はそれを人間界に送り込む方法なのです。
人間界と暗黒界を、魔物が自由に行き来するのには、暗黒回廊と呼ばれるところを通して行なっています。
この暗黒回廊とは、大魔王ゾーマが人間界侵略のために設けた、暗黒の世界と地上の世界とを結ぶ、いわばエレベーターのようなものなのです。
大魔王がいる暗黒界と、人々が住む人間界は、違った次元に属しています。
この次元が違う二つの世界を行き来するには、どちらにも属さない亜空間に設けられた暗黒回廊を通らなければなりません。
そして武器用の金属などを送り込むのにも、これを使うのですが、問題は魔物と金属がいっぺんに送れないというところにあるのでした。
困ったことに、この回廊の出口は人間界のかなり上のほうに開いているらしく、意志を持たない金属などは、せっかく送ってもどこへ落ちるのかわからないのです。
人間界の空に飛び出た金属は、流れ星のようになってどこかへ落ちていき、それを見ていた人間たちが拾って持っていってしまうのです。

「そういえば、今までに送った金属は、どうなっているのだ、バラモスよ？」

「いや～、それが半分くらいは人間どもの手に渡っているという始末でして……」

「……そうか。だが、このエビルメタルだけは、人間どもに渡すわけにはいかんぞ。なにせえらく貴重だからな、バラモスよ、お主何かいい案は浮かばんのか？」

「そうなんです。ふ～んふ～ん……。あっ、こんなのはどうでしょう。どうせ流れ星になってしまうんなら、いっそのことうんとデカいやつをこしらえたらどうでしょうか。そうすれば、落下した瞬間にエビルメタルは地中深くに埋まってしまいますゆえ、まず滅多なことじゃ人間に見つかる心配はないと思うンですが」

「……おお、そうか。だが、もし見つかったらどうするのだ？ 貴様どう責任とるのだ、ン？」

「うっ……。ならば、それに魔物しか分からない印をつけたりしたらいかがなものでしょう？」

ほほー、それはグッドアイデアかもしれませんね。

こうして、さっそく魔界の技術者が集まり、緊急会議が開かれました。

「印をつけるったって、どうすりゃいいんだよ……」
「オレたちだけが分かるモノねぇ……。匂いをつけたって、人間界につくまでに、消えちまうだろうからなぁ」
とはいうものの、なかなかいい方法が浮かびません。
若い技術者たちが頭を悩ませているとき、側で黙って見ていた一人のドルイドが、画期的なアイデアを提供してくれました。
「ゾーマ様の声を吹き込むってのは、どうじゃな？」
声を吹き込む……。つまり、エビリアル原石がまだドロドロに溶けている状態のときに、大魔王の生の声を吹き込むのです。そうすれば、凶凶しい暗黒界からのメッセージは、固まってからも金属から常に放射され、魔物ならばその存在がすぐに分かるという具合です。
「我は闇の支配者ゾーマなり……。邪悪と悲しみを糧とする我が僕たちよ、今ここに集わん……」
溶けた原石の前で、大魔王の恐ろしい声が響きました。
「ハッハッハッハー！　これできっと人間どもを血祭りに上げてみせるわい。ハノハノハノハッ」
こうして暗黒からのメッセージが吹き込まれたエビルメタルの塊は、暗黒回廊を通してついに人間界へと送り込まれました。
しかし……。苦心して細工を施したにもかかわらず、どうしたことか、このエビルメタルは行方不明になってしまったのです。
その後に続けて送られた他の金属は、すべて大魔王の声に導かれた魔物が回収したというのに、肝心のエビルメタルだけは、いつまでたっても未発見のままでした。
「おっかしいなぁ、海にでも落ちちまったのかな」
「いや、それなら海の魔物が発見するはずだぞ」
でも、当の大魔王は、他の金属がみんな無事に魔族の手に渡ったことに気をよくして、エビルメタルのことなんてすっかり忘れてしまったようでした。

そして時が経つこと十数年……。
ここは砂漠の国、イシス。
東の鉱山から、伝令を乗せた馬が一頭、猛スピードで城に向かって突っ走っていきます。
「陛下、ご報告いたします！　鉱山の最深部で、なんとも不可思議な鉱石が発見されましたっ」

「何っ！　不可思議な鉱石じゃとっ？」
そうです。建国者ファラ王の御前に持ちこまれたのは、紛れもなくあの大魔王ゾーマが送り込んだエビルメタルだったのです。
「ほほう……。金のようにも見えるが……」
「いや陛下、恐らく違いまする。あの山は、金なんぞ採れませんぞ」
鉱石の専門の学者たちにも、さすがに魔界の金属のことなどは分かりませんでした。
「しかし陛下、この石を目にしてから、どうもわしは胸騒ぎがしてなりませぬ。出来ることならば、この石は早々にどこかへ処分されたほうが、よろしいかと……」
ファラ王に注意を促したのは、王室に長く仕える老賢者でした。
「な、何をいわれるか賢者殿。せっかくこのような美しく珍しい鉱石が手に入ったというのに、其方は処分しろというのか！」
鉱山を司る大臣が、血相を変えて反対しました。
「じゃが、得体の知れぬ石を城に置くのはいささか……」
「何が得体が知れぬというのだ。このように立派に輝く美

しい鉱石ではないか」
　この見たこともない珍しい石を前にして、なかなか意見がまとまりません。
　結局、この鉱石はいったん城の地階にある倉庫に保管され、利用法については後日相談して決めるということになりました。
「う〜む。しかしずいぶんと硬度があるようだな。こりゃやはり武器として利用するのが一番じゃないかな」
「ああ。私もそう思うのだ。だが、まずこれを何に加工すればよいかだ」
「剣がよいでしょうな、やはり」
「いや〜、盾がいいですよ。これだけ硬ければ」
　陛下から鉱石の利用法を託された大臣が、数人の武器職人を集めて何やら話し合っています。
　でも、今度は何に加工するかで、また、もめていました。
「どうせなら、我が国に最も貢献する武器を作るのが、一番いいと思うのですが。つまり、我が国で一番強い男に与える武器を造るのです。いかがです大臣殿？」
「そうか。我が国で一番強い男というと、アレックスではないか。でも、彼は武闘家だぞ」

　このアレックスという武闘家は、確かに現在のイシスに最も貢献している人物といっても過言ではありません。
　というのも、今を去る三か月前、かねてより砂漠で異常発生していた魔物の大群が、いきなりイシスの街へ攻撃を仕掛けてきたのです。
　その数、およそ二百匹！
　ですが、なんとちょうどその頃、イシスの兵士たちは、のんきなことに夏休みをとって、過半数がどこかへ遊びに出かけていたのです。
　そこに運よく居合わせたのが、このアレックスという旅の武闘家なのです。この緊急事態を知ったアレックスは、自分から率先して魔物の群へ飛び込んでいき、魔物をバッタバッタとやっつけていったのです。
　しかも素手で！
　おかげで、ほとんどの魔物は彼一人の力で倒され、アレックスはイシス初の国民栄誉賞を国王から与えられたのでした。
「アレックス殿ですか……。しかし、武闘家の方は武器は使わないんじゃないでしょうかねぇ」
「うむ。私もそう思うぞ」

「いやー大臣、それがですね、他国には、武闘家が使う優れた武器として、鉄の爪というものがあるらしいんですよ。で、そいつがまたえらく具合がいいらしくて、力のある武闘家が使えば、かなりの戦闘力になるそうなんですよ」
「ふーむ、鉄の爪か……」
「そうです。それに、もしこの鉱石が今後も順調に採掘できるようになれば、量産して、我が国の武器輸出利益がさらに大きくなると思いますよ」
「よし。やってみろ。ただし、粗末なものは造るでないぞ。この素材で造れば、武器としてだけではなく、美術品としても通用するだろうからな。ハッハッハッハッハッハ」
腕のいい武器職人と鍛冶屋、さらに一級の彫刻師が集まり、謎の鉱石はじっくりと時間をかけて姿を変えていきました。
こうして、見た目も美しい武闘家用の武器が出来上がりました。
「ほう、なかなか良い出来栄えではないか。黄金のような輝きまでも放ちおって……。おお、そうだ、これは黄金の爪と名づけようぞ」
ファラ王も、この武器の出来にすっかり満足されたようです。
ところが、ちょうどその時でした！
一人の見張り兵が、息を切らして王の室に飛び込んできました。
「た、大変です陛下！　我が国に向かっていたキャラバンの一行が、砂漠で魔物どもに襲われていますっ！」
「何、それは本当かっ！」
「……。陛下、ご安心下さい。このわたしが、そんな魔物などすぐに片づけてまいりましょう」
王室に招かれていた武闘家のアレックスが、まだ出来たばかりの黄金の爪をわし摑みにして、さっそうと飛び出していきました。
陛下にいいところを見せようと、アレックスはまたしても、たった一人で魔物の群れに飛び込んでいったのです。
「フッ、まずは軽く肩ならしといくか……。アァアァアチョオ～ウー！」
武器なしでも強い武闘家のこと、ましてや黄金の爪を着けているのですから、ほとんど無敵という感じです。
「アチャッ、アチャッ、アチャチャチャチャチャチャ……」
キャラバンを襲う魔物たちはつぎつぎと倒され、あっと

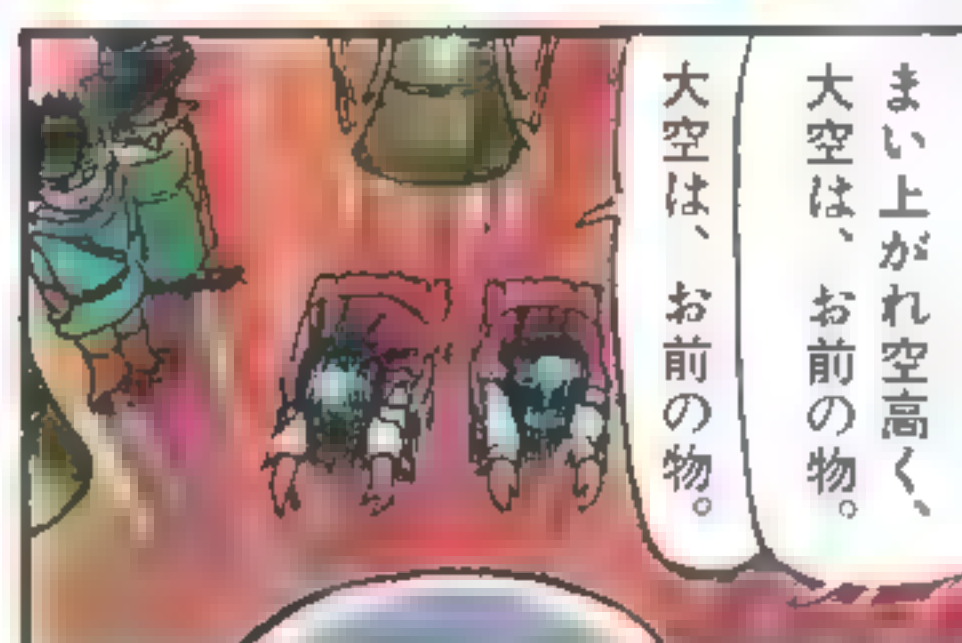
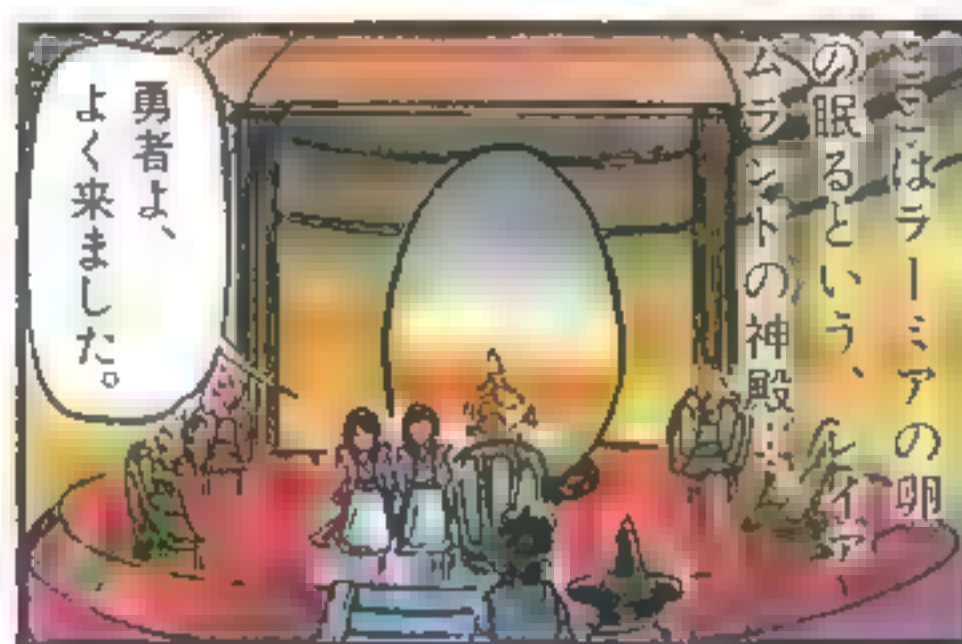
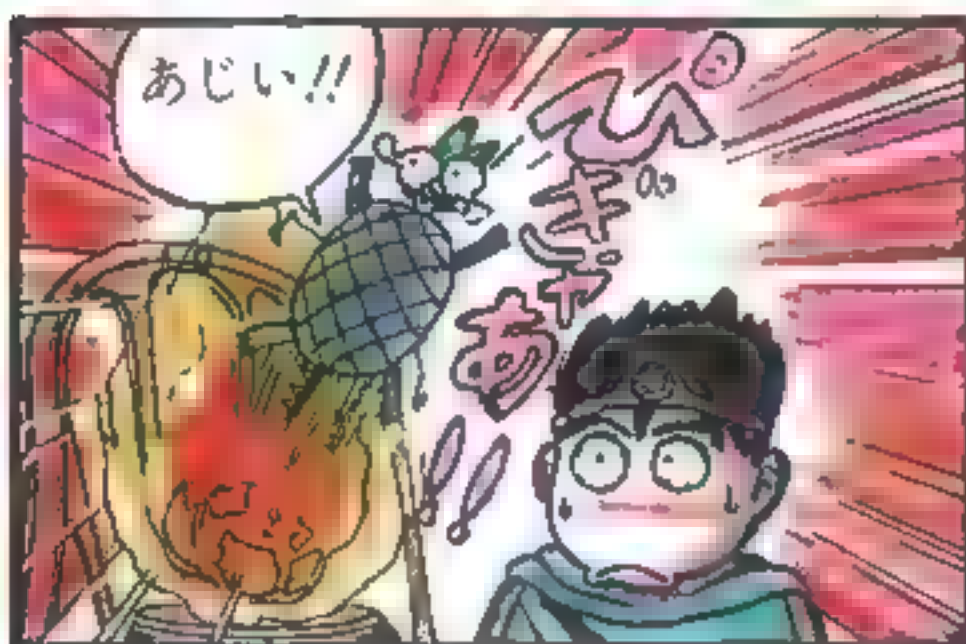
いう間に撃退されていきました。
……ところが……。
「うぬっ、おかしい。なぜだ。なぜ、あとからあとから、魔物が現れるのだ？　アチャッ、アチャッ、ハァハァ」
　魔物は確かにつぎつぎと倒されていくのですが、砂漠の砂の中からは、またどんどん新しい魔物が現れてくるのです。
「アチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャタ〜、くそっ、もう千匹は倒したと思うのだが……」
　魔物の数は、こないだの異常発生のときよりも、さらにスケールアップしていました。
　しかも、魔物たちはなぜかみんな何かを口走りながら、武闘家を襲ってきます。
「ゾーマ様、ゾーマ様……」
「ゾーマ様が我らを呼んでいらっしゃる……」
　砂漠の中から現れるのは、火炎ムカデに地獄のハサミ、キャットフライやミイラ男……。そればかりではありません。遠くアッサラームにしかいないはずの、あばれ猿までもが武闘家に襲いかかっていきました。
「アチャッ、ハァハァハァハァ、アチャッ、アチャッ……

ハアハア、くくっ、くそっ、なんなんだ……」
　つぎからつぎへと現れる魔物の執拗な攻撃に、アレックスもだいぶ疲れてきたようでした。
　しかし、ここでアレックスは、魔物の攻撃が、いつもと違って妙にかたよっていることに気がつきました。
「ハアハアハア、おかしいなっ、こやつら、なぜにオレの右手ばかりにしがみついてこようとするんだ……？」
　そうなのです。魔物は、アレックスの利き腕に装備された黄金の爪に向かって、不気味に擦り寄ってくるのです。
「げげっ、こ、これが、こやつらの狙いなのか？」
　魔物が黄金の爪を狙っていることに気がついたアレックスは、あわてて右手に装備されたものを外そうとしました。
　しかし、着けるときはすんなりと着けられたのに、外すときには、なぜかグイグイ締めつけられて手にくいこみ、なかなか外れません。
　こうしている間にも、魔物は襲ってきます。この瞬の油断が、彼の命取りになってしまいました。
「う、うわぁぁぁぁああああ！！！！」
　思わず頭を抱えるようにしゃがんだアレックスめがけて、魔物はつぎつぎと覆いかぶさっていきました。
「おおぉ、なんということだ……」
「おお、あの武器に向かって、魔物が集まってくるぞ」
　一部始終かたずをのんで見守っていたイシスの人々も、魔物が黄金の爪に向かっていくことに気がついたようでした。
　風に砂ぼこりがさらわれ、そこには無残にも魔物の群れに押しつぶされたアレックスだけが残されていました。

　後日、イシスのために命を投げ出して戦った勇敢な武闘家アレックスをたたえ、ファラ王は彼のなきがらを、本来は王室の人々しか入れないという王家の墓ピラミッドに特別に収めるよう、命令をくだしました。
　そして、彼の唯一の形見である黄金の爪も、いっしょに棺に収められました。
「……やはり思ったとおりじゃった。あの石には邪悪が宿っていたのじゃ。もう二度と、あの黄金の爪が世に取り出されなければ良いがのう……」
　葬儀の列を遠くから見つめていた老賢者は、彼の冥福を祈り終えると、独り言をつぶやきました。

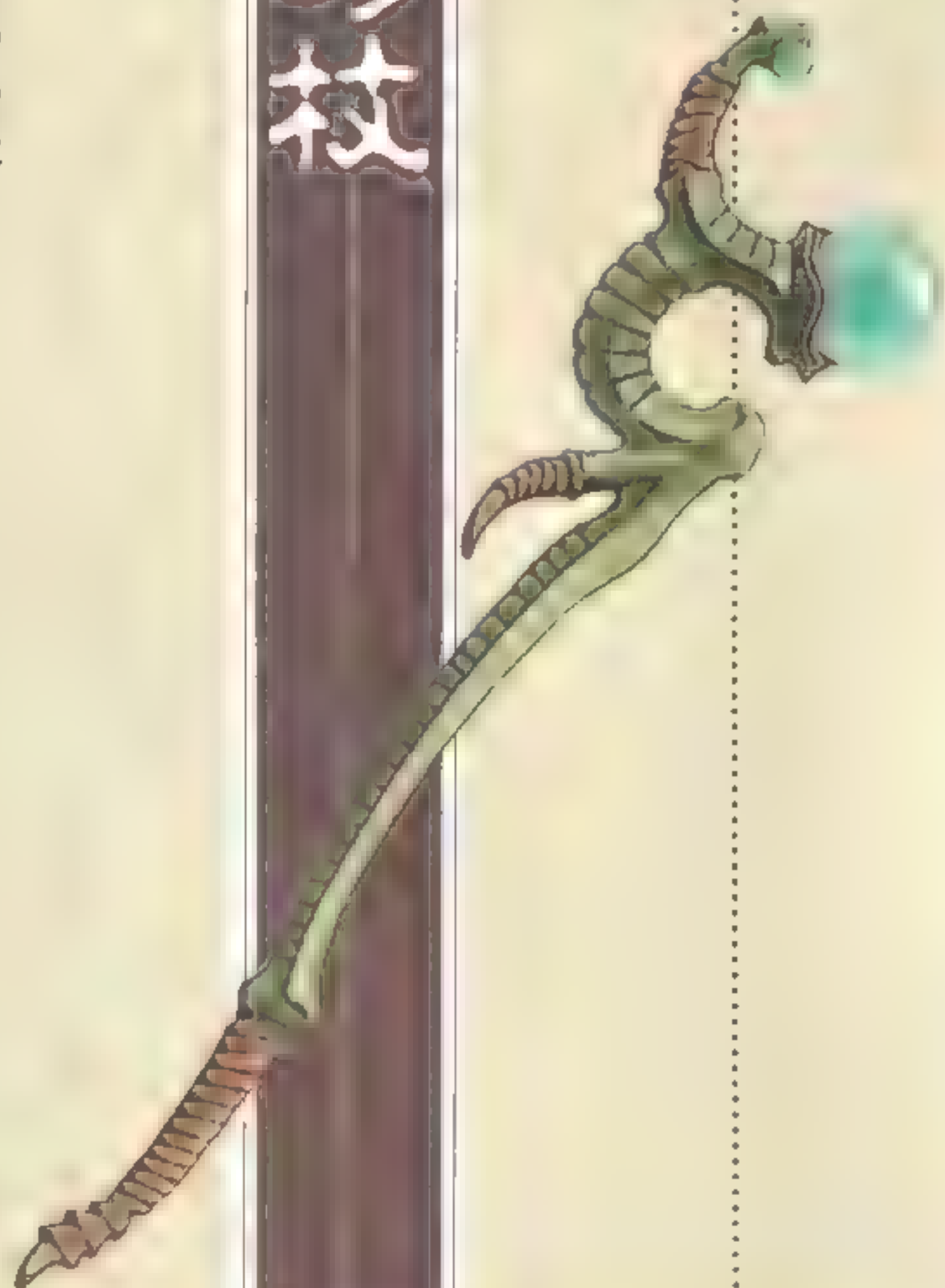
アレフガルド小劇場

Yellow Orb……

●イエローオーブ●

イエローオーブ…世界各地に散らばっている6つのオーブのうちのひとつ

CANE OF CHANGE

変化の杖

（真説　変化の杖）

CANE OF CHANGE

昔々、サマンオサの南の洞窟にはたくさんの魔物が住みついていました。その頃は、まだ魔物たちもおとなしく、街を襲うなんてことはありませんでしたから、洞窟にたくさんの魔物たちが住みついていたところで、誰も気にはしませんでした。
ところが、この魔物たち、実はバラモスが全世界を侵略するために送り込んだ偵察部隊だったのです。
この偵察部隊の最高指令官はボストロール。もうずいぶん長いこと、サマンオサの街から情報をさぐる努力をしているのですが、うまく行かずに困っていました。
「うむ、またまたバラモス様からお怒りの手紙がきているようじゃ。今月に入ってもう二十三通目じゃの……ったく。しかし！　いったいどうせよとおっしゃるのだ!!　一気に街に乗り込んで、暴れまわると言うならともかく。人間どもの調査をするなんて容易なことじゃない」
ボストロールがグチを言うのも無理はありません。彼はもともと怪力と体力が自慢なのです。コツコツと情報を集めたり、じっくりと作戦を立てたりするのは得意じゃないんですね。
今までには何度も街の近くまで、ゾンビマスターやヘルコンドルを偵察に行かせているのですが、なにしろ魔物ですから、人間に気づかれずに街の中に潜入することは難しいのです。
最高司令官ボストロールのもとには、毎日のように魔王バラモスからの情報を催促する手紙と、作戦の失敗をなじる手紙が届きます。
「最高司令官ボストロール様!!　その任務、どうぞこのミニデーモンにお任せくだサイ」
こまり果てたボストロールの前に、元気いっぱいに現れたのは、ミニデーモンです。
「このわたくしメがこのように……ドロン！」
突然、ミニデーモンが旅の商人の姿に化けました。
「と、このようにデスね。人間に化けてサマンオサの街にいくわけデス。そうすれば……」
「オオッ！　そうじゃ、そうじゃ。そうすれば、人間どもが気づかぬように、ヤツらの様子がさぐれるわけじゃな」
「そう、そのとおりでございマス」
と、いうわけで、ミニデーモンは旅の商人になりすまし、

サマンオサ城近くの酒場へともぐりこみました。

うまいことに店はなかなか混みあっています。ミニデモンはなにくわぬ顔で、店の中で一番大きなテーブルの端っこに座りました。

「おんや？　あんたぁはこのへんじゃ見掛けねえツラだが、どっからかの旅のお方ですかい？」

隣に座った、がっしりとした男が話しかけてきました。

「エ、エエ。旅の商人でございマス」

「おお、そうかい。旅の商人さんかい、このあたりを旅すんなら、南の洞窟には気をつけた方がええぞ。あすこにゃ最近なんだか魔物がいっぺえ住みついてるかんなぁ」

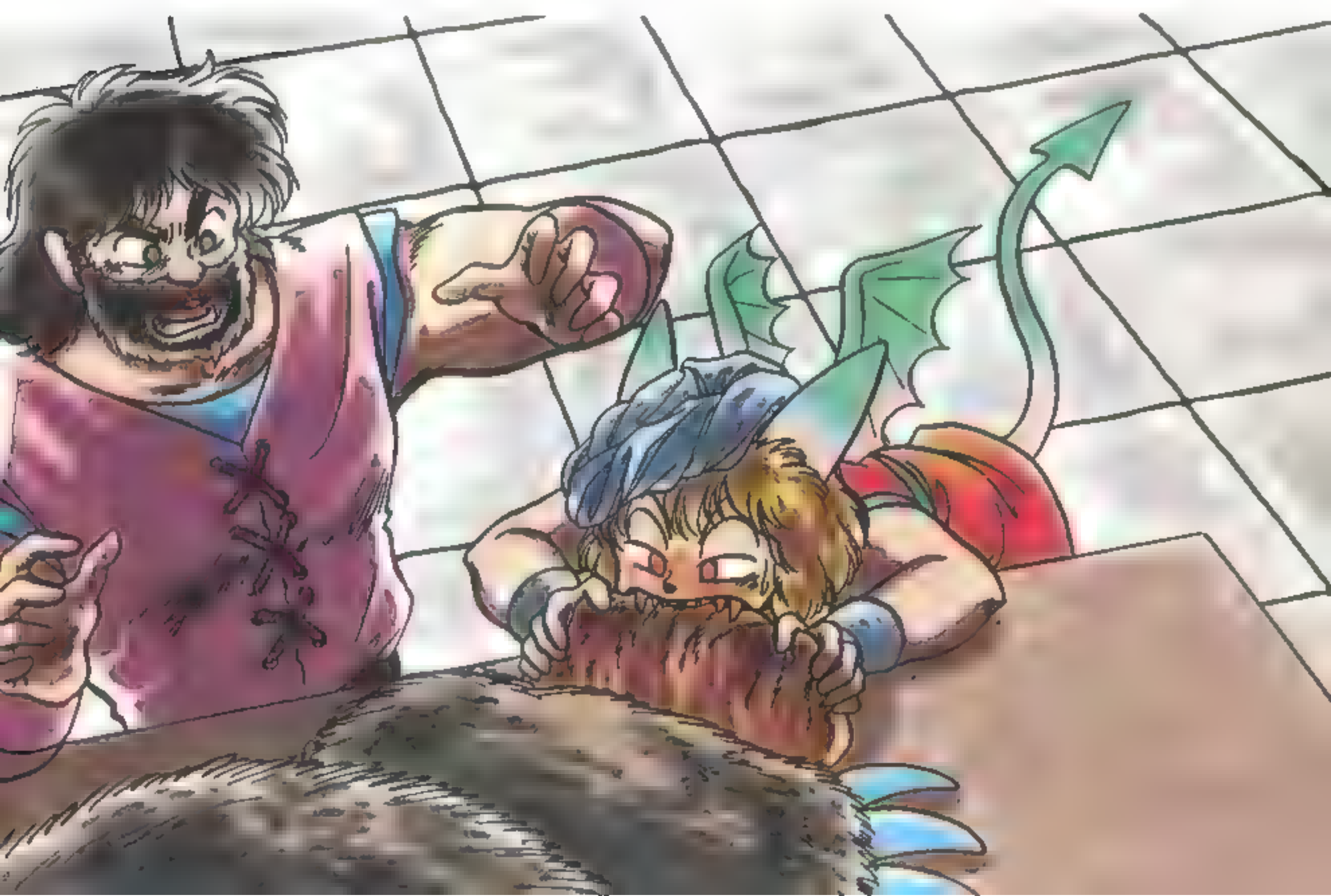
どうやらこの男は、なかなか話好きなようです。ミニデーモンはしめたと思い、さっそく情報収集を始めることにしました。

「ところで、人間ってのはどんな暮らしをしているもんなんデスか？」

「あぁ～ん？　なんだおめえー　変な事を聞くヤツだなぁ。まるでおめえ人間じゃないみてえだなぁ、アハハハ……」

どうも質問が、あまりに単刀直入すぎたみたいです。

「あっああー。その、ここの、サマンオサの街に住んでる

人はデスね。どんな物を食べたり……その、つまり……」
「おお、そうかそうか。商売の下調べかい？」
「そ、そうデス。そうデス」
「そうさな、この国は立派な王様がおられるから、み～んな幸せに暮らしてるよ。どんな物を食ってるかっていっても……。そうそう、食い物といえばオイラは猟師でな。今日、向こうの森で、こ～んなでっかいごうけつ熊をしとめてきたんだ。そうだ、旅の商人さん。ここで会ったのも何かの縁だ。ごうけつ熊の肉をちっと御馳走するよ」
　そう言うと、男はテーブルの下からド～ンと獲物を出してみせました。
「こ、これを、御馳走してくれマスんデスか……!!」
「そうともさ！　お～い、おかみさーん！　大急ぎで、コレを料理してくれな……エッ、なななんだあ、おめえ一体何モンだあぁぁぁぁぁ！」
　これはいけません！　ミニデーモンはあんまりごうけつ熊の肉がおいしそうだったものですから、つい人間に化けていることなど忘れて、いつものクセで生肉にガツガツとかぶりついてしまったのです!!　オマケに夢中になったものですから、魔法が解けて、耳やしっぽや翼が飛びだして

しまいました。
「ココ、コイツァ魔物だぁぁ!! みんな危ないぞ!! 伏せろ!!」
猟師は大声で叫ぶと、あわてて背中にかついでいた鉄砲をミニデーモンに向けて撃ちました。
ダーン! ダダダダーン!!
ビックリしたミニデーモンは、まるで野ネズミのように逃げていきました。

命からがら南の洞窟に逃げ帰ったミニデーモンは、せめてものおわびにと、ごうけつ熊の肉をボストロールに差し出しました。指令室に集められた部下たちも怒りにブルブルと震えるボストロールの姿におびえています。
「なんじゃぁ!? 食い物に夢中になって化けの皮がはがれたじゃと! 一体全体どうしてワシの部下どもはこうマヌケ者ばかりなのじゃ。なさけない!
海のむこうのジパングでは、ヤマタノオロチが人間どもを支配するまでになったというのに、エーイ情けない!」
今回の失敗はボストロールにとってかなりこたえたようです。
「そんなこと言ったって、ボストロール様自身だってたいした作戦をたてた事ないじゃんか……」
うつむいていたミニデーモンがポツリといいました。
「なんじゃと、ミニデーモンよ。今お前、何といった。そうか、ワシがバカモンじゃから失敗ばかりじゃと言うのじゃな。エッ、そう言うのじゃなぁ!!」
「そ、そんなぁ。それはつまり……」
「よーし、わかった。こうなったら力で勝負だっ。チマチマと情報集めのなんかしておっても何にもならん。
今すぐ出陣じゃあ!! みなの者よいなっっ!!」
「オオー!!」
その時です。突然、青い稲妻が部屋中に走りました。
シュバババババーン、グォォォォーン!!!
閃光が一点に集まるとにわかに煙がたちこめ、その中から、大魔術師エビルマージが現れました。
「まあ待て、ボストロールよ。あせる気持ちはよーくわかるぞよ。しかし、今ここでお前に暴れ回られてはのう。バラモス様の綿密な世界征服の大計画がメチャクチャになってしまうぞよ。それに無断で街に攻め込むとは、命令に背くことになるぞ。それでもよいのか? ん?」

「そそ、そんなご命令に背くなどと。ただワンはバラモス様に申し訳がないと思って……」

「ふむふむ。ボストロールよ、お前の気持ちはよーく分かった。よし、この大魔術師エビルマージ様が、ひとつ知恵をかしてしんぜよう」

「それは何ともありがたい事でございます。なんとお礼を申しあげたらいいものか……。ではさっそく……」

ボストロールは部下たちを残らず指令室からおいだし、エビルマージとふたりっきりで作戦会議に入りました。

「やはり、人間の中に入り込むためには人間の姿に化けるのが一番と思うのですが……」

「そうよのう。しかし、長時間化け続けるとなると難しいことよ。最近開発された呪文にモシャスという変身の術があるのだが、あれとて短い時間しか効力はないしのう。うーむ」

「うーむ」

ボストロールは考えるふりはしているものの、頭っからエビルマージに頼りきっている様子です。

「変身の術は、魔法の中でも最も難しいものよ。この私で

さえも長い修行の中で身につけたものだ。うーん、修行をしているヒマなどないしのう。知性の低い魔物でも変身できる方法というと、これは困難なことよのう。うーむ」

「うーむ」

ボストロールは心配そうにエビルマージの顔を覗きこむばかりです。

エビルマージはとうとう立ちあがり、部屋の中をうろうろと歩き始めました。眉間にシワをよせ、両腕を組み、

「ぶつぶつぶつぶ……ぶつぶつ……」

独り言をいっています。

ボストロールはというと、エビルマージの後について一緒に歩き始めました。そして、

「ぶつぶつぶつぶ……ぶつぶつ……」

一時間、二時間すぎました。歩き回っていたエビルマージは、ふと部屋の隅にたてかけてあった一枚の鏡に目を止めました。

「そうだ。鏡の力を使うとしよう」

エビルマージはふところから小さな青い宝石を取り出すと、ボストロールにこの宝石を両手でしっかり押さえているように命じました。

「動かぬようしかとおさえておけ」

そして、さらにガイコツ剣士を呼びだすとこの宝石を四つに断ち切るように命じました。

「えっ？　こんな小さい宝石を？　ワ、ワシの腕を切らんように気をつけ……ヒッヒェーッ!!」

まばたきする間もなくガイコツ剣士の六本の腕が宙を舞い、宝石は見事に四つに切断されました。

すっかり腰をぬかしたボストロールはあんぐりと口を開けたまま、座りこんでしまいました。

「もうよい、ボストロールよ。これから先は、私がひとりでやるから、お前はジャマにならんように部屋の隅におれ」

エビルマージはなにやら難しい呪文を唱えながら、部屋いっぱいに巨大な魔法陣を描きました。そしてその中心に四つの宝石を置くと、静かに目を閉じ、

「……イレームサイアハイレームリエュジ…キェーッ!!」

奇声とともにエビルマージの両手から、銀色の怪光線がほとばしります。宝石たちは光線があたると、まるで生き物のようにクルクルと回り出し、そして炎のような光とと

もに四枚の大きな鏡になってしまいました。
鏡の大きさはちょうどエビルマージの全身が映るほどでです。そして、この四枚の鏡はエビルマージの念力によって魔法陣の四隅にスーっと動いていきました。
ボストロールは目の前で起こっている事が信じられないといった表情でボウゼンとしています。
「よしよし、これからが私の魔力の見せどころだ……」
エビルマージは魔法陣の中心。ちょうど四枚の鏡の真ん中に立ちました。
すると、鏡の中にはエビルマージの姿がズラッと並んで写ります。正面も後ろ姿も、右も左も鏡の奥の方でまるで何百、何千ものエビルマージがいるようです。
「こいつぁ、スゴイ……」
ボストロールは目をパチパチさせています。
エビルマージは少し体を宙に浮かすとピオリムの呪文を唱え始めました。一回や二回ではありません。何十回もたて続けに唱えたのです。そうすると、もちろん鏡に写った数えきれない数のエビルマージも、同じようにピオリムの呪文を唱えます。呪文は鏡に反射しどんどん増幅していきました。エビルマージの素早さはとてつもないレベルに達していきます。
「こいつぁ、こいつぁスゴイ!」
部屋中にこだまする呪文の中でボストロールは、ただただ感心するのみです。と、その瞬間。
ンュノノ……。小さな音がしたかと思うと、部屋中にこだまする呪文の嵐がピタリとおさまりました。四枚の鏡の中には、ズラッとエビルマージが並んでいますが、魔法陣の中心にいた本物のエビルマージの姿が消えています。
「なななんだ。エビルマージ様が消えた! おーいエビルマージ様!! どうしたんだ。お～い!!」
「これこれ、大きな声を出すでない」
ボストロールがハッと顔を上げると、すぐ隣に本物のエビルマージが立っていました。
「実体が光より速く動けば、鏡に写った虚像は消えることなくその場に存在しつづけるのだ。ムフフフフ、私の魔力もたいしたものよのう」
「これはスゴイ。誠にもってたいしたものでございます。ふーむ、ほんにたいしたものじゃ……」
ボストロールは、うっとりとした顔で四枚の鏡をしげしげとながめています。

「でも、一体これを……？」

エビルマージは、ふたたび魔法陣の中心に立ちました。そして、念力で鏡の中の一枚をほんのちょっと動かしました。エビルマージの虚像は音もなく空中に飛びだして、消えてしまいます。

「まあ、見ておれ。本番はこれからなのだ。ムフフフフ。さてさて、最初はまず、普通の若い男からやってみるか」

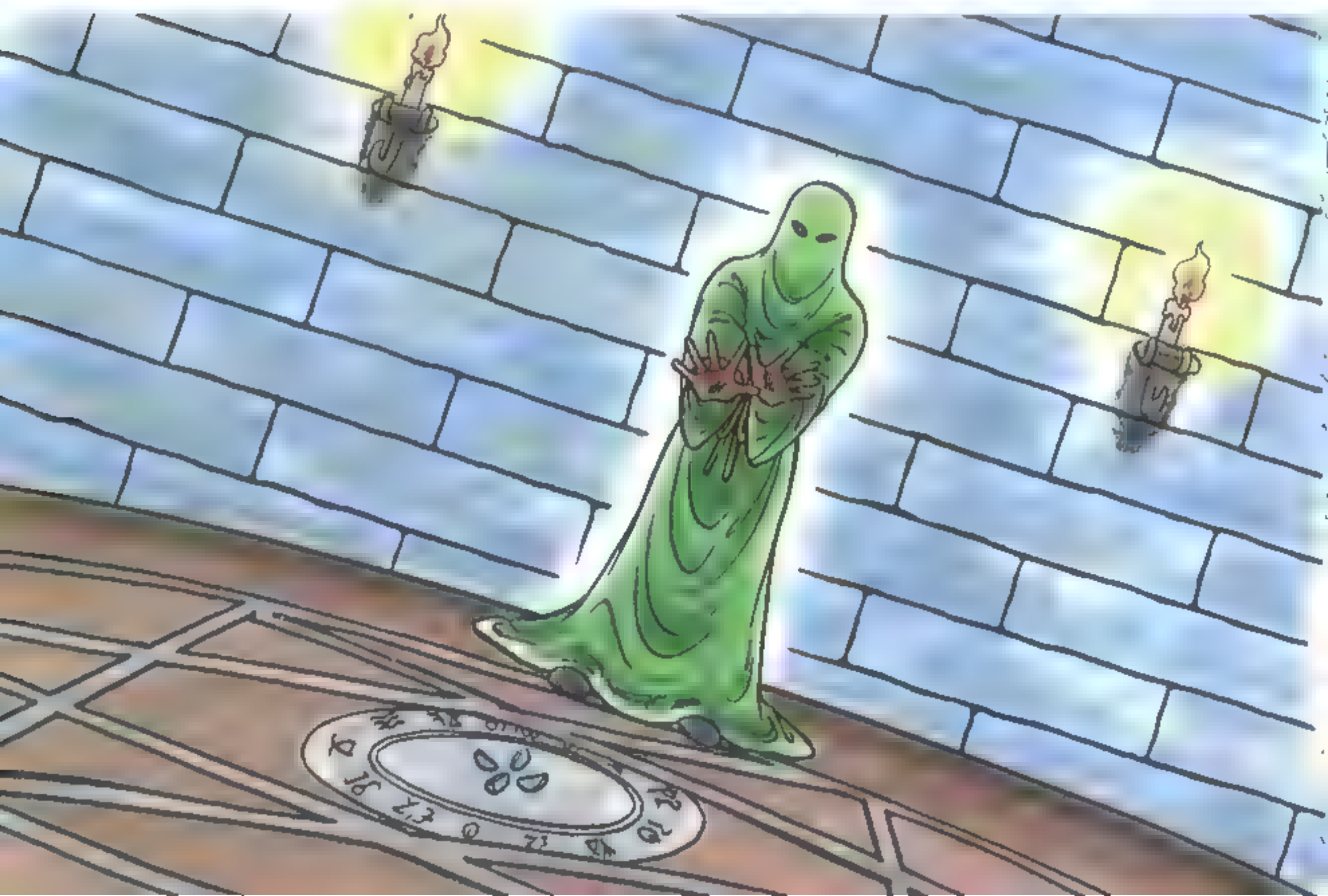
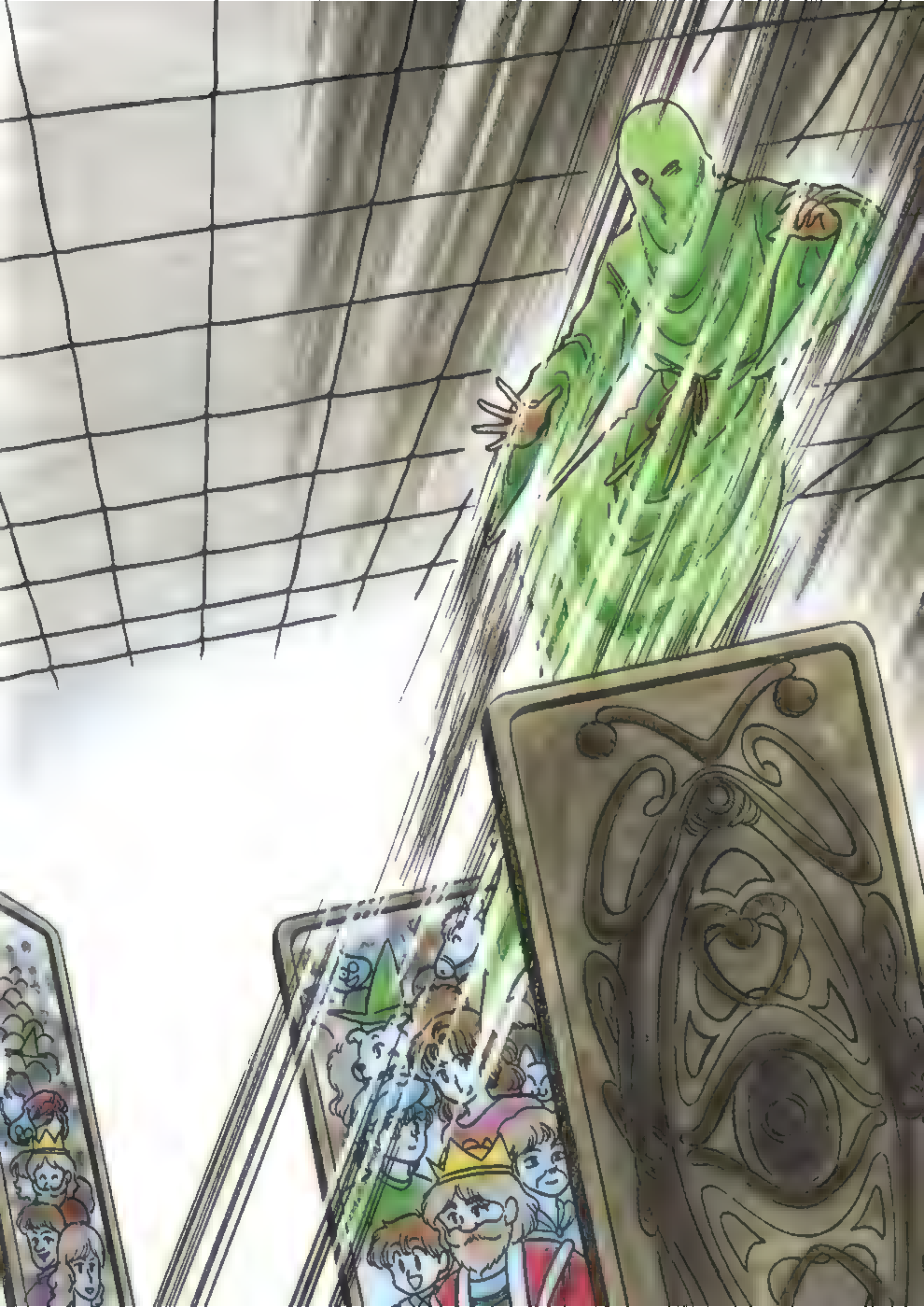
シュィィイーン。わずかに光が射したかと思うと、エビルマージの姿はたちまちひとりの青年に変わりました。

「そして、お次はと……」

そうつぶやくエビルマージは信じられないスピードで変身をくりかえし始めました。

王様に子供、商人に騎士、美しい娘、兵隊、老人、犬、ネコ、馬、吟遊詩人……。またたく間に姿を変えていきます。もちろん、鏡に写った姿も一緒に――？

おやおやっ？　エビルマージの変身があまりに速いので、前の虚像が消えないうちに、次の虚像が写ってしまいます。

合わせ鏡の長い回廊の中は、まるでお祭りの人混みのようにさまざまな人々の姿がひしめいています。そしてまた、シュノノノ……、というかすかな音とともにエビルマージ

が魔法陣の中心から飛び退きました。
「ゼーゼー、さすがにしんどいわい」
鏡の中には、さっきと同じように虚像たちがとり残されています。
「それでは仕上げといくかな……」
エビルマージは念力を使って、四枚の鏡を魔法陣の中心にゆっくりと近づけていきます。すると鏡はピタリとくっついて四角い箱のようになりました。
「ボストロールよ。私はこれから強い光を出すからのう。目がつぶれんように、しっかと手でおおっておくがよい」
「ははははいっ」
ボストロールはエビのように小さく縮こまって、両目を手でおおいました。
「……タマユマラデュシュタライ……イャー!!!!」
体が熱くなるほどのものすごい光とともに、鏡の箱はシュルシュルと回転し、そして一条の煙とともに元の青い小さな宝石になってしまいました。
ボストロールは何が起こったのかも分からずに、部屋の隅に縮こまっています。
「おい、ボストロールよ!! 終わったぞよ。私はいささか疲れてしまった。ほれ、この宝石を杖にはめ込めば、誰でも簡単に変身できる『変化の杖』の出来あがりだ」
「いやはや、なんとすばらしい。この杖さえあれば、どんな魔物も自由自在に変身できるのじゃ。それではさっそく作戦開始じゃ」
こうして、またまたミニデーモンが人間に化けて街に向かうことになりました。

サマンオサの街は、ちょうど収穫祭で賑わっていました。道の両側には、露店がたくさん立ちならんでいます。そして街の広場には、遠い東の国から来た旅芸人の一座が大きなテントを張って公演していました。呼び込みのピエロの声はそうとう遠くからでも聞こえます。
「さぁーてさてお立ち合い!! 世にも不思議な大魔術。当地初公開ときたモンだ!! コレを見なけりゃ末代の恥よ。まずは、こて調べ。ちょっとご覧にいれましょう!!!」
小男のピエロが、手にしたキラキラ光る杖をひと振りすると、たちまち横にいた美女がライオンに、そのライオンが子猫に、さらに子猫がドラゴンにと変わったのです。

「こいつはスゲェ!! 人間の中にも、こんな魔法の杖を作れるヤツがいるとはオドロキだ!」

ピエロはさらに小さな箱を取り出すと、光る杖でその箱をコンコンッとたたき、

「それでは皆様、おメメをノノカリと開けてご覧ください! そぉれ、チンカラホイホイノホイッ!」

ピエロが杖をひと振りすると、箱のフタが自然に開いて、中からものすごい量の金貨がジャラジャラと出てきました。

「そぉれ、そぉれ〜」

またまた杖をひと振りすると、今度は真珠や宝石が箱から飛び出してきます。舞台の上は、まばゆいほどの宝の山。

「それでは世紀の秘技。黄金の術をお目にかけましょぉ〜」

舞台の袖から、たくさんのガラクタが運び込まれてきました。

「これらの品々を、この杖の魔力で黄金に変えてご覧にいれまぁ〜す。それでは、チンカラカラカラホイッ!」

舞台の真ん中で、ピエロが大きく杖を振り回すとドーンと花火のような音がして、会場中にモクモクと煙がたち込めました。やがて煙がおさまると、舞台の上のガラクタはピカピカと黄金色に輝いていました。

「ゴホゴホ、ひどい煙だなぁ。それにしても、あの光る杖はスゴイ魔力だな。変身だけじゃなく、黄金まで作れるなんて……。ボストロール様からいただいたこの杖より、あっちの方がずっとよくできてらぁ!」

もちろんピエロは魔術を使ったわけではありません。これはれっきとした、種も仕掛けもある手品なのですが、オツムの足りないミニデーモンは、すっかり本気にしてしまいました。公演が終るのを待って、ミニデーモンは楽屋に押し掛けていきました。

「ねえねえ、おじさん。あの変身の杖は一体どこで手にいれたの? ねえねえ」

ミニデーモンは子供に化けて、一座の座長に聞きました。

「おうおう、あれかい? う〜んとあれはね。遠い東の国に、偉大な仙人がいてね。その人からもらったんだよ」

座長は子供相手と思ったので、適当におもしろおかしく作り話しをしました。

「ねえねえ、オイラも杖を持ってるんだ。オイラのはねェ、エビルマージ様っていう大魔術師が作ったのさ。これだって立派だよ。ねえねえ、おじさんのと取り換えてくれよ」

「エビルマージ様……?」

「そうさ、これだって結構役に立つんだ、ホラネ」

ドロンパッ！ ミニデーモンは美しい娘に変身しました。

「こっこれは……」

座長は、目の前で何の仕掛けもなく変身したのを見てビックリ！ しかし、そこは世界中を旅している芸人です。すぐにコイツは魔物だとカンづきました。

「いいともいいとも、それじゃぁもう一回。アリンコに変身してくれたら、取り換えてあげよう！」

「そんなことカーンタンさ。ドロン！」

ミニデーモンはちっちゃなアリンコに変身しました。座長は、素早くそばにあったジャムの空き瓶に、そのアリンコを閉じ込めてしまいました。

「……オーイ、ズルイゾダマシタナ、チクショウ……」

瓶の中でアリンコになったミニデーモンが叫んでいますが、声も小さいのでよく聞こえません。

その後、この『変化の杖』は旅芸人の座長からサマンオサの王様に献上され、国の宝となりました。

そして、ミニデーモンはどうなったかと言うとアリンコのまま瓶に閉じ込められ、「しゃべる蟻」として旅芸人の座の見せ物になっているそうです。

むすばれぬ勇者

●変化の杖●

変化の杖…一定の時間だけ姿を変えることができる魔法の杖

ぬいぐるみの死角

●ぬいぐるみ●

ぬいぐるみ…装備すると猫の姿になる全身を覆う形のぬいぐるみ

SPIDERS WEB

（まだらクモ糸の秘密）

SPIDERS WEB

ここはノアニールの村近くの草原。はぐれメタルの群れを相手に大騒ぎをしている少年がいます。戦っているのかもしれませんが、ギャーギャーバタバタと騒がしいだけで、とても戦闘シーンには見えません。

ドタ、ガサガサガサ！　ドシン!!　ガサガサガサ……

「でぃやぁー、よし捕まえたぁ！　ん?」

「ケヘヘ、ギラッ!」

ボァッ！　……サ――――、ササササッ――ッ。

「アチチチチ、アチアチ。くそぉ、捕まえたと思ったのにギラの呪文なんか使いやがって!!　それにしてもなーんて逃げ足の速いヤツラなんだ!」

どうやらこの少年は、はぐれメタルと追い掛けっこをしているみたいです。ものすごい顔をして、逃げたはぐれメタルを追いかけていきました。でも、まぁ捕まえることは無理でしょうね。ヤツらを捕まえるには、ふつうの人間の素早さではとうていかないませんから……。

この少年も本気ではぐれメタルを捕まえたいのなら、魔法の修行をして、ピオリムとかドラゴラムの呪文を身につけるべきでしょう。

さっきの少年がしょんぼりと帰ってきました。おやおやシャツからズボンから髪の毛まで真っ黒コゲです。ギラの呪文をそうとうくらったみたいですね。

「今日はユニコーンの月の14日……。ちくしょう、あと十二日しかないぞ。しかたない正直にメメに話して、あの約束は取り消してもらおう。……しょうがないよ。何か別のステキなプレゼントを用意すればいいさ……そうさ……あっ!」

少年が村外れの道にさしかかると、かわいらしい女の子が出迎えにきていました。

「や、やぁ、メメ！　お散歩かい?」

「まぁいやだわ、ハッサンたら……。あなたのお母さんに聞いたら、丘むこうの草原に行ったって聞いたから、きっと私のために『幸せの靴』を捜しに行ったんだろうと思って。それで、お出迎えにきたのよ……。それにしてもどうしたの、体中真っ黒よ……!?」

「いや、ちょっとね……ちょっと、あの……」

「……!!　もしかして、はぐれメタルにやられたの?　そうなの、やっぱりお誕生日のプレゼントに『幸せの靴』なんて……、ムリよね……。やっぱり、あの約束は……」

「な、な〜に言ってるのさ！　『幸せの靴』はもうとっくに手に入れて、ある場所に隠してあるのさ!!　バカだなぁ、ボクが真っ黒なのは、今ちょっと炭焼き小屋の掃除をしてきたからさ!!　誕生日まであと少しだね！　絶対に絶対に！　楽しみにしててよね！　ハハハハハハハ――」

　おやおや、このハッサンという少年は、恋人のメメに誕生日のプレゼントとして『幸せの靴』を贈る約束をしているようです。でも、さっきの様子ではかなり見通しは暗いようですね……。

　ハッサンは家に帰ると食事もせずに自分の部屋に入ってしまいました。

「あ〜、どうしよう！　メメったらすっかり期待してるしなぁ。さっきもあんなこと言っちゃって……。やっぱり今さら本当の事なんて言えないよ……。どうにかして『幸せの靴』を手に入れなくちゃ！」

　ハッサンは本棚から魔法の本を取り出しました。ベッドの上に寝転がって、パラパラとページをめくります。

「ええーと、ピオリムの魔法は……、精神を統一し……、風の精霊の軽やかなる動きを……。うーんなになに……まず風の心を読みとる修行を十二年、それから風の動きをあやつる修行を十五年！　げげっ、冗談じゃないよ。そんな事してたらメメはおばあさんになっちゃう!………やっぱり、アレしかない、アレを使うしかないぞっ！」

　ハッサンは勢いよく飛び起きると、そのまま一直線に村で一番古い道具屋に走りました。この道具屋の主人は、年老いてちょっとボケていますが、村一番の物知りです。

「おお〜、ハッサン。ど〜したのじゃ、な〜にをそんなにあわてているのじゃ？」

「ねぇねぇ、アレだよ。アレ入荷した？」

「アレ？　お〜、ハッサンの欲しがっているアレというと『まだらくもいと』じゃな。さ〜んねんじゃがまだじゃ」

　ハッサンはがっくりと肩を落としました。

「な〜んじゃ、『まだらくもいと』がないくらいでそ〜んなにがっくりするこたぁないじゃろう。一体どうしてそんなに『まだらくもいと』が欲しいんじゃ？」

「はぐれメタルだよ！　どーしてもアイツを捕まえて、『幸せの靴』を手に入れたいんだ！　そうしないと！　メメの誕生日が来て、ボクはおしまいだぁ!!」

「おいおい、言ってることがちっとも分からん。しかし、お前さんがおしまいとはただごとじゃないのう」

ハッサンは今にも泣きだしそうです。道具屋の主人は店の帳面をめくりながら言いました。
「ふむ、『まだらくもいと』はホビットが時々この店に持ってくるんじゃが、ここ二ケ月入荷しておらん。なんでも、風が強い日はマダラグモが出ないとか……」
「ねぇ！『まだらくもいと』ってのは、やっぱりそのマダラグモっていうクモから取るのかな？」
「そうじゃろう……。そのマダラグモというのは空いっぱいに広がるほどデッカイそうじゃ。それを操る術はホビットの秘法だとか言っておったが……」
ハッサンは家に戻るとまたまた自分の部屋に閉じこもってしまいました。
「空いっぱい広がるほどの大グモかぁ。おっかないな……、でも意外とおとなしいかも。ホビットが相手にするほどだもの……だけど秘法があるって言ってたな……」
あれこれと考えたあげく、ハッサンはマダラグモを捕まえに行こうと決心しました。でも、その空いっぱいに広がるほど大きいマダラグモは、体どこにいるのでしょう？
「とにかく、捜すしかないよ。ホビットに会えば何か分かるかもしれないな……。そうだ！妖精の森に行ってみよう、そうすれば何か分かるかもしれない……」
ハッサンはノアニールの村から少し南にある、妖精が住むという森に出掛けました。
森の中を足音を立てないように静かに歩いて行くと、木もれ日の射す小さな広場に、妖精が一匹遊んでいました。ハッサンの姿を見つけると、
「きゃっ、人間！」
草の中に隠れてしまいました。
「あ～あ～、別に乱暴したわけじゃないのに……。そうだ、妖精は歌が好きだってメメが言ってたな！」
ハッサンは小さな広場の真ん中で歌い出しました。
「♪～妖精さ～ん、妖精さ～ん……ボークはマダラグモを捜していますぅ♪　ホビットのお家を知ってたらぁ～、どーか教えてくださいなぁ～♪」
「うふふふ、変な人間。うふふふ」
「あははぁ、ヘタな歌。あははぁ」
さっきの妖精が草の中から顔を出しました。ハッサンはなるべくそぉっと近付いて、マダラグモとホビットを捜していることを歌にして話しました。
「ふぅん、マダラグモのことなら知ってるわ。この森の東

に小さい丘があるでしょ、あそこに夜明けに行ってみるといいわよ。だけど、ちょっとでも風が吹いてたり、お天気が悪いと出てこないのよね」

「ホビットに会いたいなら、やっぱりこの森の東の小さい丘に行くといいわ。マダラグモの出る日なら、きっとそこにいるはずだもん」

ハッサンはもっといろいろ聞きたいと思ったのですが、

「あっ！ いけない!! 人間とお話しちゃった!! このことは絶対秘密にしてよね!!」

「絶対、絶対秘密にしてね!!」

妖精たちは、大あわてで飛んで行ってしまいました。

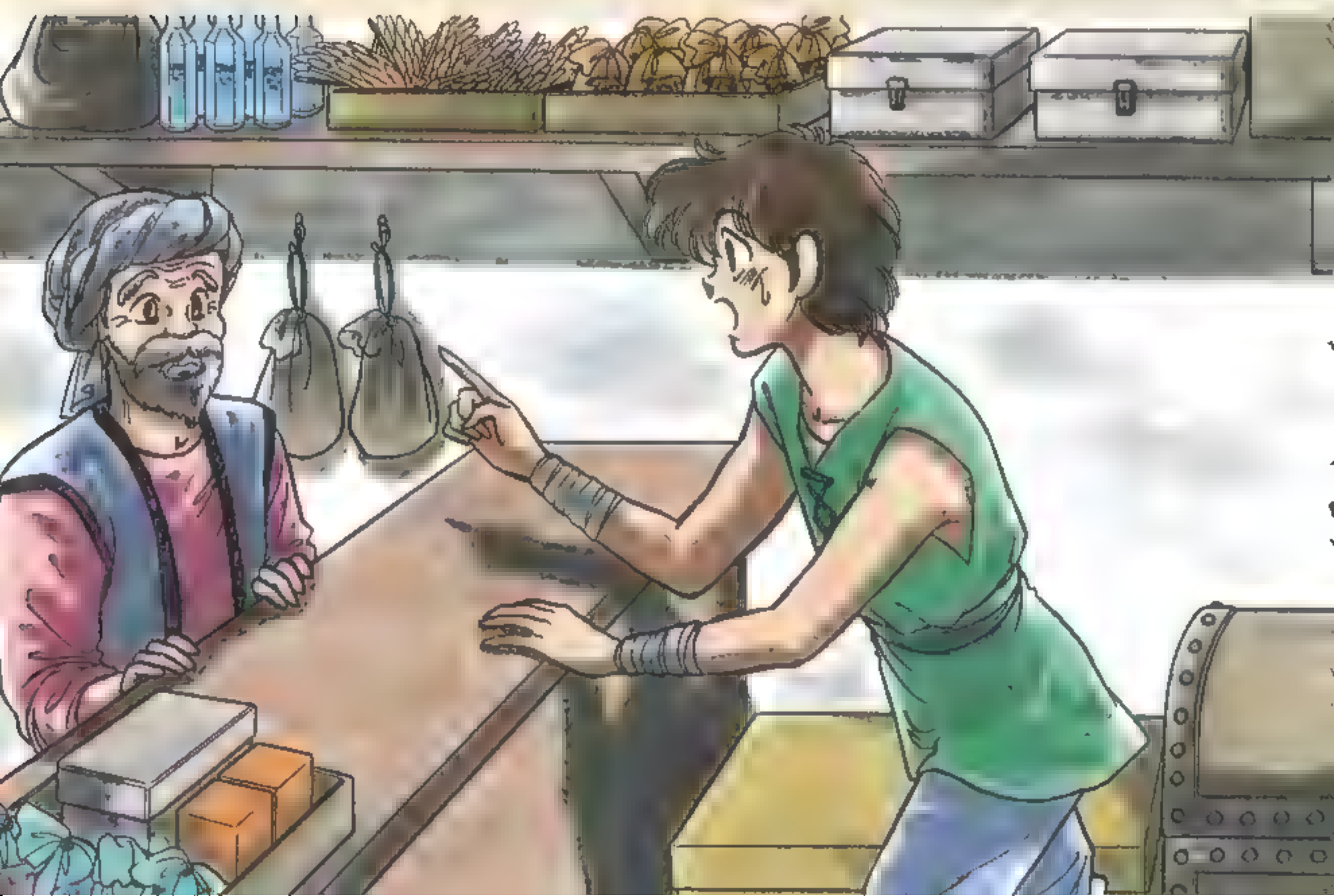
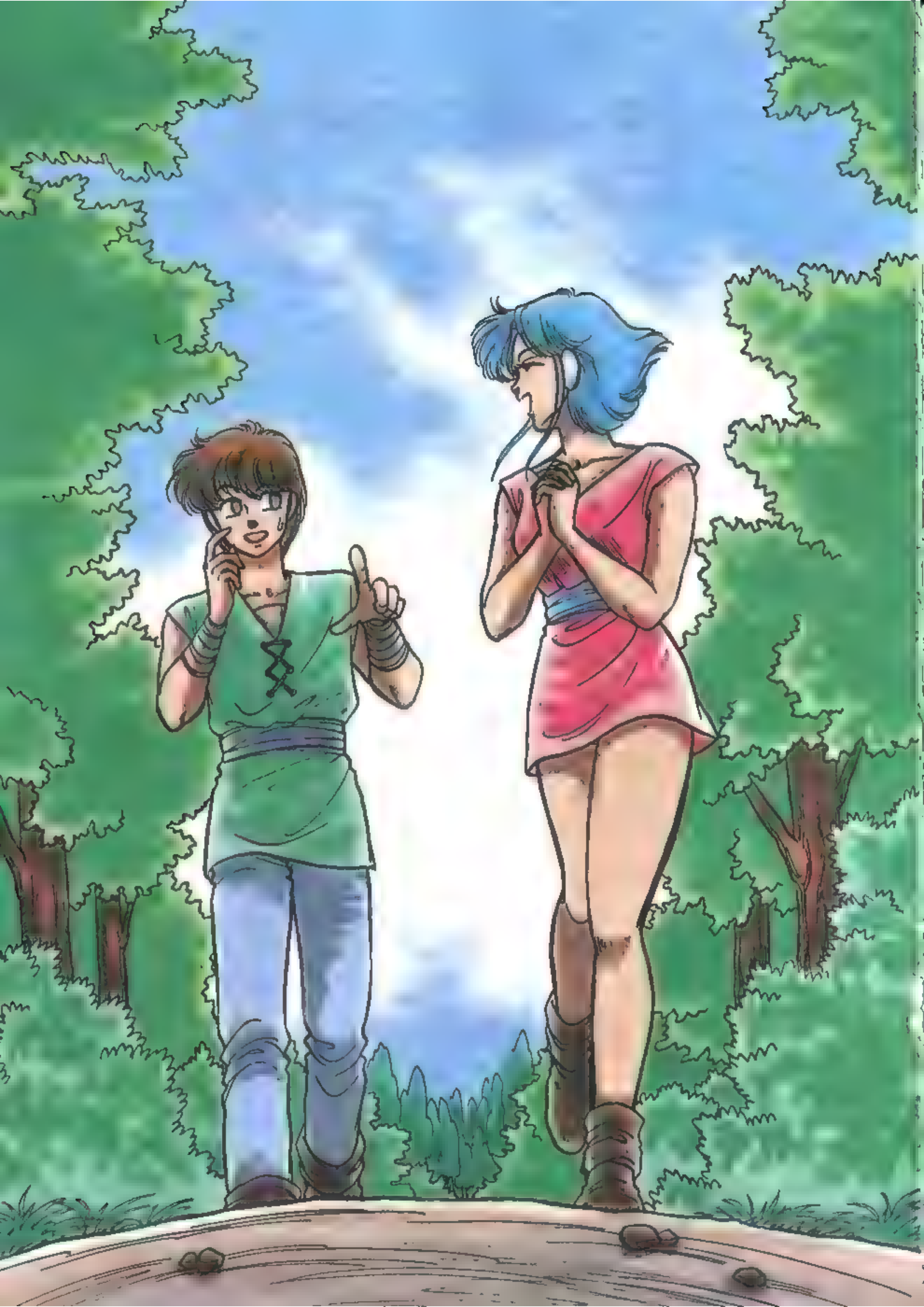
「夜明けに東の丘かぁ。そんなとこにクモの化け物が出るなんて聞いたことないなぁ」

ちょっぴり不安でしたが、ハッサンは夜明けになるのを待って、その丘に行ってみました。すると頂上でホビットたちが焚き火を囲んでなにやら相談しているようすです。

「ふーむ、どうだろうナ」

「今日はムリかもしれないネ」

「そうだな、風が吹いてきたヨ」

「マダラグモはちっとの風でも逃げちゃうぜ」

「ふーむ、そうだナ」
「それなら、今日はお休みだネ」
「酒でも飲んで、騒ごうヨ」
「マダラグモは明日の朝におあずけだぜ」
どうやらホビットたちはマダラグモを捕まえようと待っているみたいです。このホビットたち、ずんぐりしていてそれほど強そうには見えません。しかも、何の武器も持っていないようなのです。
「武器もなしにでっかいマダラグモを捕まえるなんて、きっとホビットの秘法ってのは、スンゴイ技なんだな。そうだ、その秘法を教えてもらえば……」
ハッサンはニコニコと笑いながら、ホビットたちに近づいていきました。
「どうも、こんばんわ。ボクはハッサンといいます!!」
できるだけ礼儀正しくあいさつをして、ペコリとおじぎをしました。ホビットたちは突然現れて、ニコニコおじぎをする人間を見て、あっけにとられています。
ハッサンはできるだけていねいな話し方で、恋人のメメに『幸せの靴』をプレゼントしたい事、そのためにはぐれメタルを捕まえたい事、そしてそのためにマダラグモを捕まえる秘法を教えてもらいたい事を話しました。すると、
「ギャハハ、マダラグモを捕まえるなんてムリだナ」
「ホッホホ、そんなことワシらにもできないネ」
「ウハハハ、コイツどうかしてるヨ」
「ゲラゲラ、それに『幸せの靴』なんて、はぐれメタルの中でも百匹か、二百匹の中で、一匹持ってるかいないかの珍品だぜ、世界中旅する勇者が一生に一度、お目にかかれるか、どうかっていわれてるモンだぜ!!」
「ムリだナ」
「ムリだネ」
「ムリだヨ」
ホビットたちは、酒に酔っているせいもあって大声で笑いだしてしまいました。
ハッサンはその声を聞いてるうちに、なんだか悲しくなってきてしまったようです。
「やっぱり……あきらめよう、『幸せの靴』なんて……でも、ど、どうしたらいいんだ……。何か他のプレゼントを捜さなきゃ。このままじゃメメの誕生日に、メメがガッカリしてボクのことキライになって、それで、それでボクはおしまいだぁ〜!! エ〜ン、エエ〜ン」

いきなり泣きだしてしまいました。ホビットたちは何だかものすごくひどい事をしたような気になって、ハッサンの周りに集まってきました。
「そ、そんな！　泣くなヨ。しかたない、それじゃそのメメさんにホビットの秘密の儀式を見せてあげるヨ！」
「そうだ、人間にとって本当なら絶対にお目に掛かれない秘密なんだ。きっと、メメって娘もスッゴクよろこぶと思うんだ。『幸せの靴』なんかよりネ！」
ハッサンはグシャグシャになった顔でホビットたちを見まわしました。
「人間がけっして見られない、ホビットの秘密？」
「そうさ、メメって娘も大喜びヨ」
「今日はムリだが、明日の朝。ここにその娘を連れてきな。人間には信じられないような、ステキな儀式なんだぜ」
ハッサンはホビットたちにはげまされ、半信半疑でノアニール村に帰りました。
「ねえハッサン。こんな朝早く、どこにいくの？　『幸せの靴』よりもっといい物ってなぁに？」
次の日の早朝、ハッサンはメメを連れてあの丘に向かいました。
「と、とにかく人間にとって本当なら絶対にお目に掛かれない秘密なんだ。く、くわしくは言えないけど……。きっとメメも喜ぶってホビットが……」
「えっ　ホビットッ!!　ハッサンたらホビットと友達なのぉ。すっごい、ステキ！　期待しちゃうわ！」
メメははしゃいで丘を登って行きますが、ハッサンはちょっぴり不安そうです。
「大丈夫かなぁ、ホビットの言う儀式って……。もしかしたら、でっかいマダラグモとホビットの大乱闘なんて……。そんなのメメは大ッキライだぞ……。そ、それにすごく危険じゃないのかな……」
ハッサンの足取りは心なしか重いみたいですね。
「うわぁ――！　見て見てハッサン！」
突然、メメが大きな声でそう言うと、両手を広げて丘の頂上に駆けていきました。
見上げると、丘の上に広がる空に薄い雲が広がっています。夜明けの太陽の光が、絹糸のような薄く細い雲に反射して黄金色に輝いています。
「なんて！　なんてステキなんでしょう!!　こんなステキな夜明け、初めてみたわ!!」

メメがまた、大きな声でハッサンに言いました。すると、

「こらこら、これから神聖な儀式が始まるんだ。静かにしてくれないとこまるんだナ」

昨日のホビットたちが草むらの中から現れました。

「やぁ、アンタがメメさんだネ」

「今日はマダラグモ日和だヨ」

「さあさあ、これから世にも不思議なホビットの儀式が始まるゼ」

ホビットたちは丘の頂上に輪になって座ると、その真ん中に古めかしい糸巻き機を置きました。そして、楽しげに歌い始めたのです。

「♪カラカラ〜カララ　朝の光にまだら雲♪」

「♪クルクル回れ糸車〜」

「♪やがて、キラキラ輝く雲が」

「♪カラカラ〜カラララ巻きつくよ〜」

歌と一緒に、糸巻き機が動き始めました。すると、どうでしょう!!　東の空いっぱいにひろがった、まだらの雲がゆっくりと丘の頂上を中心に回り始めたのです。

雲が回るのと一緒に、キラキラと朝日の束が踊り始めます。草も木も、メメもハッサンもみんな黄金色の輝きに染まります。

やがて、まだらの雲の端っこが糸車に巻きついてカラカラと巻き取られていきます。

「マダラグモ……まだらくもいと。そうかぁ、『まだらくもいと』って空の雲からできてたんだ……」

「ステキ!!　私、このこときっと一生忘れないわ……」

ハッサンとメメは、手をつないだままうっとりと空を見上げていました。

気がつくと、空中のまだらの雲はすっかりホビットの糸巻きに巻き取られていました。

「どうだい？　喜んでもらえたかナ」

「この儀式の事は、他の人間には内緒だからネ」

「絶対に話してはいけないヨ」

「約束だゼ」

ハッサンもメメもまだ夢を見ているみたいにボーッとしています。

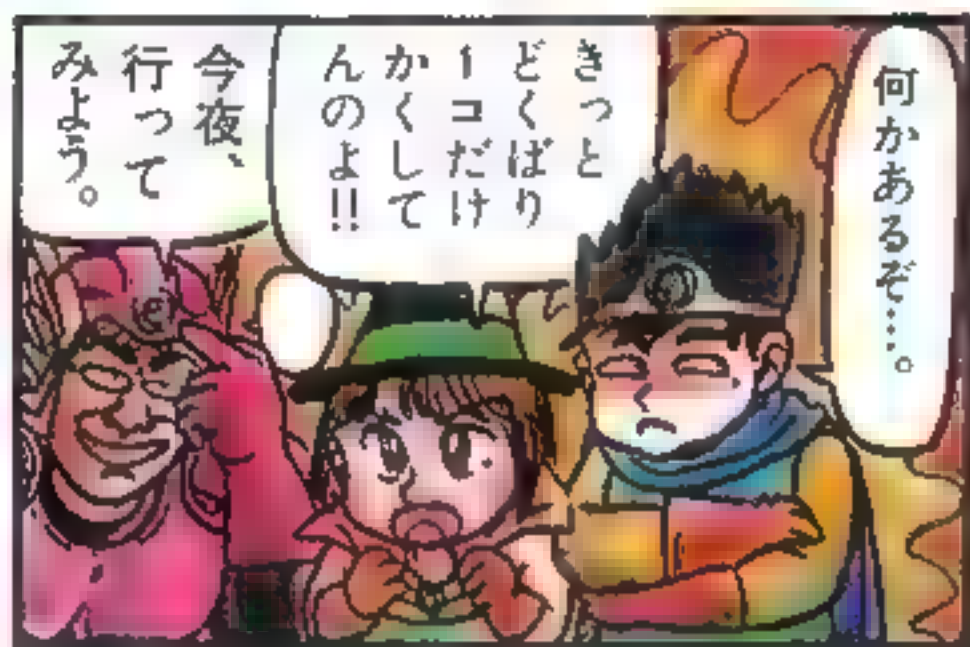
「ええ、もちろん!!　や、約束するよ」

「私も、絶対に約束します」

ふたりがそう言いおわる間に、ホビットたちの姿は消えていました。

メメはハッサンの手を取ると、ハッサンも今までに見たことがないほど、うれしそうな笑顔で言いました。
「ありがとう!! ハッサン。このことは世界で私たちふたりだけが知ってる秘密なのね。あぁ、なんてステキなの！この秘密は私にとって一番大切な宝物だわ。この秘密、ふたりでずーっと大切にしましょうね！」
ハッサンはてれくさそうにうなずくと、雲がひとかけらもなくなった空を見上げました。

どくばりの秘密

●毒針●

毒針…敵の急所を突けば、一撃で倒すことができる魔法使い用の武器

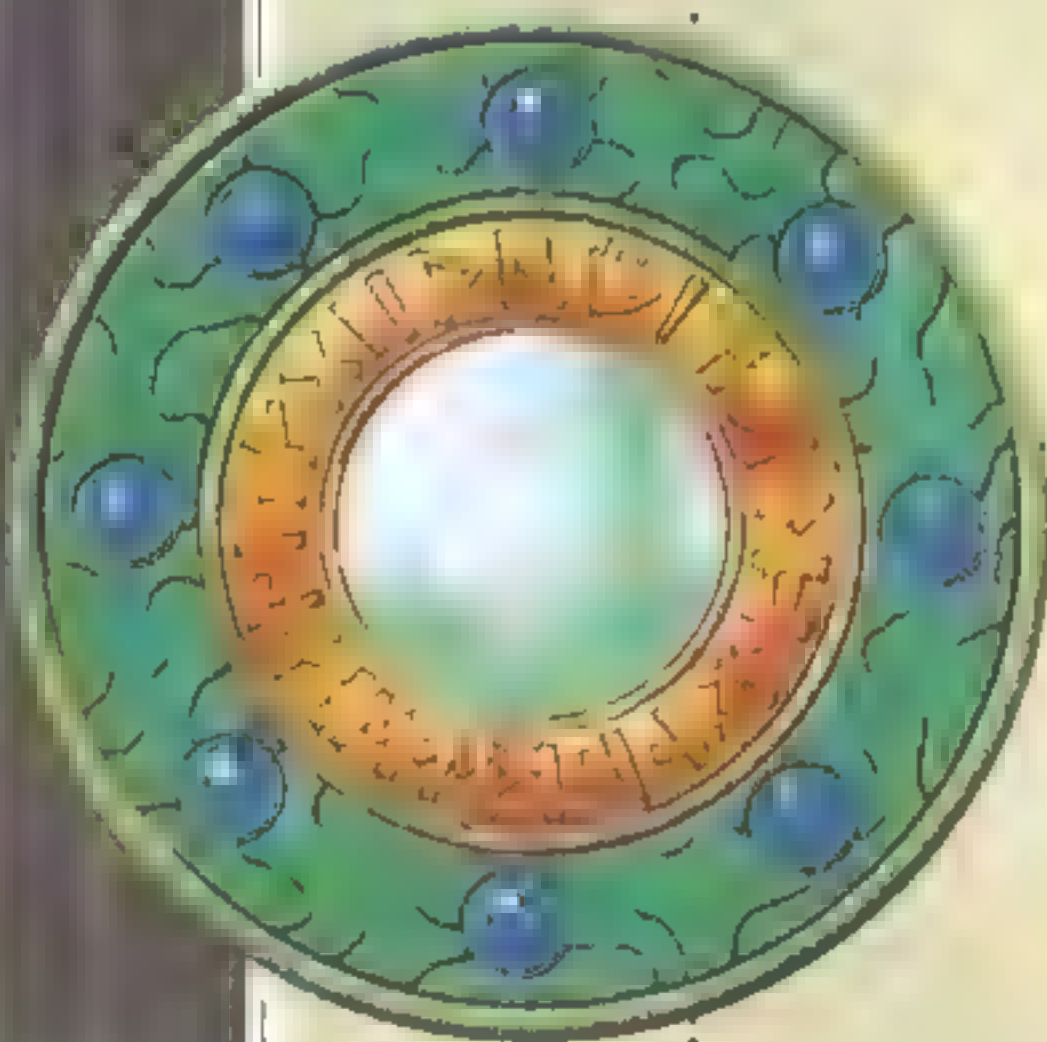
まだらクモ糸の意外な効用

●まだらクモ糸●

まだらクモ糸…投げつけると敵にからみつき、すばやさを下げる魔法の糸玉

LAR'S MIRROR

ラーの鏡

（秘鏡異聞　ラーの鏡）

LAR'S MIRROR

このお話ははるかな太古、そう、ちょうどあのルビス様が精霊神になられたばかりの頃のお話です。

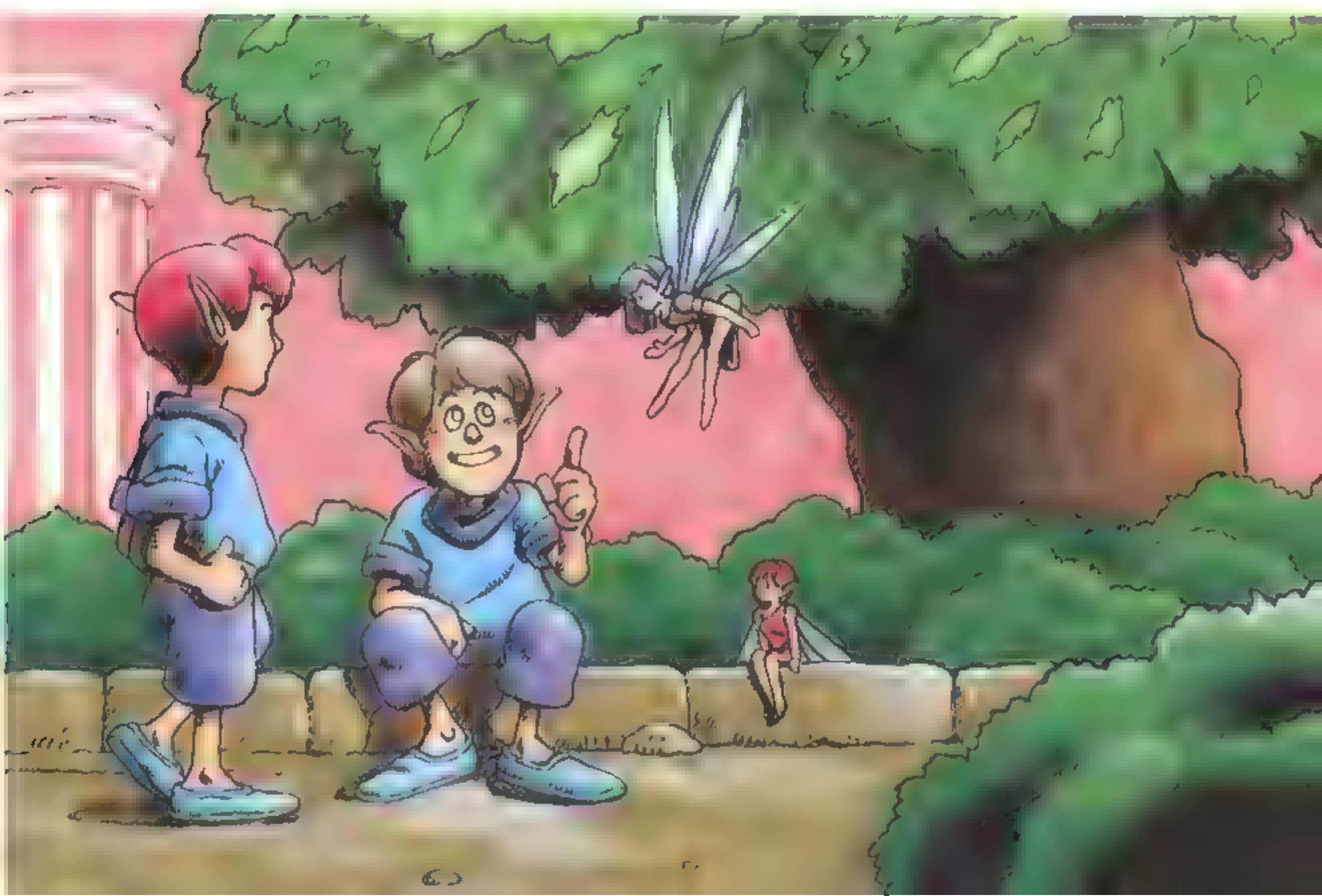
ここは、太陽神ラーの神殿。虹色の光がさんさんと降り注ぐ昼さがりです。中庭にある小さな泉の回りでは、神々につかえる妖精やホビットたちが、ひと仕事終えて井戸端会議をしているようです。

「そりゃぁね。やっぱり美人といったら、月と英知の神ミネルヴァ様が一番だわよぉ」

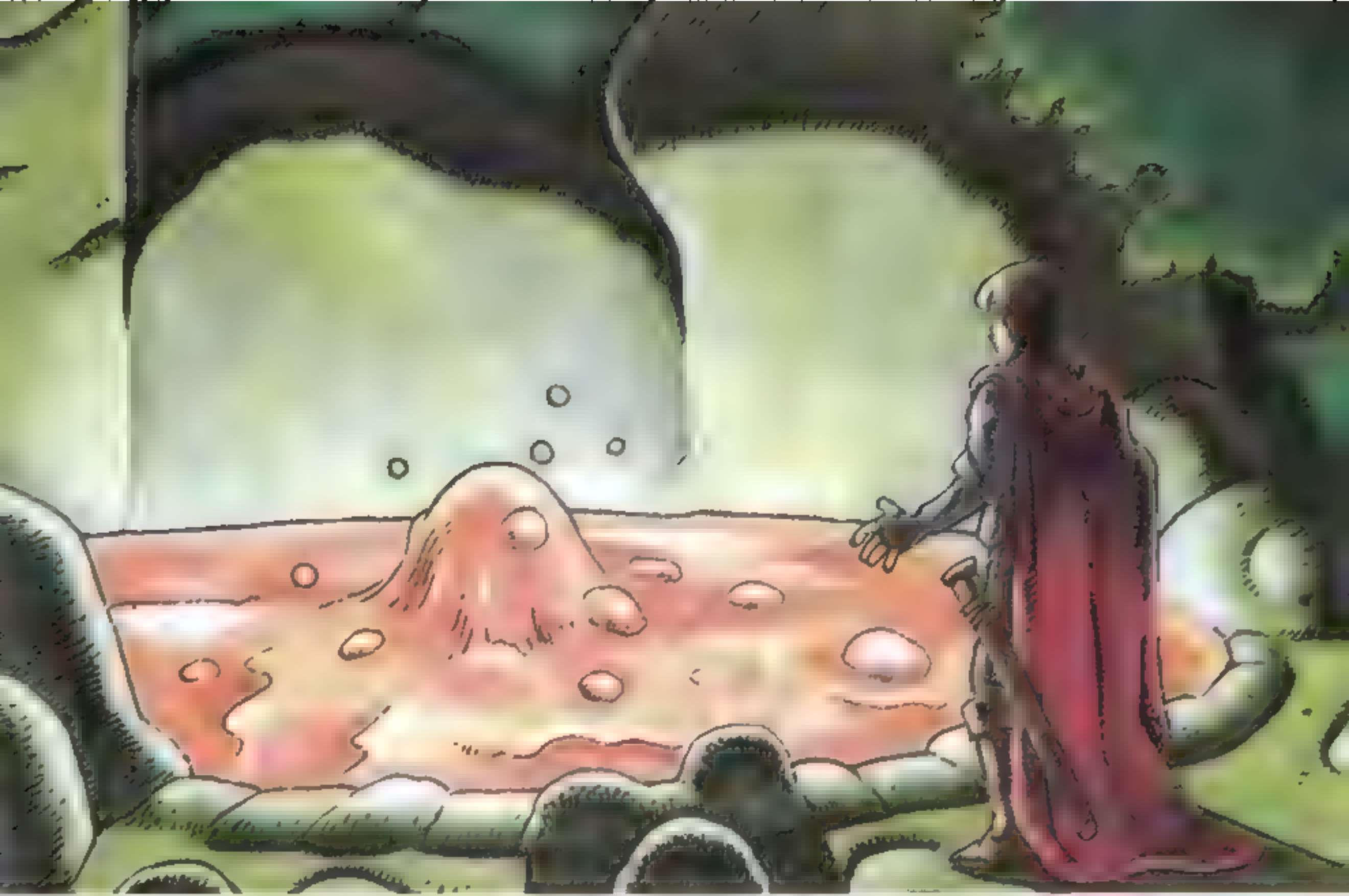
「そうかなぁ……。オイラはほら、最近、神々の列に準じられた女神様。ええと、名前はルビス様だっけ？　あの方のほうが美人だと思うがね」

「ううーん。ミネルヴァ様とルビス様かぁ……。こいつぁ難しいところだなぁ……」

おやおや、どうやら今日の話題は女神たちの美人くらべといったようすです。

「ちょっ、ちょっと待ってよ！　美人といったらスリス様を忘れてもらっちゃ困るわ！　なんたってスリス様は太陽神ラー様の妹君。まだまだお若い女神様だけど、あの方が一番に決まってるわ!!」

突然、大声でしゃべりだしたのはエイメという名の太陽神ラーに仕える妖精です。
「……確かに、スリス様もきれいだよ。だけど……」
「そうねぇ、スリス様ねぇ、だけどちょっと華やかさに欠けるって感じよねぇ」
「うーん、そうだなぁ、近頃特に……」
偉大な太陽神の血を引くスリスは、人間でいうとまだ少女の年頃でしたが、もちろんたいへん美しい女神でした。しかし、最近なぜか沈んだようすで、その表情もくもりがちだったのです。
「と、とにかく！　スリス様はおきれいだわ！　そりゃあこの頃ちょっとお元気がないような気もするけど……。でもね、やっぱり絶対とにかくスリス様。スリス様よっ！」
エイメは背中の薄い羽をパタパタとふるわせながら、さっきより大きな声で言いました。その時です。今、噂になっていたスリスが中庭に入ってきたのです。
「エイメ、エイメったらどこにいったの？　午後はつゆくさの花園に行く約束だったでしょう？　エイメ、エイメったらぁー」
スリスの声を聞くと、泉の回りに集まっていた妖精やホビットたちは、急にそそくさと自分の仕事にもどっていきました。たわいのない噂話だとしても、女神たちの美しさに優劣をつけていたなどと、神々に知れたら大変なことになります。
そうです、この天上界に住む神々には、美しさの優劣などというものは存在しないものだったのです。神はそれぞれにみな、最も美しく、最も尊いとされていたのです。
「エイメ、エイメったらー」
「は、はい、スリス様、エイメはここにおります！」
エイメもあわててスリスのところに飛んで行きました。
つゆくさの花園は、ラーの神殿からほど近い場所にあります。天界には季節がありませんから、どの花々もいつでも見事に咲き乱れているのです。このつゆくさの花園は、スリスの一番お気に入りの場所でした。
「ねぇ、エイメ。さっき泉の回りで何を話していたの？　なんだかとっても騒がしいようすだったけど……」
「……。い、いえ何にも！　つまらないことです」
「ふ～ん、つまらないこと？　でも私の名前を大きな声で言ってたでしょ？　本当につまらないことなの？」
「それは……その……」

「さぁ、話してちょうだい。私に嘘をつくなんて、そんな悲しいことはしないで欲しいの……」
スリスはいつになく真剣な表情です。
「……では、お話しします。別にどうという意味のないことなのです。その……つまり簡単に言うと、天界の女神様の中でどなたが一番お美しいかと、みなで話していたのです……」
「それで？」
エイメはしかたなく、さっきみんなが話していたことを正直に話しました。
「そう、そうなの。何でもない……ことかもしれないわね。何でもないわ……」
ほかの女神たちと美しさをくらべられていると知ったスリスは、さすがにショックを受けたようでした。しかも、自分の美しさがほかの女神たちに劣っているというのですから……。
「何でもないことかもしれないわ……。神々はもちろん、この花たちや小鳥たちだって、みんなそれぞれに美しいものだもの。ただそれが目立つとか、目立たないとかそういうことなのですもの……」
「そのとおりですわ！　もともとそんなことに順位をつけるなんて、下界の人間たちしかしていなかったこと。私たち、妖精やホビットまで、そんなことを話題にするなんて愚かなことでした……。心からお詫び――」
エイメがふとスリスの顔を見ると、その瞳にはいっぱいに涙がたまっていました。
「スリス様……そうだ！　お化粧というものをなさってみたらいかがでしょう！　もちろんスリス様の美しさはすばらしいものですが、お化粧をすればその美しさがますます際だったものになることでしょう！」
「お化粧？」
「そうです。女神様方はご存じないでしょうが、下界の人間の女たちはみんなしています。たとえばこのように……」
エイメはそばにあったつゆくさの花びらを取ると、それを瞼にこすりつけました。するとエイメの瞼がうっすらと水色にそまり、その瞳の輝きが増したように見えます。
「それから、このように……」
そして、つぎにエイメはきんぽうげの赤い花びらを唇に擦りつけました。赤くそまった唇は、いきいきとしていま

す。

「まぁ、そんな方法を知っているなんて人間というものはなんてかしこいものなのでしょう。私も少し、してみようかしら……」

エイメはさっそく花園中を飛びまわり、いろいろな花びらを集めてきました。スリスの様子は最近になく楽しそうでした。

「できたわ……。ねえエイメ、これでどうかしら？」

「ステキですわ！　とっても！」

「ねえ、エイメ。私自分で見てみたいわ。あなた、鏡というものを持っている？」

「あ、はい。しばらくお待ちを宮殿から取って参ります」

エイメは大急ぎで宮殿にもどり、古めかしい銅の鏡を持ってきました。

「な、なぜ？　やっぱり私は美しくないのね！　だから鏡にも嫌われてしまったのよ……！」

どうしたことでしょう！　銅の鏡にはスリスの姿が映りません。そうです。太陽神の血を引くスリスの体からは、黄金色の光が放たれているため、ふつうの鏡では姿が映ら

ないのです。生まれてから一度も、自分の美しさなどということを考えたことのなかったスリスは、今まで鏡をのぞいたことがなかったのです。

「スリス様！　この鏡は人間どもの使う鏡。ですから、その……」

エイメの言葉も聞かず、スリスは宮殿に走り帰るとそのまま自分の寝室に閉じこもってしまいました。

それから三日、四日たちました。スリスはろくに食事もとらず、いっこうに寝室から出てきません。とうとうこのことは天界中の神々や妖精、ホビットたちの知るところとなりました。

「スリス様がお部屋からお出にならないとは一体何があったのです。エイメ殿、くわしく理由を聞かせてください」

夜更けに、エイメのもとにひとりの若い武将が訪ねてきました。この武将は、もともとは銀や銅などを司る精霊で、それほど位の高い者ではなかったのですが、武芸にすぐれ、その勇敢さと誠実さを認められて、特別にラーの側近として取りたてられた者でした。名前はゼグンドといい、心の中で密かに、スリスに思いをよせていたのです。

「これは、ゼグンド様……」

ここ数日、スリスのことで思い悩んでいたエイメは、その理由をゼグンドにすべて話しました。

「そのようなことでお悩みとは……。分かりました、その件、このゼグンドにおまかせなさい。きっとスリス様を元気づけて差しあげましょう」

ゼグンドはそう言うと、そのまま宮殿を出て天界のはずれにある、鉱物の泉へと向かいました。

鉱物の泉とは、金や銀、銅や流白銀などの金属がわき出る不思議な泉です。ゼグンドは、この泉のほとりに立つと、自分の腰にさした剣を泉に投げ入れました。

すると……。にわかに泉が淡い光を発して、見たこともないような真珠色の金属がわき出てきました。

ゼグンドの剣は、水の光や星のきらめき、そして月の輝きを金属に変えて作られた物。その剣が泉の中で溶けてわき出してきたのです。

「よし、これでいい。この真珠金で鏡をお造りしよう」

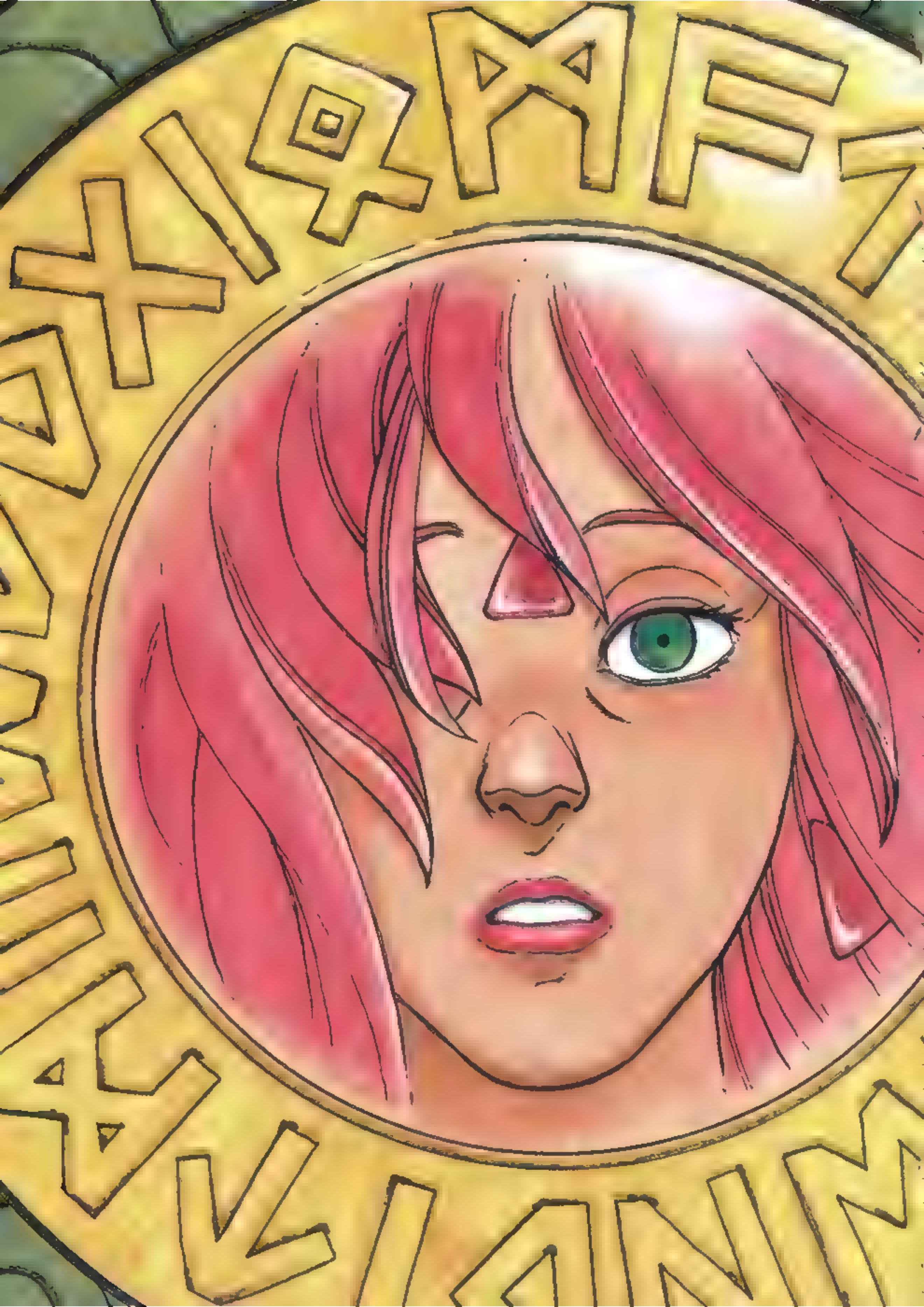
ゼグンドは真珠金を薄くのばして、その表面を星の粉で磨き、みごとな鏡を一枚、造りあげました。

「スリス様、スリス様。わたしはゼグンドでございます。どうかこの部屋のドアをお開けください！」

「！　ゼグンド様？」

スリスはゼグンドが自分の部屋を訪れたことにびっくりしました。実を言うとスリスもこのゼグンドに密かに恋をしていたのです。

「スリス様、スリス様。どうかこの部屋のドアをお開けください！」

最近、スリスが沈んでいたのは、ゼグンドに気持ちを打ち明けられずに悩んでいたためだったのです。

「スリス様。お顔を見せていただけなくてもよいのです。ほんの少しドアを開けて、このゼグンドからの贈り物をお受けとりください！」

「贈り物……？」

スリスはやっと手が出せるだけドアを開けると、絹に包まれた贈り物を受取りました。

「こ、これは鏡じゃないの!?　いやだわ、きっとまた姿が映らないに決まってる……。それにしてもなんてきれいな鏡でしょう。まるで真珠のように輝いて……」

スリスは思わず鏡をのぞきこみました。

「まぁ!?　この鏡。……ここに映っているのは私？　これが私!?　本当に？……」

鏡の中には、ばら色の輝きに包まれたスリスの顔が映っていました。それは、スリス自身もおどろくほどの美しさなのでした。

スリスはこの鏡を胸に抱えると、ゼグンドたち武将の集まる、ラーの大広間へ走りました。スリスは大広間の扉をあけると中に飛びこみました。

ラーは突然あらわれたスリスの姿におどろいて、

「おお、スリスではないか！　病にふせっていると聞いたが、もうよいのか？」

ほかの武将たちもみな、いっせいにスリスのほうに振り向きました。明るい笑顔のスリスの美しさに、誰もが心の中でおどろきました。

「お兄様！　ええ、すっかり元気ですことよ！　実はね、ゼグンド様からこれをいただいて……!!」

バリバリバリ――!!　バリッ、バリバリバリッ!!!

スリスが鏡を見せた瞬間です。鏡に映った武将のひとりが突然、閃光とともに炎に包まれ、その中で見る見るボストロールの姿に変身したのです。

「くそぉ、見破られたか!!　いかにもオレは魔界からラーの命をいただくためにやってきた者!!　こうなったらぁしかたがないっ――」

ボストロールはその巨体でラーに襲いかかりました。その時、ラーの一番間近かに座していたゼグンドが、勇敢にもボストロールの顔に飛びつきました。そして、自分の命を顧みず、その鉄のような拳で殴りつけました。

ゼグンドとボストロールは組み合ったまま大広間中を転げまわります。やがて、ふいと飛び退いたゼグンドは、大理石でできたラーの玉座を持ち上げて、ボストロールめが

けて投げつけました。

ギェ、ギギギェ――!!!

ボストロールは玉座の下敷きになり、ピクリとも動かなくなりました。

「ゼ、ゼグンド様。この鏡は?」

スリスはゼグンドに駆け寄ります。

「おお、スリス様。お怪我はございませんか? それはなによりでした。そうです、その鏡は真実を映し出す鏡。魔物でも、神々でも、その鏡に映ると真実の姿が現れるのです……」

ゼグンドはそれだけ言うと、さすがに力つきたのかガックリと膝をおとしました。

太陽神ラーが、その時のゼグンドの勇敢さを讃え、スリスとの結婚を許したのは、それから間もなくのことです。

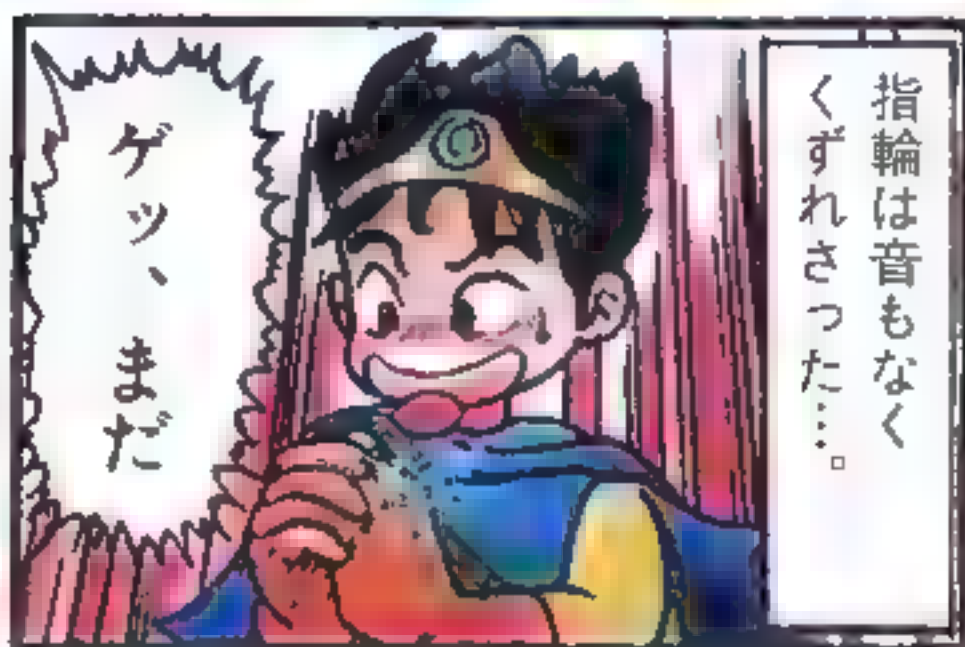
あの真実を映す鏡は、結婚の記念としてスリスの手からラーに献上されました。そして、『ラーの鏡』と呼ばれるようになったのです。

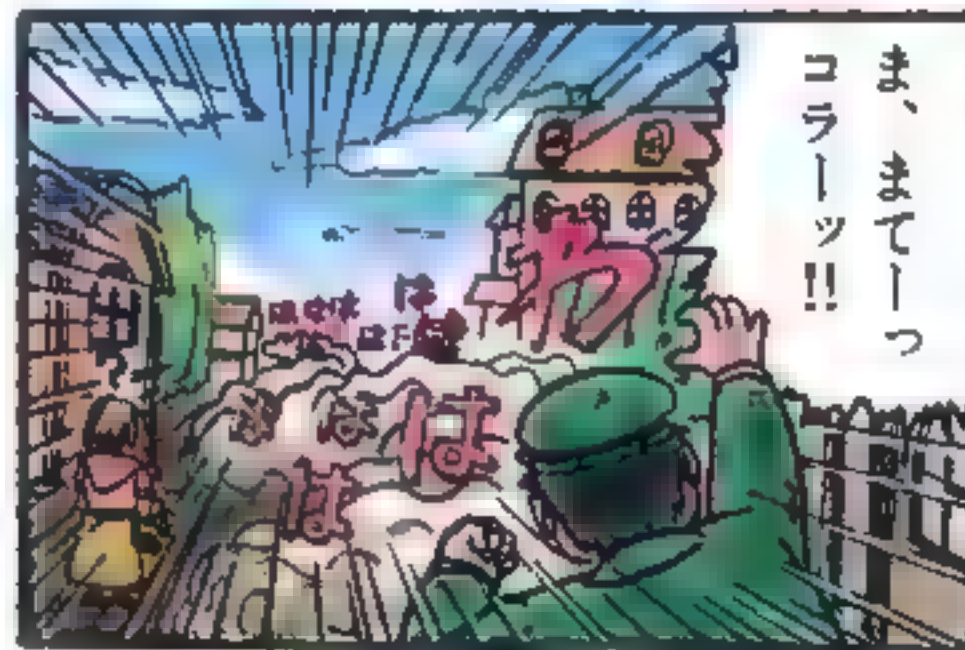
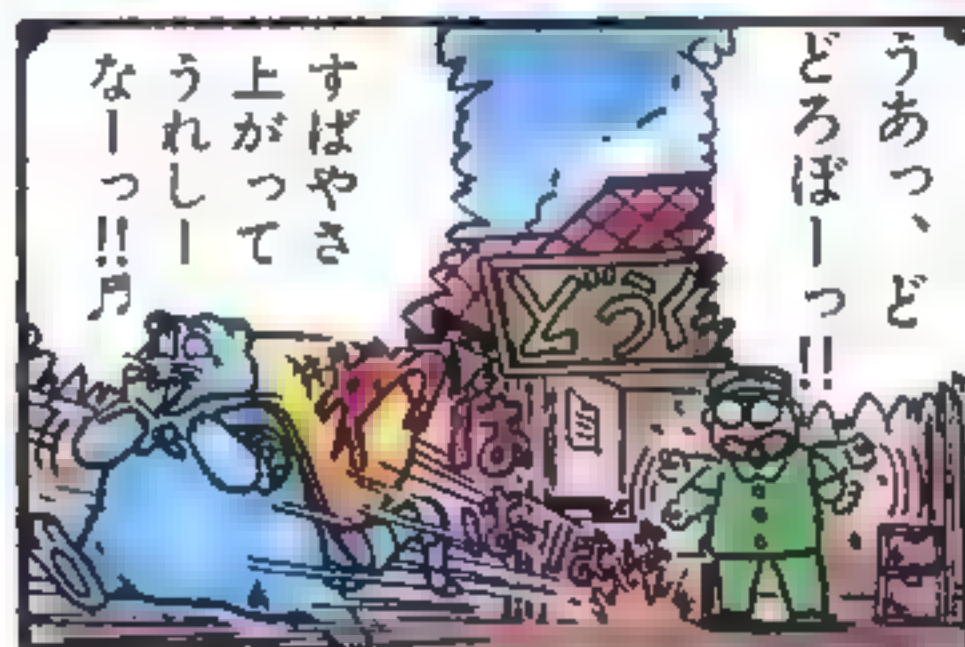
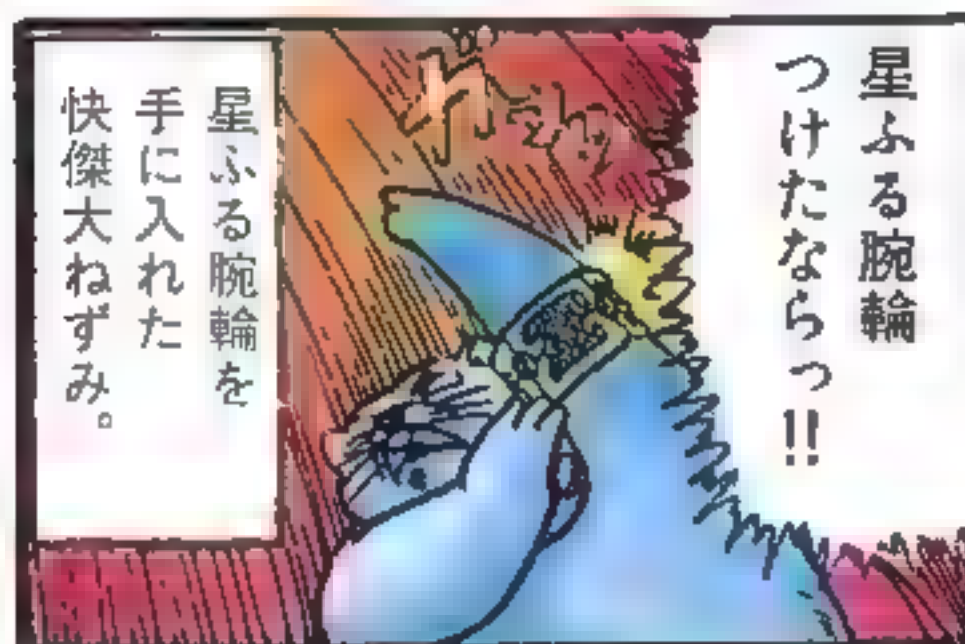
現在では、どうした理由からかその『ラーの鏡』は地上界のどこかに眠っているということです。

アレフガルド小劇場

星ふる腕輪をつけたなら!!

●星ふる腕輪●

祈りの指輪物語

●祈りの指輪●

祈りの指輪…指にはめて祈るとMPが回復する指輪。でも、壊れることも…

STONE OF WISEMAN
賢者の石
（賢者の石の謎）
STONE OF WISEMAN

あの邪悪の大魔王ゾーマがロトの勇者によって倒されたのは、六カ月ほど前のこと。アレフガルド全体を包んだ勝利を祝うお祭りさわぎもやっと静まったところです。

そして、このラダトームの城にもやっと、長いこと待ちわびていた平和で静かな日々がおとずれようとしています。

城の中もやっと落ち着いてきたようですが、どうも東の宮殿にある学者たちの部屋だけは妙に騒々しい様子です。

「だだだだっ、だからだぁぁ、一番最初からこのわたくしが申しているようにですなぁ。この石の秘密をば、明確にすることこそが、人民のためであると考えるわけです!!」

「ナァーニを言うかこのスカポンタン!! いくら便利な物でも魔王が残した物など汚らわしいことこの上ないわ。無用な調査や研究などやめにして、さっさとその石を破壊するなり、どこか遠くの安全な場所に封じ込めてしまうのが得策というものだわい」

東の宮殿、学問の間には総勢八十七人もの学者、賢者、僧侶そして魔道士たちが集まっていました。彼らの囲む円卓の中心には木製の台座に取りつけられた拳大の石が置かれています。

この空色に輝く石こそ、ゾーマの神殿から勇者が持ち帰った『賢者の石』なのです。

触れた者の体力を回復するのみならず、その近くにいる者にも活力をあたえるこの不可思議な石。この『賢者の石』をどのように扱うべきか、この会議に参加した学者たちの意見は、真っ二つに分かれていました。一方は、

「何とか石の秘密を解き明かし、人々の生活に役だてるべきであ〜るっ!」

という者たち、そしてもう一方は、

「どんなに便利な物とはいえ、魔王が作ったものなど人間が使うべきではな〜いっ!」

と言う者たち。どっちの意見もそれなりにスジが通っていて、平行線をたどるばかり。とても結論が出る雰囲気ではありません。

「ええ〜い! 一体何時間、いいや何日間こんなくだらない問答をくり返せば気がすむのかね? 傷が癒えるの、活力が湧くだの言っても、しょせんこれは邪悪な魔術のなせるワザ。ゾーマの残した形見ではないか! 一刻も早く始末してしまうべきなのは、当然の事であろう!!!!」

「しかし、しかしですな。もしこの石の秘密が解ければ、そして、われわれ人間のために利用できれば、病気やケガで苦しむ人々を救うことにもなるのですから……」

さきほどから、さかんに『賢者の石』を活用するべきだと主張しているのは、若い科学者のようです。

「よーし、分かった。貴公の言い分はよ〜く分かったぞ。それでは貴公に、ほんの少しでもいいから、この石についての研究結果を聴かせてもらおうじゃないか。うん？」

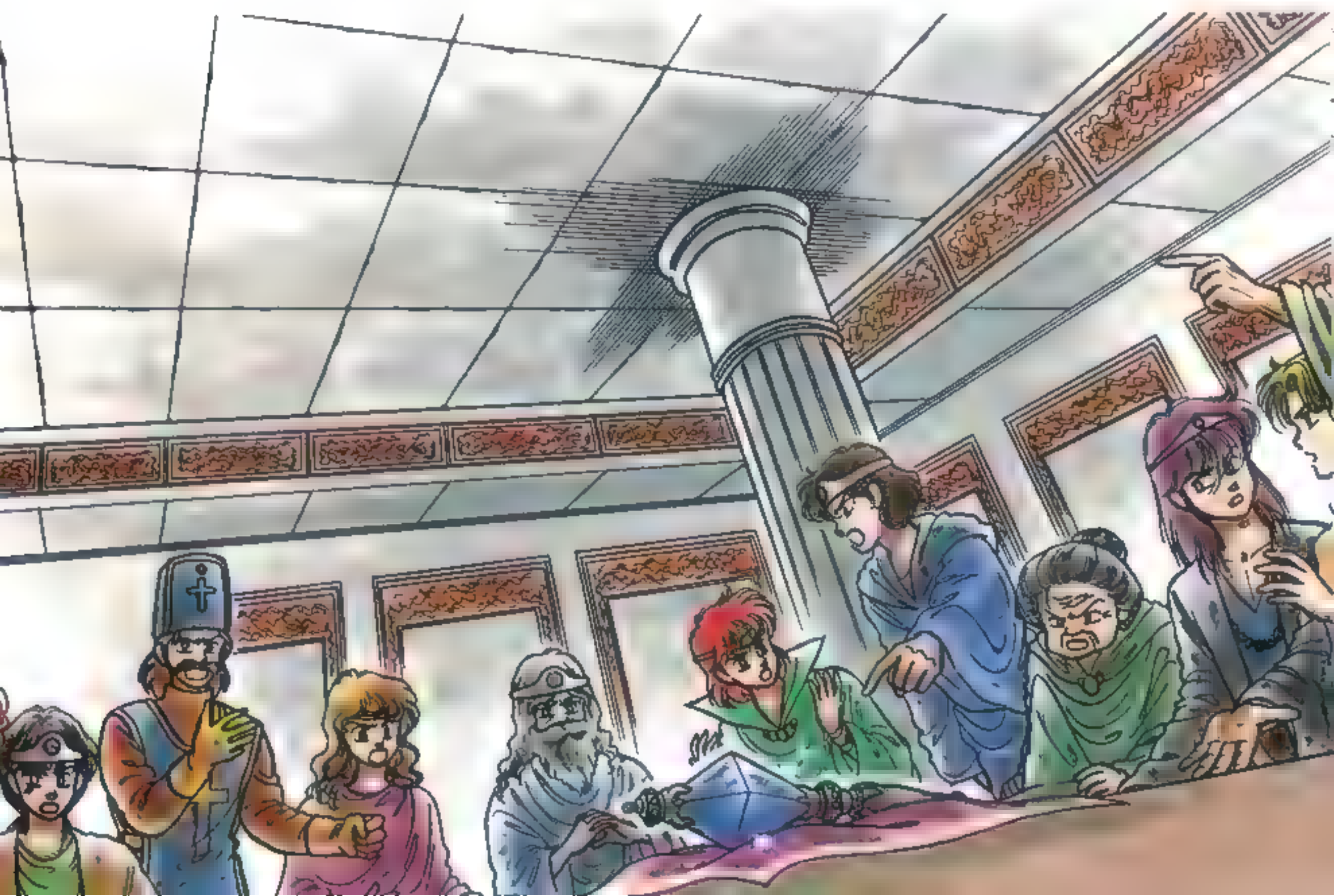
白い口ヒゲをぴくぴくさせながら、百歳は過ぎたかと思われる賢者がいじわるそうにほほ笑んでいます。

「どうじゃ。貴公はもう一ヵ月もの間、この石の研究をしているそうだな。よかろう、少しでも謎が解けそうなら、ワシも考えを改めるとしようかのう。まずはこの石、どんな成分でできておるのじゃ。答えてみよ！」

「そ、それは。その不思議な鉱物でできておりまして」

「ではその鉱物はどこで取れるものなのかね？」

「え、え〜と……。この鉱物の産地は、あの、はるか遠くの不思議な大陸でして……」

「ほ〜ほう。それで？　この石のエネルギーは一体どういう仕組みで生み出されるのかね？」

「あーあの。非常に摩訶不思議なシステムになっておりまして、その不思議な力が不思議と、その、湧き出ていておりまして……」

「なぁ〜んじゃそれはぁ！　不思議不思議の摩訶不思議と、お前さんの言ってることは何一つとして、よー分からん！デタラメのデマカセはいい加減にせんかいっ！」

とうとう老賢者は真っ赤になって怒り始めました。若い科学者は、くやしさにぶるぶると震えながら小さな声で言いました。

「……あと、もう少しなんだ。もうちょっと研究すればすべてが分かるはずなんだ。くそっ！」

老賢者はすかさずその独り言を聞きつけ、

「なぁ〜に？　なんじゃと、あと少しですべてが分かるとな？　おし、それでは聞くが、そのあと少しとはどれくらいじゃ？　うん？　どうじゃ少しぐらいはっきりした事を申してみよ」

賢者といえば、悟りを開いた人格者のはずなんですが、どうにもこの老賢者はイジワル者らしいですね。

若い科学者はすっかり困っています。しかし、

「分かりました。では三週……、いいえ三日でけっこう！

このわたしが、『賢者の石』の謎をきれいさっぱり解いてご覧にいれましょう！」

ついつい、老賢者の売り言葉に買い言葉。うっかりとんでもない約束をしてしまいました。

『賢者の石』を大事そうに抱えて、とぼとぼと自分の実験室に帰るこの若い科学者。名前をエストラゴンといいます。歳はまだ、三十にもなっていないはずです。幼い頃から天才少年と呼ばれ、今までにも鉄をサビないようにする薬や、雨の降る日を正確に当てる方法など、いろいろな発明をしてきました。エストラゴンの後ろを、これまたユウウツそうな顔で歩いてくる少年がいます。この少年はウラジミールという名前です。エストラゴンの助手をしています。

「まったくエストラゴン先生ときたら、研究をなさってる時は冷静沈着なんだが、論争になるといつもこうだ。すぐカッとなっちまう。なんてこった、三日で『賢者の石』の謎をぜーんぶ解くなんて、大魔王だってできないよ……」

研究室に戻ると、さっそくエストラゴンは実験に取りかかりました。まずは『賢者の石』の青い石の部分を取りはずし、水につけてみました。次に水につけたまま火にかざし、温めてみました。そしてまた冷やしたり、温めたり……。一日中繰り返してみましたが、しかし、何ひとつ変化はありません。

「ううーん。そうだやっぱり秘密はこの中身なのだ。石の中になにか特殊な成分がしみこんでいるのかも……。それを抽出できれば、うんうんそうだ。問題は……」

一日目は、とうとう、机に向かってあれこれと悩んでいるうちにすぎていきました。エストラゴン先生はかなり思いつめているようです。

エストラゴンもウラジミールも、もう二日間ぶっとおしで飲まず食わずのまま徹夜しているのですが、近くに『賢者の石』があるおかげで元気だけはいっぱいです。

ウラジミールはこれといって手伝いをすることもなく、だからといって先生を放りだして家に帰るわけにもいかず、ひまを持てあましていました。

「そうだ、ぼんやりしててもしょうがない。倉庫の中に、ロトの勇者が『賢者の石』と一緒に持ってきたっていう古文書があったっけ。アレでも調べてみるか」

このウラジミールという少年。特に頭脳明晰というわけ

ではないのですが、コツコツと勉強するのが好きなのです。
「あった。あった。コレコレ。ええと何だかヘンな文字で書かれているなぁ。えっと魔法文字の辞書はどこかな？」
ウラジミールはいつしか古文書に夢中になっていました。

この本には、簡単に言うとゾーマの伝記のようなものがつづられていました。ゾーマが天界を手中に収めるために、神々と壮絶な戦いを繰り広げた様子。さらに新しく邪悪な魔術を取得するために、厳しい修行をした話。どれもゾーマ自身が書いたものらしく、ずいぶんと誇張されていますが、なかなかおもしろい内容です。
「おや？　なになに――宇宙の息吹をつめたる石を作りて力の源とす――これはもしや『賢者の石』のコトっ？――多くの風、多くの水、多くの大地を掌をもって押し縮め、これにて生命の宿る――」
ウラジミールは古文書を抱えると先生のもとに走りました。
「先生！　エストラゴン先生！　ちょっと見てください。ここにゾーマが、なにか空間をおし縮めて石のような物を作ったと書いてあります。何かのヒントに……」

「そうだ、石を割って中を見てみよう。そうだ……」

エストラゴン先生の耳にはウラジミールの声は聞こえていないようです。

「割るんだ、石を割るぞ。ウラジミール！　大急ぎでノミとトンカチを持ってきなさい。大至急だ！」

「えっ？　ノミとトンカチ？　一体何を先生……」

ウラジミールはちょっぴり不安でしたが、倉庫に行って大きな工具箱を持ってきました。

エストラゴン先生はさらに自分で倉庫に行って、古めかしいヨロイを引きずりだしてきました。そして、それを着込むと右手にトンカチ、左手にノミをもって『賢者の石』の前に仁王立ちになりました。

「わが弟子、ウラジミールよ、わたしはついに決心した。この石を割るぞ。割るのだ！　そうすればすべての謎が解けるであろう。今こそすべての謎が解けるのだぁ」

「先生！　そんな！　こんなモンを割ったら爆発するかもしれないよ。やめてください。ボクには年老いた母ちゃんと小さい妹、それから弟もいます。父ちゃんもいるけど、ボクが死んだら困るんだ。危ないよ！　やめてっっ！」

「うるさぁぁぁい！」

カノツ―――ン！　ドッシ～ン……。

甲高い音とともに、エストラゴン先生がふっ飛びました。しかし、石は割れていません。あまりに石が固くて、反動でエストラゴン先生がひっくり返ったのです。

「う～む、これは―――」

「先生……!?　よくぞご無事で。ねっ、先生。この石は不思議な大陸で採れた不思議な鉱物なんでしょう？　だから、きっと絶対に割れないんですよ。もうやめましょう」

「何をデタラメのデマカセを言っておるのだ、お前は!?　絶対に割れないなどということは、絶対にないっ！　それ、もう一度!!!!」

「きゃぁ――！　助けて！」

カッッッッツ―――ン!!!!!!　バリバリバリッ……。

おやおや、石は割れてませんが、エストラゴン先生が勢いあまって壁に激突。割れたのは壁板です。

おや？　エストラゴン先生は急に何ごともなかったように、スックと立ち上がりました。そして、何にも言わずに廊下に出て行ってしまいました。

「あーやれやれ。今のショックで、先生はきっと正気になられたにちがいない。ボクの言うこともちょっとは分かっていただけたのかなぁ。とにかく、よかった。本当によかった……」

その時です！　エストラゴン先生が現れました。

「そうだ!!　分かったのだ。あんなチンケなノミで、この石を割ることはできないのだ。最初からコレを使うべきだった」

先生の手には、デスストーカーが持っているような巨大なオノがにぎられています。

「我が弟子ウラジミールよ。お前もよ〜く見ておくのだ!!　ついにすべての謎が解き明かされるのだぁぁぁぁ!!!!!!」

エストラゴン先生は全身の力をふりしぼり、オノをかつぎあげ『賢者の石』に突進していきました。

「キャアア！　もうダメだぁ、神様ぁぁぁぁ」

「ドゥアリャアー割れろぉっ!!」

パパパパパパ――――――ンッ!!!!!!

石はやけに景気のいい音とともに真っ二つに割れました。

すると……

ぞろぞろ、ゾロゾロゾロぞろぞろぞろゾロゾロゾロ……

「ワーイ、ヤッタゾ、ソトノセカイダァ」

「コレガ、ソトノセカイカァ、ワーイワーイ」

「ワーイワーイ」

ぞろぞろ、ゾロゾロぞろぞろゾロゾロ……。

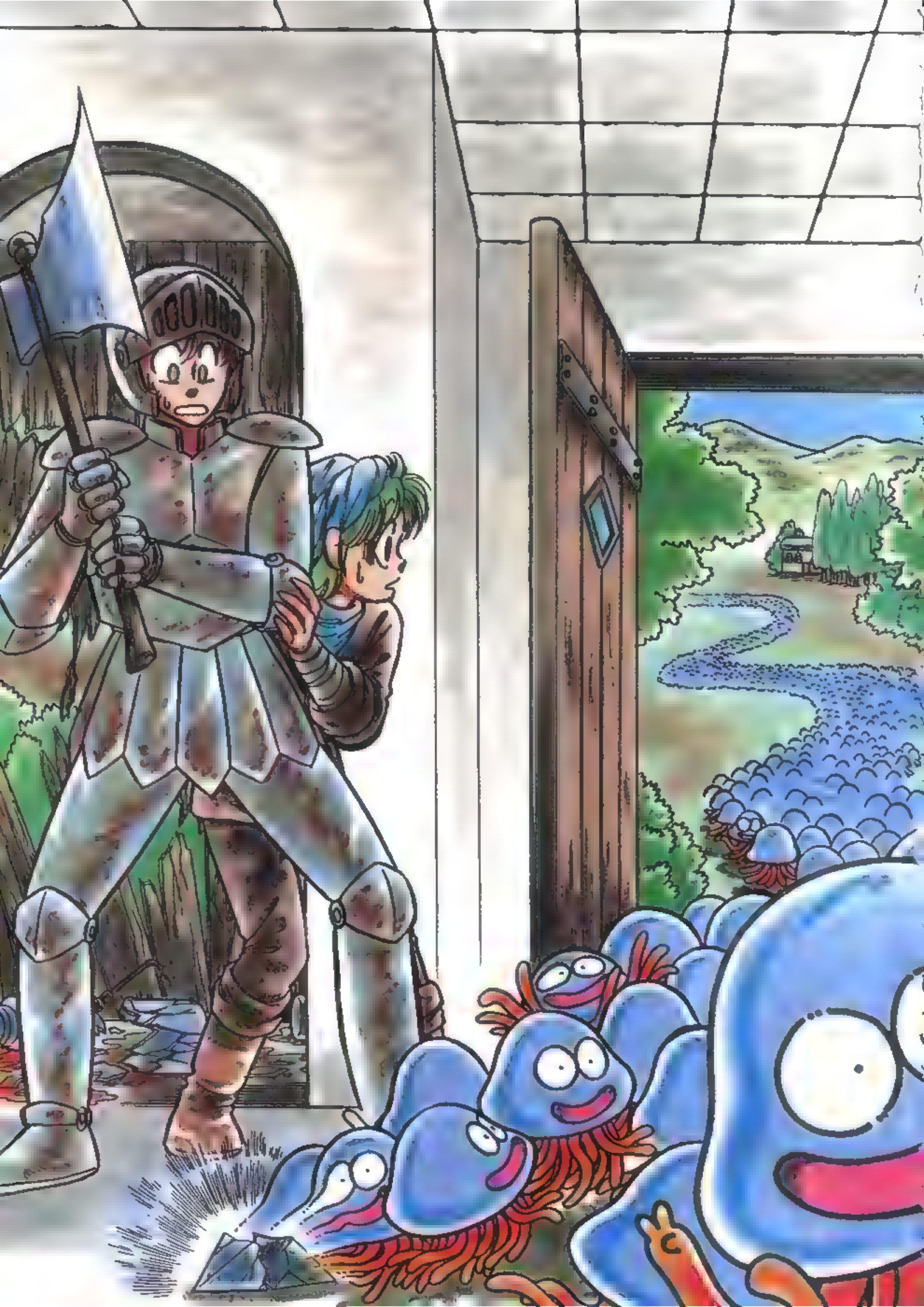
石の中からは、何百、何千、何億ものホイミスライムがもぞもぞとはい出ていたのです。

「なんだ、これは……どうしたのだ」

エストラゴン先生はあっけにとられています。

「そうかぁ、分かりましたよ先生。ゾーマは強力な魔術をつかって、広大な宇宙空間を圧縮して石状にし、その中にたくさんのホイミスライムを閉じこめたんだ。ネッネッ!!　やったね先生、謎がとけたんだぁ」

ウラジミールはうれしくなって、ぞろぞろとはいまわるホイミスライムの中を飛びはねました。しかし、エストラゴン先生はいつまでもボウゼンと立ちつくしていました。

それから約一週間もの間、エストラゴンの研究室からはホイミスライムがゾロゾロとはい出し続けました。おかげでしばらくの間、近所では病人が出なかったと言うことです。

はんにゃの面の呪い

●般若の面●

般若の面…呪われた力で身につける者の心を支配しかき乱す恐ろしい面

ホロゴーストVS命の石

●命の石●

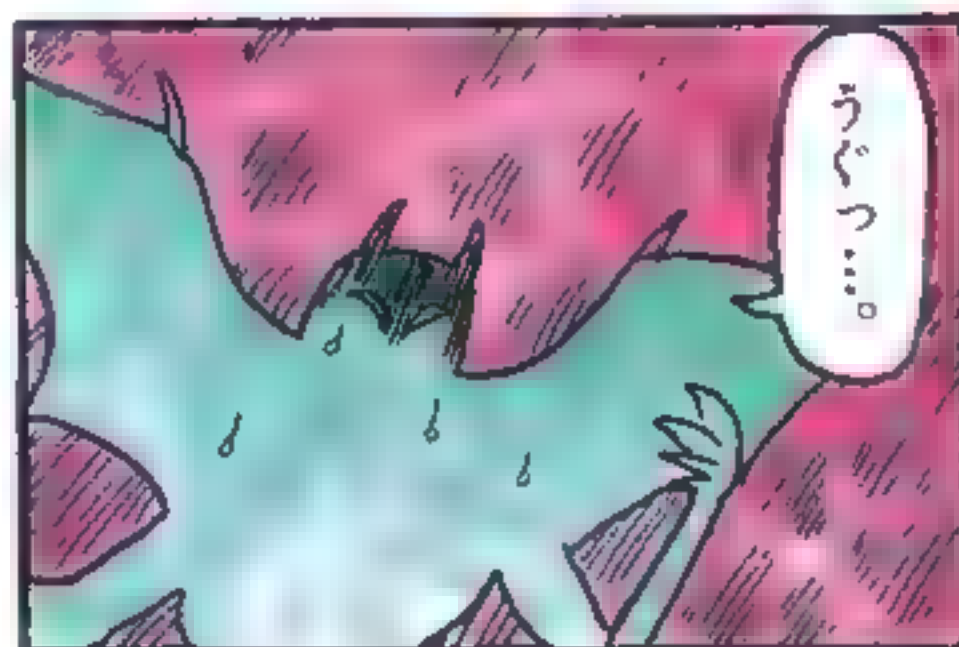
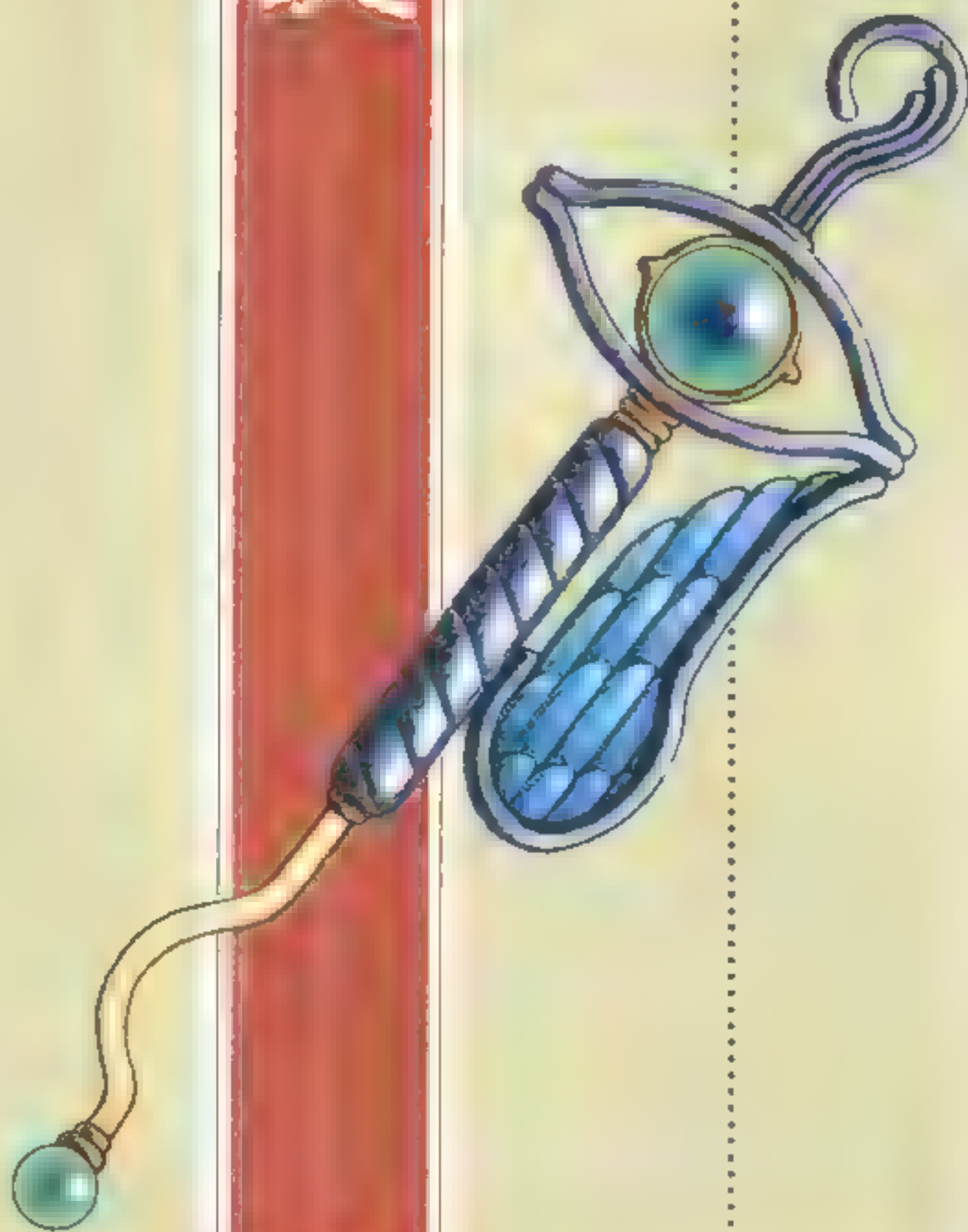
命の石…ザキ系の呪文をうけたとき、身代りとなって砕け散る神秘的な石

THE LAST KEY

最後の鍵

（永遠の秘宝を求めて）

THE LAST KEY

グゲーッ！

すさまじい悲鳴と共に鮮血をまき散らしながら、ガルーダの身体が海面に落下しました。

「冗談じゃねエ。夜が明けてからこれで六匹目だぜ」

小舟の上に仁王立ちした戦士が魔物の血で濡れた戦斧を拭うと、肩で息をついてつぶやきます。

彼がポルトガの港でこの船を手にいれ海へ出て十七日、故郷であるテドンの村を離れてもう半年近くになっていました。彼の名はアルカディオ。テドン周辺ではかなり名のとおった戦士でした。

「まったく、えらい約束しちまったもんだぜ」

アルカディオはブツブツ言いながら懐に手を入れ小さな鍵を取り出しました。かなり凝った装飾の施された鍵は不思議な光を放ち、先端部はまるで生き物のようにクネクネと形を変えているのです。

「ま、ともかくここまで来ちまったんだ。旅をつづけるよりしょうがねぇだろナ」

鍵をしまったアルカディオはオールを手にするとギッチラ、ギッチラ、小舟を漕ぎ始めました。

事の起こりは半年前でした。テドンの酒場でいつものように酒を飲んでいたアルカディオは、些細な口論が元で喧嘩をし、村の鍛冶屋を傷つけてしまったのです。もちろん戦士と鍛冶屋とではまともに勝負になるわけがありません。手加減して殴ったつもりだったのですが、相手は店の反対側の壁までふっとび、伸びてしまったのです。

「あんたに傷つけるつもりがなかったのは分かるが、村には村の法ってモンがあるからナ。悪いが十日ばかり入っていてもらうヨ」

村長に言われたアルカディオはおとなしく牢に入りました。怪我をさせた鍛冶屋とは古い顔馴染みだったし、彼自身、自分の酒癖の悪さにホトホト愛想がつきていたのです。

「酒さえ飲まなきゃいい奴なんだがナ……」

「まったく普段はおとなしくて優しい人なのにねエ……」

村人が陰でそう噂しているのはアルカディオも知っていました。でも独り者の彼には酒しか楽しみがなかったのです。早くに両親を亡くした彼には三つ年下の妹がいました。ゴツイ彼とは好対照のそれは可愛い娘でした。

「俺はなんとか金をためてあいつにうんと豪華な結婚式をあげさせてやるんダ」

それがその頃のアルカディオの口癖だったのです。

ところが一年ほど前、アルカディオの妹は村外れで魔物に襲われ殺されてしまったのです。そしてそれ以来、アルカディオの酒浸りの毎日が始まったというわけなのです。

「ま、ここにいりゃいやでも禁酒できるってモンだしナ」

アルカディオは牢の中でおとなしくしていました。

二日目が過ぎ三日目の朝がきてソロソロ退屈し始めた時、

「すまんが、アルカディオよ、この人の面倒を見てやってくれんかナ？」

村長が連れて来たのは戸板に乗せられた一人の老人でした。なんでも村外れで行き倒れになっていたそうなのです。

「知っての通りいまは刈入れで村の者はみんな忙しい。かといってこのままにしておくわけにもいかんしナ……」

村長はそう言って言葉を濁しました。

「そりゃオレも退屈してたからかまわないけど……」

なんともおかしな話ですが牢の中でアルカディオは老人の面倒をみることになりました。

「爺さんしっかりしなヨ。いま薬草をせんじてやっから」

根は優しいアルカディオです。それは親身になって老人を介抱しました。そして彼の拘留期限である十日目には、老人もすっかり元気になっていたのです。

「アルカディオ殿にはすっかり世話になってしまいました。ほんとうに感謝しておりますぞ」
メルキアデスと名乗った老人はアルカディオと一緒に牢を出ると、そう言って深々と頭をさげました。
「いいってことよ。困った時はお互いさまサ。それより爺さんはずっと旅をしてるって言ってたが、目的地はどこなんだい？　ここよりまだ遠いトコなのかい？」
アルカディオにそう聞かれた老人は、しばらく黙って考え込んでいましたが、やがて……
「どうじゃろうアルカディオ殿、あんたを正直者と見込んで頼みがあるんじゃが、聞いてもらえまいか？」
そう言いながらメルキアデスは懐から小さな鍵を取り出したのです。
「この鍵の先端、キラキラ光った部分はマネマネ銀と言う不思議な金属でできておる。ホレ、触ってみなされ、妙な感触じゃろう？」
確かに虹色に輝く鍵の先端は、なんとも形容のしようのないモノでできていました。硬いようでもありまた反対に、まるで粘土のように柔かい感触でもあるのです。
「この鍵を使えば、世界中開かない扉はないいんじゃヨ」
メルキアデスはそう言って自分がこの鍵を造ったいきさつを話し始めました。
彼、メルキアデスはアッサラームという街に住む職人でした。鍵や飾り物、宝飾品を造るのが仕事です。
「あるときわしは旅の商人から最後の宝の噂を聞いたんじゃ。東の海のどこかの小島にこの世でもっとも貴重な宝があるとの噂をナ……」
ところがその宝がしまわれたほこらには厳重な鍵がかけられており、どんなに腕のいい錠前職人や盗賊にも、開くことができないというのです。自分の鍵造りの腕に自信を持っていたメルキアデスは、この話にいたく興味をそそられました。しかし、どんな構造の錠前か知らないで合鍵を造るのは無理な話です。といって、鍵を造るのに必要な設備を持って旅をするわけにはいきません。小さな物とはいえ、金属を溶かす炉や鋳型を造るための木枠などは、とても運べっこないからです。
「そこでどんな鍵穴にも合う鍵を造ることにしたんじゃ」
見れば老人の手にした鍵の先端は光りながらクネクネと形を変えています。確かにこの鍵ならどんな錠前も開きそうです。

「しかしメルキアデスさん、もしこれが盗っ人の手にでも入ったらえらいコトになるんじゃないか？」
「その通りなんじゃヨ。悪用されれば一大事じゃ。それにどこで嗅ぎつけたのか、魔物までがこの鍵を狙っておるようなのじゃ。わしがこの村の前でいき倒れたのも、魔物から逃げていて道に迷ったからなんじゃ」
そう言いながら老人はアルカディオに鍵を握らせました。
「そこでおまえさんを見込んでの頼みというのは、わしに代わって最後の宝を捜しに行ってはもらえまいか？　わしは見ての通りの年寄りじゃ、今度魔物に襲われたら生きてはおれんじゃろう。その点あんたは若いし力もある……。それに何より正直者じゃ。どうかな、見つけた宝はあんたのモノにしてかまわん。わしはただ、自分の造った鍵が誰にも開けられなかった錠前を開けることができたという、そのことを知りたいだけなのじゃ」
アルカディオは老人の話を聞き終わると、じっと考え込みました。
'——確かにこの爺さんにはこれ以上の旅は無理だろう。それに俺にしたところで、この村にいなくちゃならんという理由があるわけじゃないんだしナ——」

こうしてメルキアデス老人から不思議な鍵を託されたアルカディオは、生まれ故郷のテドンの村を旅だったのです。最初の目的地は港町ポルトガでした。そこで舟を手にいれなくては宝のある小島へはいけないからです。

そしてメルキアデスの言ったとおり、行く先々で魔物たちが待ち受けていました。エリミネーターや腐った死体、そして空からはヘルコンドルやガルーダが襲ってきました。

「ったくどうなってんだ？　多少でも知恵のある魔物ならこの鍵を欲しがるのも分かるが、まるで獣同然の頭しかない連中まで狙っているなんて……」

やっとのことでポルトガにたどり着いたアルカディオは、浜で漁師に船を出してくれるように頼みました。ところが、

「冗談じゃないよ旦那。近頃めっきり魔物の数が増えて漁に出るのもままならないんだ。この前だって結構でっかい商船が、ヘルコンドルの魔法でどっかにぶっ飛んじまった。オレの船で外海に出るなんて自殺するのとおんなじだヨ」

いやがる漁師にかなりの金貨を握らせたアルカディオは、この小舟を借りると海へ出たのです。

運よく海は穏やかでした。それでもさっきアルカディオがぼやいていたように、魔物だけは頻繁に現れたのです。

さっき襲ってきたガルーダや極楽鳥といった空の魔物は、アルカディオにとってそれほど恐ろしい相手ではありませんでした。呪文による攻撃さえ気をつければ、楽に倒すことができたのです。問題は海の中から小舟にはい上がろうとする連中でした。しびれくらげやマーマンといった水中の魔物は、一匹なら大したこともないのですが、何しろ数が多く、うっかり攻撃を避けそこなうとマヒする恐れもあったのです。

「ともかくポルトガの連中が言ってたとおり、まっすぐ北へ向かうとするか」

進路の右手に陸地を見ながら、アルカディオの小舟は北上して行きました。

やがて海の色が徐々に変わり始めました。今まで真っ青だったのが、どことなくくすんできたのです。それに風も随分と冷たくなってきた感じがします。

「ブルっ、なんだか冷え込んできやがったナ」

寒さを振り払うように懸命に漕ぎつづけたアルカディオは明くる日の早朝、小さな村を発見しました。滅多に旅人のよらないこの村の住人はとても親切でした。

「なんと！　この小さな舟でポルトガから来なすったの

か」
村の長老はアルカディオの話に目をまるくして驚くと、温かいスープを振舞ってくれました。
「あんたが捜している小島は多分ここより北、氷の海峡の向こうにあるヤツのことじゃろう。昔から魔物の住処だとか、海賊の宝が隠してあるとかいろいろ言われておる場所でナ、不気味な島なんで近くの漁師も近づきゃせんのじゃヨ」
一日ゆっくり休んで鋭気を養ったアルカディオは、村人から食料と毛布をもらうと再び北の海へと舟を出しました。両側から山のような氷が迫り出している海峡を越えると、彼方に小さな島影が見えました。
「やったぞ！　とうとう宝の島にたどり着いたんだ」
アルカディオはマメだらけになった手に再び力を入れてオールを握り直すと、小島目指して勢いよく小舟を進めました。ところが島まであともう少しという所まで来ると、突然に黒雲が広がり始めたのです。まるで水槽に墨を流したかのように辺りが暗くなりました。
「ケケケケケッ　アルカディオよ！　よくぞここまでたどり着いたネ。その根性だけはほめてやるヨ」
見上げれば真っ赤な服をまとったしわだらけの女が、箒にまたがって空に浮いています。高位の魔法を修得した魔女、魔法オババです。黒雲はこの魔物が呼び寄せたのでした。
「欲に目が眩んだ哀れな人間め財宝などどこにもないワ」
オババはそう言うと手にした杖の先端をアルカディオに向けました。すさまじい電光がほとばしり水煙があがります。アルカディオは右手に戦斧を持ち左手だけで小舟を進めました。
「おとなしく鍵をわたせば命だけは助けてやろう。元はと言えばその鍵も、材料となったマネマネ銀もわしら魔族のもの。おまえはあのメルキアデスにだまされたのじゃ！」
「いいかげんなことを言うな！」
アルカディオが怒鳴り返しました。その時には小舟は既に、島まで十歩ほどの距離まで近づいていました。
「嘘と思うならアレを見てみい！」
魔女が杖で指した方を見て、アルカディオはハッと顔色を変えました。小島の中央、小さなほこらの入り口には、屈強な二匹のデスストーカーに両側から腕を押さえられたメルキアデスがいたのです。

「アルカディオ殿、わしはどうなってもかまわん！　何があってもその鍵を渡してはなりませんゾ！」
老人は必死で叫びました。
「エーイ面倒な！　二人まとめて地獄に送ってやるわい」
魔法オババはそう言うとつづけざまに呪文を唱えました。
二匹のデスストーカーもメルキアデスを殴りつけると、小舟に向かって襲いかかってきました。
ガーン！　斧と斧がぶつかり合い火花が散ります。
「とりゃーっ！」
気合いもろともアルカディオは二匹の魔物を斬り伏せます。水しぶきを上げてデスストーカーが海に落ちるのを見た魔法オババは、怒り狂って急降下してきました。
バリバリバリ！　杖から放たれた電撃を紙一重でかわしたアルカディオは、手にした戦斧を投げつけました。戦斧は見事にオババの心臓に命中し、魔物は悲鳴を上げると海に落ちました。
「メルキアデス殿、これご老人、しっかりしなされ」
ほこらの前で気絶していたメルキアデスを、アルカディオは抱え起こしました。
「中へ……ほこらの中へ連れて行ってくだされ」

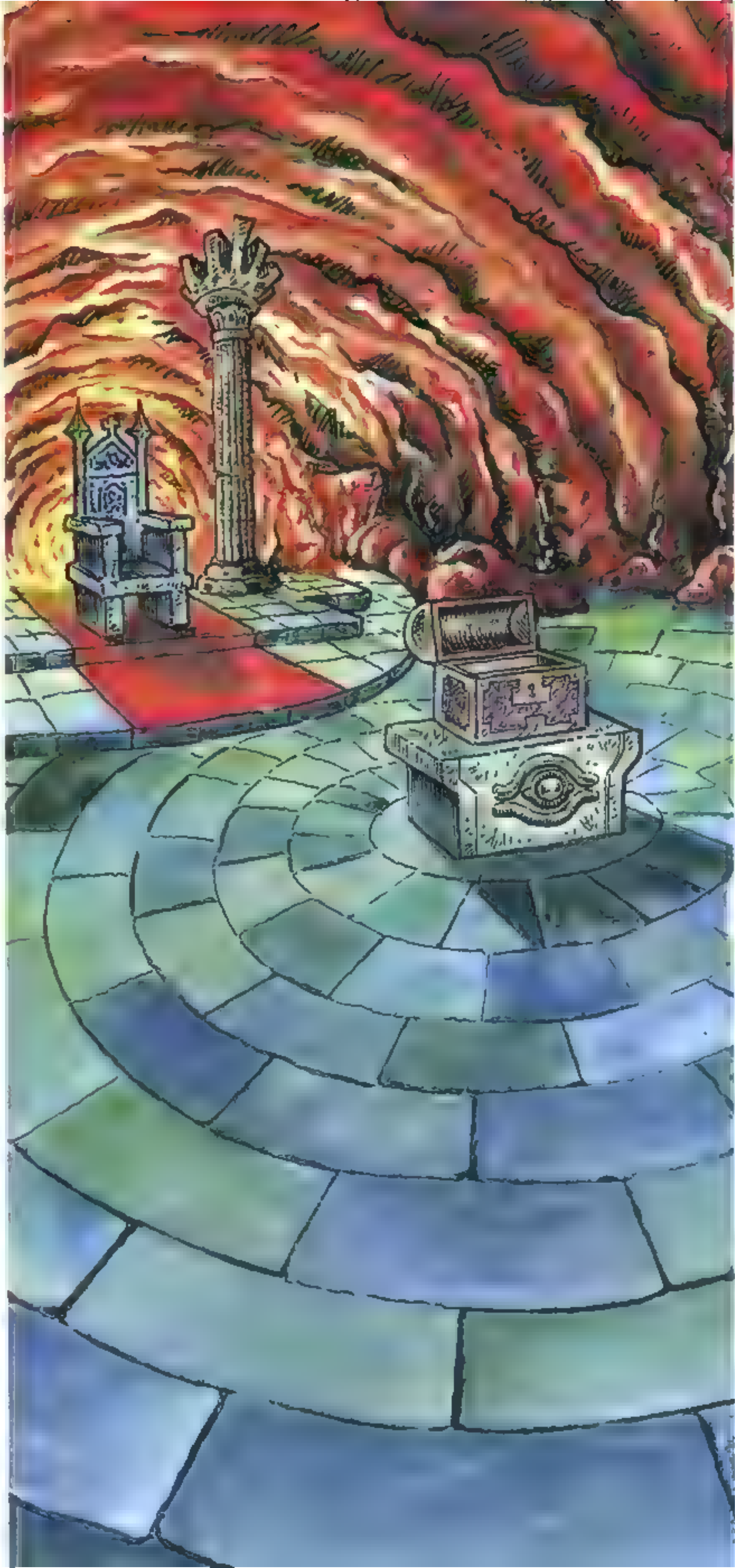
苦し気にうめく老人を抱きかかえアルカディオは、ほこらの中へと入って行きました。

「こ、これは……」

なんとほこらの中はかなりの広さがあり、床にはモザイク模様の敷石まで敷いてあったのです。けれど生き物の気配はまるでなく、それどころか宝らしい物もありません。

部屋の中央に置かれた箱は蓋が開いており、中はからっぽです。

「あなたをだますつもりはなかったんじゃ……。だがこうでもしなければ鍵をここへ運んでもらえんと思ってナ」

「メルキアデスさんよ、オレにはわけが分からん。一体全体こいつはどうなってるんだい？」

アルカディオの言葉に老人はことの経緯、本当のわけを話し始めました……。

メルキアデスはテドンの村での話どおり腕のよい職人でした。女主人にしか開かない宝石箱や、子供のつまみ食いをできなくしたお菓子の箱、これはおやつの時間しか開かないのです。彼が造った細工物や錠前はどれも高値を呼び、メルキアデス自身かなり裕福な暮しをしていました。

そしてアノサラームに住む彼の評判を聞きつけ、遠い異国から仕事を頼みに来る人も多かったのです。そんな中にイシスの豪商の夫人がいました。五年ほど前からの上客で、金払いの良い点に関しては飛び抜けていました。

「今までの宝石箱よりもっと大きくて丈夫な物を……」

それが最初の注文でした。そして半年後には……。

「近頃物騒ざます。護身用に電光が出る杖を作って欲しいざます。魔法を知らない私にも使える物を……」

こうしてメルキアデスは夫人の注文で様々な品を作ったのです。払いはいつも現金で、一度だって遅れたことはありませんでした。そしてちょうど一年前……。

「珍しい金属が手に入ったざます。これで屋敷中のどの扉も開く鍵を造ってほしいざます。百も二百も鍵があって、あたくし覚えきれないんざます」

思えばメルキアデスはこの時、多少でも相手の素性を疑ってみるべきだったのです。

夫人が持ってきた金属は、マネマネ銀という不可思議な銀でした。決まった形がなく、まるで水銀のように姿を変えるのです。それでいてちょっと力を入れてひねると、普通の金属のように硬くなるのでした。

メルキアデスはマネマネ銀を熱したりさましたりして、なんとか鍵をこしらえました。

ところが夫人の泊まっている宿屋に鍵を届けに行ったメルキアデスは、とんでもない話を耳にしてしまったのです。

扉の隙間から聞こえてくるのは、いつもの甲高い声とは正反対の低く、くぐもった声でした。

「馬鹿な人間め、言われたとおりつぎからつぎへとこっちの欲しいものを作りよるわい。今度の鍵ができれば世界中の旅の扉も勝手に使えるというものじゃ」

「さすがでございますねオババ様、これで魔王様の世界征服計画もまた一段と楽になるというもの」

なんと豪商の夫人とは真っ赤な嘘！　魔法オババが化けていたのです。ヘラヘラとお世辞を言っているのは召使

に化けていたデスストーカーでした。

だまされていたことを知ったメルキアデスは、一目散に宿屋から逃げ出すと、家に戻らずそのままアッサラームを離れたのです。今までに作った雷を呼ぶ杖や、魔力の消費を抑える帽子が、魔物の、それも世界を支配しようとしている魔王に利用されていたのです。メルキアデスは自分のうかつさを呪いました。

「わしは鍵をどこか魔物の手の届かん場所に捨てるつもりじゃった。海の底か火山の火口にでもナ……」

メルキアデスは着のみ着のまま鍵を捨てる場所を求めてさ迷いました。そして、とある山の中腹で野宿をした時に不思議な夢を見たのです。

「まったく不思議な夢じゃった。美しい女の人が現れてこういったんじゃヨ」

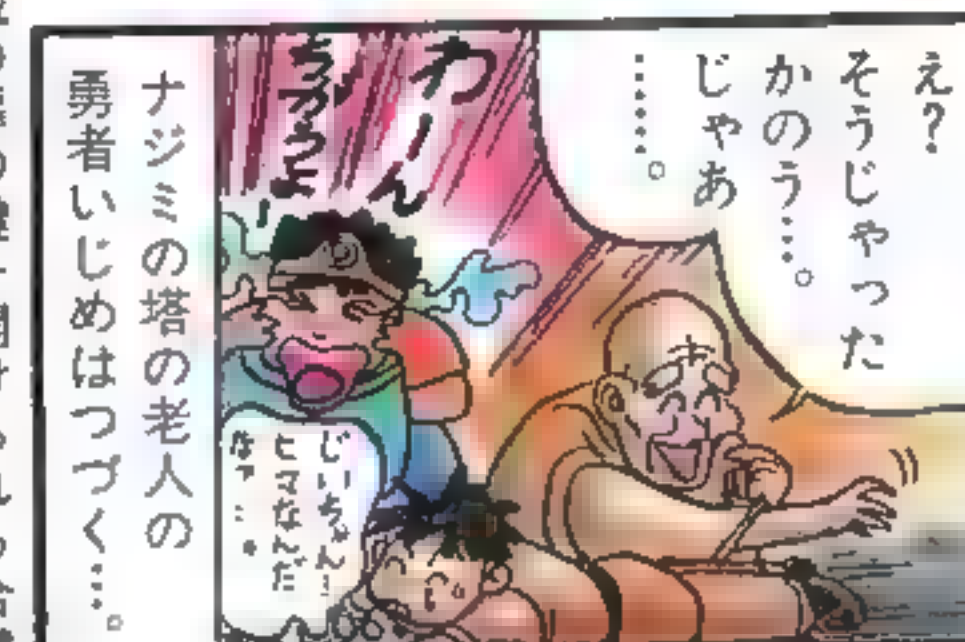
——その鍵を捨ててはなりません。あなたは二日後に鍵がなくては出られぬ場所にいるでしょう。そしてそこで一人の男と出会うはずです。彼に鍵を託しこう話すのです——

そしてその時に女の人が話した話こそが、この世で最も貴重な最後の宝のことだったのです。

「後はアルカディオ殿も知っての通りじゃ」

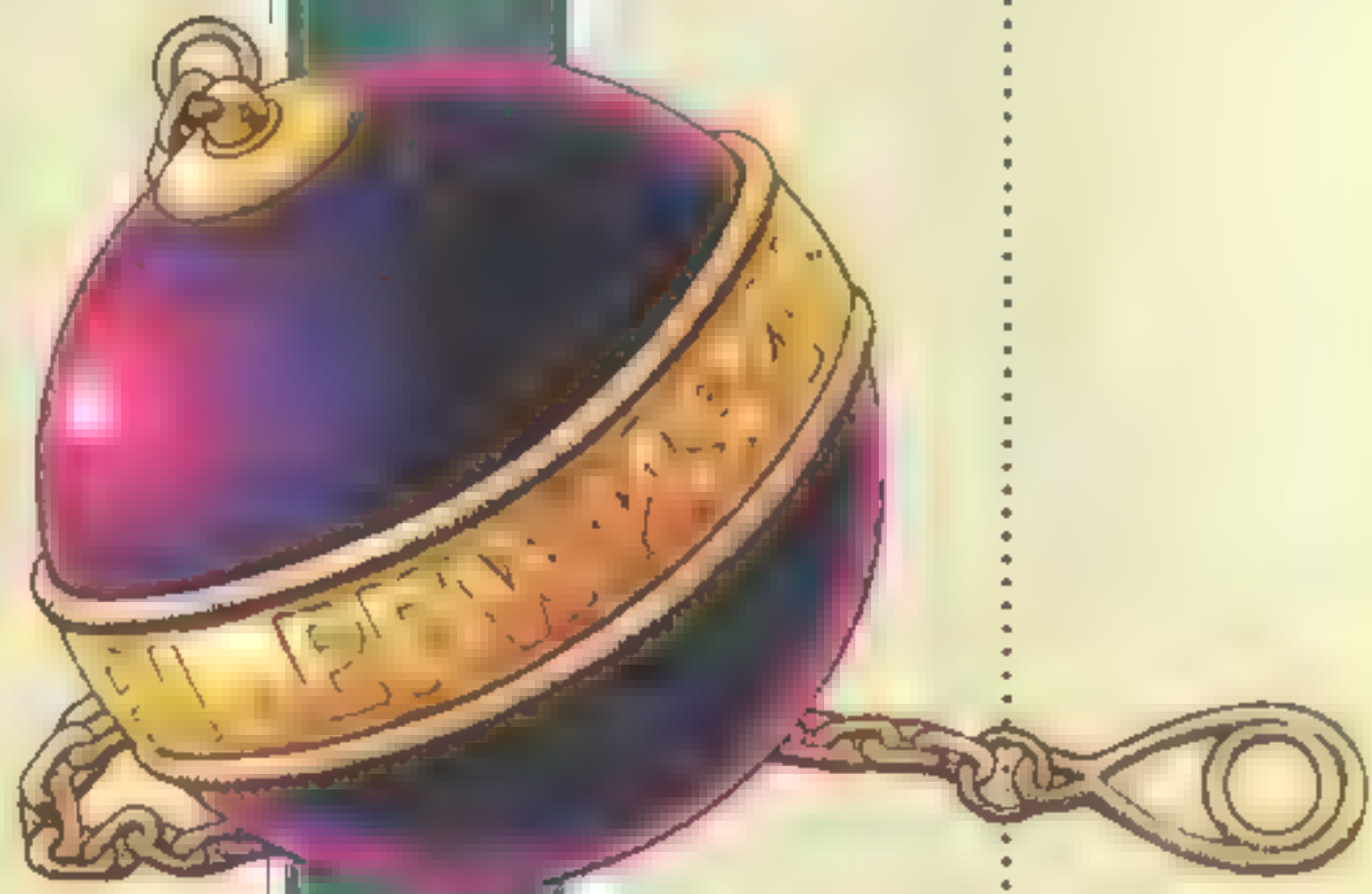
牢屋の中からは確かに鍵がなくては出られません。
それに介抱してくれて、アルカディオは鍵を任せるにふさわしい偉丈夫でした。嘘をつくのは気が進まなかったメルキアデスも、結局夢のお告げに従ったのです。
「テドンの村で別れた後、もう一度だけ夢のお告げがあったんじゃ。世界を救う勇者がまもなくアリアハンの国に生まれるとナ、そしてこの鍵は勇者が魔王を倒すために是非とも必要なものなんじゃ」
そう言うとメルキアデスは部屋の一番奥に置かれていた椅子に腰掛けさせてくれるよう頼みました。
「いろいろと世話になったの、アルカディオ殿。間もなくこの島は海中に沈むはずじゃ、鍵をそこにある箱へ入れて早く出られるがよい」
「あんたは、あんたはどうするんだ？」
「わしはここへ残る。残っていつの日か訪れる勇者のしるべとなるのじゃ。それが魔物のために様々な道具を作ってしまったわしのせめてもの罪滅ぼし……」
老人の言葉にアルカディオは黙ってうなずくと、鍵を箱の中に入れました。するとまるでそれを合図にしたかのように島全体がゆれ始めたのです。
「さ、急がれよ！　嘘をついたことは許してくだされ」
椅子の上に身を乗り出して叫ぶ老人にアルカディオは答えました。
「あんたは嘘なんかついてねえサ。オレは確かにここで大事な宝を見つけたよ。人生の目的って宝をナ！」
ほこらを飛び出したアルカディオが小舟に乗ると、島はゆっくりと水中に没していきました。後にはゴツゴツした岩礁がわずかばかり頭を出しているだけです。
「アリアハンか、こっちからじゃちっと遠いが頑張ってみるか」
アルカディオはそう言うと勢いよく舟を漕ぎ始めました。
ここで見つけた大事な宝。それは勇者と共に魔王を倒すことでした。
「いくら勇者でも魔王と戦うにゃ仲間がいるだろうからナ。まってろヨ、今おれが助っ人に行ってやっからナ」
小舟はやがて水平線の彼方に消え、まるでそれを追うように真っ赤な夕日が沈んで行きました。

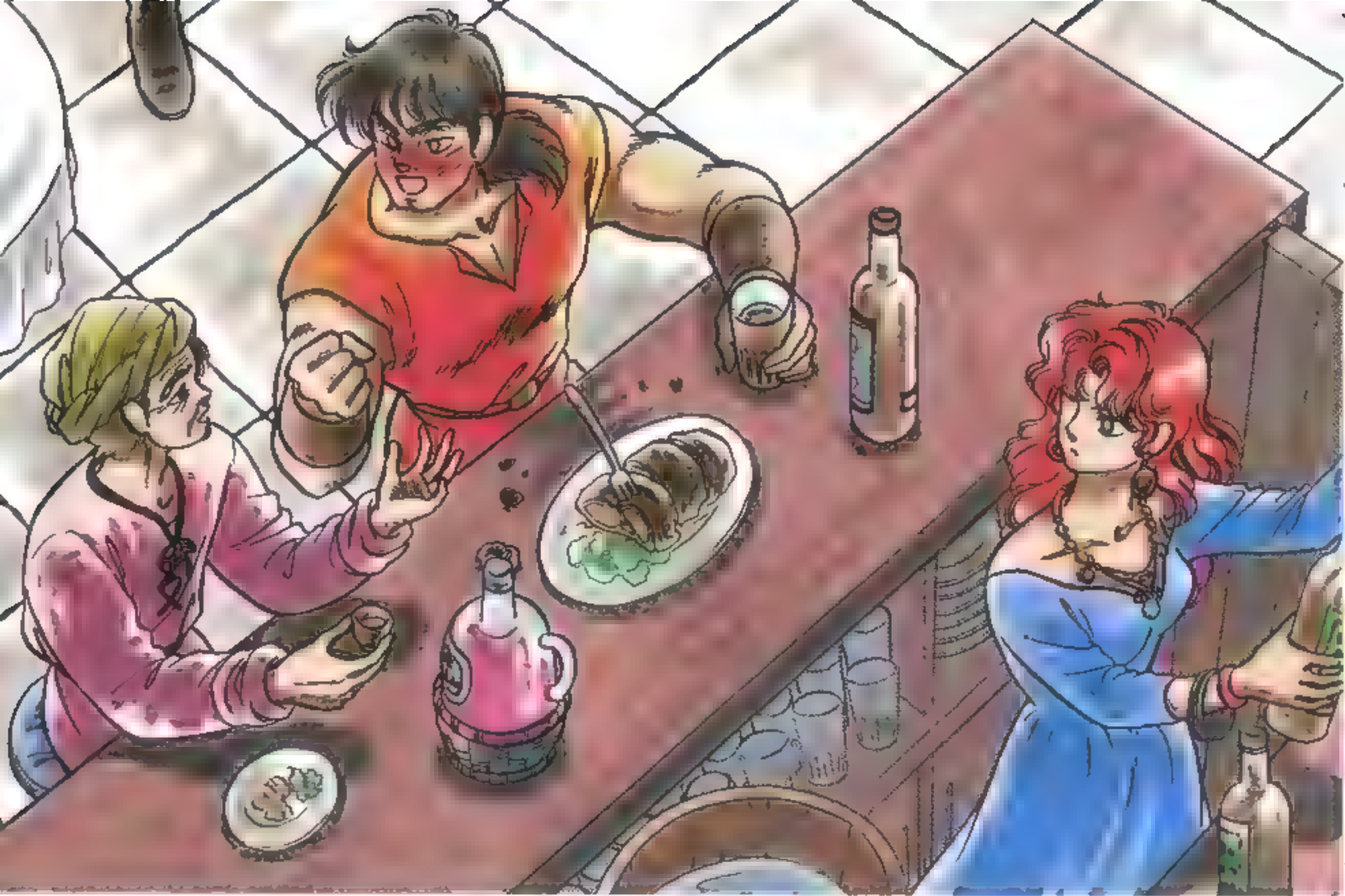
ナジミの塔の誤解!!

●盗賊の鍵●

盗賊の鍵・・木でできた盗賊の扉の鍵を開けられる合鍵

MAGIC BALL

魔法の玉

（アリアハン脱出！封印破りの火薬玉）

MAGIC BALL

それは、若き勇者たちがバラモスを退治するためにアリアハンを旅立つより、少し前の頃のお話です。
アリアハンの片隅にあるルイーダの店は、バラモス征伐の噂を聞き、獲千金を夢見る戦士や武闘家たちで、今日も賑わっていました。
おや？　カウンターに一人、とっても威勢のいい若者がいますね。大きな体を揺さぶって、店中に響き渡るような大きな声でおしゃべりしています。
「ヒック、オレはよう、絶対に絶対にずぇ～ったいにバラモスとやらを退治してやらぁな。そしてよ、ほうびをたんまりもらってよ、そんでもってキレ～なお姫様と結婚しちったりなんかしてよ～、なんちってヒック」
う～ん、どうやらだいぶお酒が回っているようですね。
「ちょいとアンタ、どうでもいいけど、もう少し静かに話しておくれよ。他のお客さんに迷惑だと思わないのかい」
ルイーダがたまりかねて注意したようです。
「うっせえなババア、せっかくおれ様がごきげんに呑んでるときに、何わけわかんねぇこと言ってやんでぇヒック」
「フンッ。アンタなんか、バラモス退治に行けっこないさ。アタシが許さないね、アンタみたいなノ～タリンは！」
「な、なにを～!!」
「まぁまぁ、お二人とも、もういいじゃないか。フ～ム、お前さんバラモスを退治に行くそうだが、しかし一体どうやってこのアリアハンから出るおつもりじゃね？　アリアハンはここ何十年も他国との交流を避けておるんじゃて、港にゃ船なんぞは一隻もないっちゅうことを、よもや知らんわけじゃあるまいに」
隣に座っている、山葡萄のワインをちびりちびり呑んでいた老人が、男に話し掛けました。
「……ん？　ん？　お～、そうだったか。でもよぉ、そしたら誰も外に出られないってか？　だったらバラモス退治にどうやって行くんだよ。まさか、ピュ～っとひとっ飛びで外に出るなんちゅうこたぁ、できねえだろうよ」
「んにゃ、そのまさかじゃよ。お前さんは知っとるかの、東の山向こうに古びたほこらがあるじゃろ。あそこには、お前さんが生まれる百年以上前から、旅の扉っちゅう便利なもんがあってのう。そいつを使えば、あっという間に外の世界へ行けちまうんじゃよ。ん～、まぁもっとも今は全く使っとらんらしいがの」
老人から聞いた耳寄りな話に、男はポン！とゲンコツで

てのひらを叩きました。
「そ、それだっ！　じいさん、いいことを教えてくれたな。ウヒヒヒ……、これでオレ様がバラモス退治の一番乗りってわけだ。恩にきるぜじいさん、この金でたんまり呑みな。オレはもう帰るからよ、旅支度しなくちゃなんねえから」
「お、おい、ちょっと待たんか、旅の扉はのぉ……」
慌て者の男は、老人の話を最後まで聞かずに、なにやら勝手に思い込んで帰ってしまいました。
「ちょいと、これじゃアンタ自分の分しかないじゃないか、調子のいいやつだねっ、ちょいとお待ちよっ」
ルイーダがカウンターの端から身を乗り出して呼びかけたときには、男は町の雑踏の中に紛れて消えていました。

男の名はドーラといいました。
翌日になって、ドーラはさっそく東のほこらへ向かいました。今まできこりの仕事をしてため込んだ貯金をはたいて買った、皮のよろいや盾を身につけ意気揚々としています。あんまり似合ってなくて、ちょっと妙ですけどね。
ドーラは小さい頃から山育ちなので、山道を歩くのは得意中の得意。地図がなくても、カンだけで方向を間違えず

に歩いていけちゃうのは、サスガです。しかし、魔物とは、生まれてこのかた戦ったことがないので、ずいぶん苦労しているようです。だって、途中で出くわしたスライムでさえも、使い慣れてない銅の剣を振り回すだけ振り回して、結局逃げられてしまう始末。こんなので魔王退治なんて、本当に大丈夫なんでしょうか……。

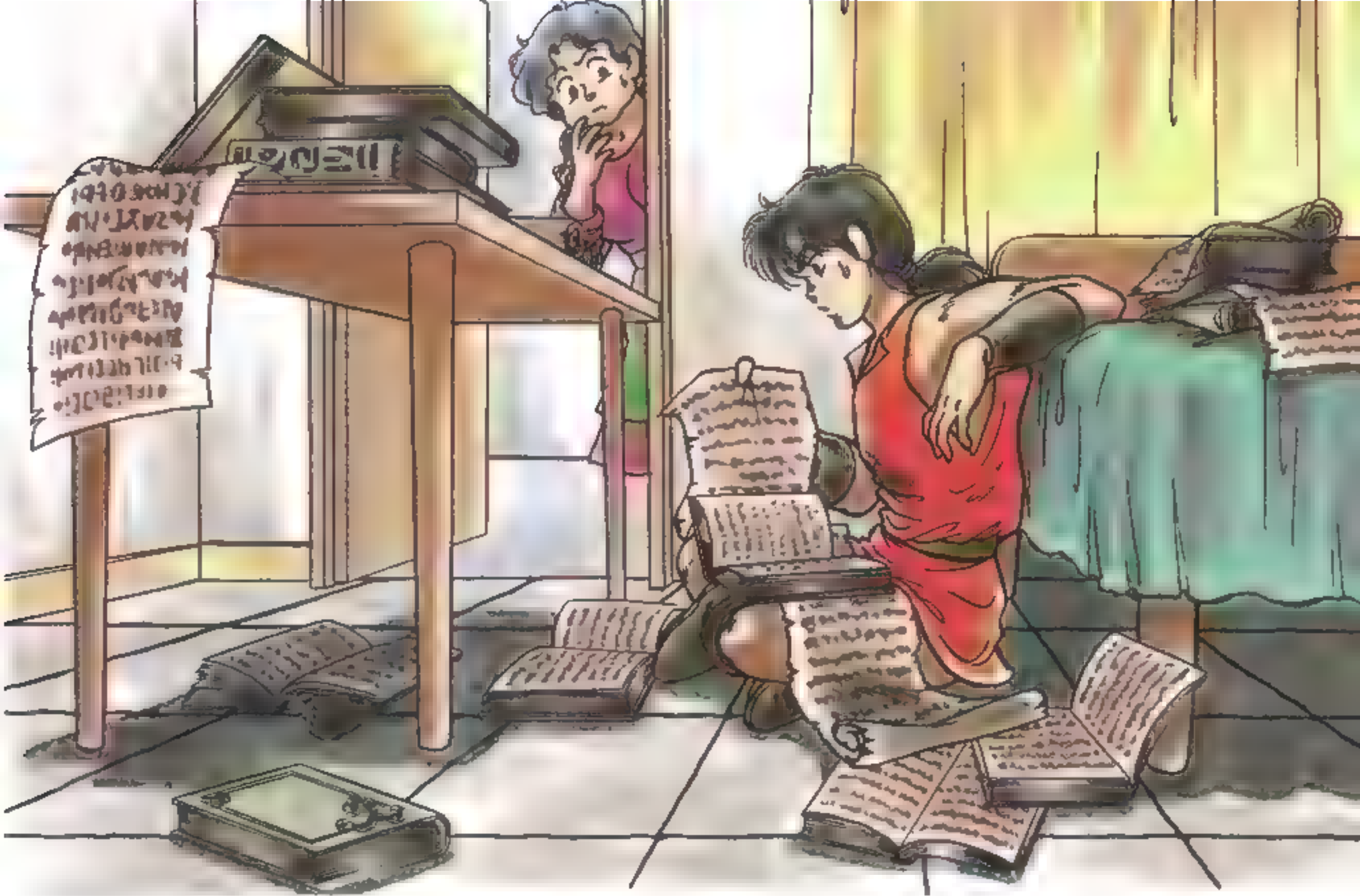
古めかしい赤煉瓦で作られた小さなホコラにたどり着いたときには、辺りはもうすっかり暗くなっていました。

木戸には、「関係者以外、立ち入ることを禁ず」と書かれていました。が、興奮するドーラの目には、全くそんな文字は見えず（というより読めなかったのですが）ちゃちなカギを力任せにぶち壊して中に入って行きました。

地下に降りた一番奥の、蝋燭の薄暗い明りに照らされたところに、一人の痩せこけたおじいさんが座っていました。よく見ると、少し寝不足ぎみだったのか、頭をテーブルにのせて居眠りをしているようです。

そんなことはおかまいなしのドーラは、せっかくいい気持ちで居眠りしているそのおじいさんの肩を、いきなり無神経に叩いて起こしました。

「やあ、あんたがここの番人のじいさんかい？　オレ様は

ドーラっていうもんだ。さっそくだが、オレ様をこの旅の扉から外へ出してくんねぇかなぁ。礼ははずむぜ」
　ドーラはずいぶんと馴れ馴れしく声を掛けました。
「ふわっ、な、なんじゃお前は！　ワシにゃ、インドラっちゅう立派な名前があるわい。バカモノめが、表の字が読めんかったのか。ここは王室関係者以外、立ち入り禁止になっとるんじゃぞ。さっさと出ていかんかい！」
「なんだよなんだよ、そんな冷てぇこと言いなさんなよ。へへノ、こいつを使えば、この国の外へ行けるんだろ。オレ様一人ぐらい使ってみたって、そんなの黙ってりゃわかりゃしねぇって。なぁいいじゃねぇか、少しぐらいよぉ。オレ様が魔王を倒した折にゃ、あんたにもたんまり礼をすっからよ」
「ふん、わしゃ礼なんぞいらんわい。いいから早く出ていかんかいっ！」
「なぁ頼むよ〜、一度だけでいいんだからよ〜」
　ドーラはしきりに頼み込んだのですが、インドラじいさんは全く取り合ってくれません。気が短いドーラですが、このときばかりは発狂せずに、珍しく素直に引き下がりました。でも、そのかわりに毎日毎日、ここへわざわざ弁当持参で現れては、例の調子で一日中インドラじいさんをつけまわし、旅の扉を使わせろと言い張りました。
　十日くらいたった頃でしょうか。相変わらず毎日やって来るドーラのしつこさに、さすがのインドラじいさんも旅の扉のことを少し説明してやることにしました。
「ま〜ったく、何なんじゃお前はデカい図体してからに、うっとおしい。こう毎日こられると、ワシャ気が狂う。そんなにコレのことが知りたいのなら教えてやるわい。この旅の扉はな、ず〜っと大昔にな、アリアハンが世界中を治めていた頃に、そりゃぁ偉い魔法使いが封印したというわけじゃ。じゃからして、何人たりとも、この封印を解くことは出来ん。選ばれた真の勇者が現れるまではな。お前さんがいくらコレを使いたくても、この封印の壁が解けん限り、中へは入れんぞ。わかったな、諦めてまたきこりの仕事にでも精を出すんじゃな」
　しかし、封印してあるからといっても、ドーラが諦めるはずがありませんでした。いくら封印だろうが、壁は壁。壊す方法が必ずあると思ったのです。
　ドーラは、今日もひとり、町の酒場でヤケになって呑ん

でいました。でも、ここはルイーダの店ではないようです。
しかし、ここでまたもや、ドーラは耳寄りな話を仕入れたようです。なんと、『魔法の玉』というものがあれば、封印を解くことができるというのです。ドーラは、また人の迷惑をかえりみずしつこく聞きまくり、その玉を造れる老人の居場所をも突き止めました。が……。
しかし、その老人が王室の許可がない人間に造り方をそうやすやすと教えるはずがありません。
「クソ～、なんでこの国の年寄りどもは、どいつもこいつもケチでやがるンだ。ふんっ、もういいっ。こうなったら『魔法の玉』なんぞ、オレ様が自分でこしらえてやらぁ」
本気でヤケを起こしてきたドーラは、自分自身で『魔法の玉』を造る決心をしました。
「てやんでぇ、オレ様は何が何でも、このアリアハンの外へ出てみせるぞ。見てろよぉ、クソジジィどもめ」
それからというもの、字もロクに読めないのに、今度は毎日古文書を読みあさっています。でも、少しづつ調べていくうちにドーラはついに『魔法の玉』の正体を知ったのです。ただ、そこにすべてが記されているはずはないのですけどね。

「わ～おっ、これだこれだ。ぬぁ～んだ、何が『魔法の玉』でぇ。もったいぶった名前なんかつけやがって。こんなのタダの火薬玉じゃねぇかよ。こんなもの、オレ様でも簡単に造れるってもんじゃねぇのかい。ヘヘ～ンだ」
　翌日から、さっそく火薬玉造りに専念したドーラが最初に造りあげたものは、人間の赤ん坊の頭くらいの大きさの、ちょっといびつな真っ黒い玉でした。

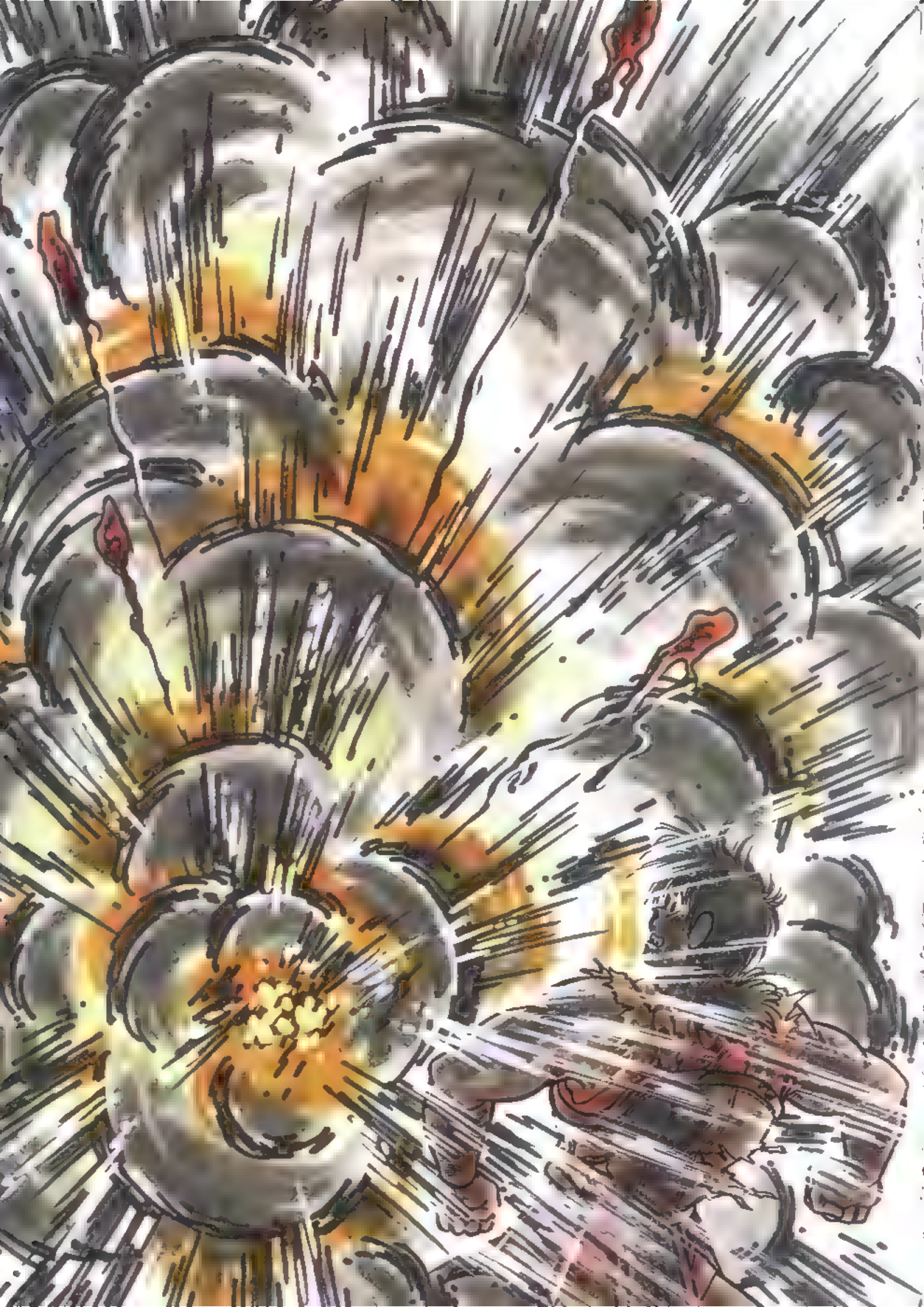
　自作の火薬玉を持ったドーラは、修理したばかりのカギをブチ壊して、再びほこらにやって来ました。
「ヘッヘッヘ～。今日は、じいさんにオモしれぇもんを見してやるよ」
「なんと、何を持ってきたんじゃ？」
　インドラじいさんは、怪訝そうに尋ねました。しかし、ドーラは聞く間もなく持ってきた火薬玉を壁の前の地面に置くと、火打石を勢いよく弾かせて、導火線に火をつけました。
「おっ、おっ、火がついたぜ。ホレ、じいさん危ねぇから早く逃げな」
「な、な、何をするんじゃ、あわわわわ」
　シュルシュルシュル　導火線がだんだんと燃えていきます。ろくに逃げる間もなく、あわや大爆発か……！
　パーン！　これはちょっと情けない音……。玉は真っ二つに割れ、白い煙がボソッとたっただけ。これでは、お祭りの爆竹のほうが、まだ威力がありそうです。
「バ、バッカモ～ン！　ビックリさせよってからに。大の大人が、こんなとこで花火で遊ぶんじゃないっ！」
　せっかく一生懸命造った火薬玉でしたが、結果は見事に大失敗、インドラじいさんにバカにされて、ドーラはちょっと落ち込んでしまいました。……が、あのドーラがこんなことで諦めると思いますか？
「チクショ～、こんなことでメゲるもんかい、成功するまで何回だってやってやるゾ～」

　あっというまに気を取り直したドーラは、さっそく第二弾を造り始めました。今度の玉は、大きさが子供の頭ぐらいはありました。
「おや、また来たのか。おいおい、お前さんまさか本気で封印を壊すつもりじゃあ、あるまいなぁ……」
　インドラじいさんの困惑した様子なんてまるで無視して、

ドーラは自慢げに導火線に火をつけました。今度の導火線は、前のよりも少し長いようです。
シュルシュルシュルシュルシュル……バババ〜ン！
おっと、これは意外と大きな爆発です。しかし、封印の壁には傷ひとつついていません。どうやら今度も失敗のようです。
「クソ〜。なんで壊れねぇんだよ、テメーは。ケッ、そっちがそうなら、こっちにも考えがあんぞ。今に、見てろよ、絶対ブッ壊してやっからな！」

大きなスイカほどの大きさの火薬玉をこしらえてホコラに持ってきたときには、最初の火薬玉で失敗してからまるまる一か月が経っていました。
せっかく貯金をおろして買った武器や防具も、使わないうちにススだらけになってしまったようです。ただひたすら、あの壁を壊すのに夢中になっていますからね。
う〜ん、なんだか、バラモスを倒すという当初の目的は、どうもどこかにフッ飛んでしまった気がするのですが……。
しょっちゅう真っ黒な顔をして、デッカい黒玉を担いで、歩くドーラの姿を見ると、そろそろ町の人たちも不気味に思い始めたようです。
「ねぇねぇお母さん、あの人何で真っ黒な顔してるの？」
「シッ、ジロジロ見るんじゃありません」
ドーラが現れると、町の人たちはクモの子を散らすようにサッと逃げてしまいます。
今日のホコラのじいさんは、どこかの古道具屋で買ってきた鉄兜をかぶって、なんと安全対策に備えています。これは、きっとインドラじいさんも、ドーラが諦めるまでは付き合ってやるつもりなんですね。口ではやかましく言っていても、やはり心配なんでしょう。
しかし、またしても結果は失敗に終わり、ドーラはいつもより余計に落ち込んでしまいました。
「クク〜、また失敗か……。う〜ん」
「ドーラよ、もうわかったじゃろ。この封印は、何人たりとも解けんのじゃよ。ワシも心臓に悪いでな、もうそろそろ諦めんか」
ドーラは、ガックリと肩を落としてホコラを後にしました。せっかくの皮のよろいも、もうボロボロのズタズタになっています。しかし、あのドーラが、これで本当に諦めるのでしょうか……？

「よしっ、できたぞ～。これが最後だ。こいつでダメなら、仕方ねぇ諦めっか」
……やっぱり。ドーラは、集められる限りの硫黄、硝石、木炭、その他ありとあらゆる材料を使って、超巨大な火薬玉をこしらえました。力自慢のドーラでさえ、やっと担げるほど大きくて重い火薬玉です。持っているお金も使い果たしてしまいましたし、銅の剣や皮の盾は売り払って材料に化けてしまったようです。どうやら、これで本当に最後になりそうです。
「ハッ、ハヒ、ヒエ～ッ！　も、もうワシャどうなっても知らんぞ。さらばじゃ」
翌日ホコラに火薬玉を持っていったとき、それを見たインドラじいさんは、超巨大な玉を見るなり、ついに職場放棄して逃げていってしまいました。
「ヘン。ジャマ者がいなくなって、せいせいすらぁ。さぁて、玉ちゃんどうかひとつお願いしまっせ～！」
ドーラは、今までで一番大きな火薬玉の、一番長い導火線に火をつけました。
シュルシュルシュルシュルシュルシュルシュルシュル……

チュドドーン！！！
このとてつもなく大きな爆発音は、大地を揺らし、遠く山間の村々にまで響き渡りました。
しばらくして、逃げていたインドラじいさんが恐る恐る様子を伺いにいくと……、無傷の壁の前には、大火傷を負ったドーラがゴロンと倒れていました。髪の毛も、髭も、眉毛もぜ～んぶチリチリに焦げてなくなっています。
「おいっ、ドーラよ、しっかりせんか！　こんな、海坊主がビックリしたよ～な顔になっちまってからに……」
宿屋の二階に担ぎ込まれたドーラの意識が戻ったとき、枕許には二人の老人が立っていました。一人はホコラのインドラじいさん。そしてもう一人は、そう、『魔法の玉』が造れるという、あの老人です。苦しそうに、でも何だかビックリしたような顔をしてこちらを見ているドーラの顔を見て、二人はすまなそうに話し掛けました。身体が丈夫なドーラのことをよく知っているインドラじいさんは、必死で笑いをこらえているようでしたけどね。
「いや～、まさかお前さんがここまで頑張るとは思っとらんかったのぉ。プッ、じゃがお前さんの顔……、いやいや

失敬失敬。いやー、でも命が助かっただけでも幸いじゃてな。うんうん」

インドラじいさんは、すっかり親しみを込めて、ドーラに話しかけました。

「……ふーむ、どうせこうなるんじゃったら、最初から本当のことを教えてやっとけば良かったかのう……」

一方の『魔法の玉』の老人は、ちょっと深刻な顔をして話しかけました。

「実はな、ドーラよ。あの封印は、ただの石壁ではないんじゃ。お前も知っとると思うが、魔法を跳ね返すマホカンタの呪文があるじゃろ。あれと同じように、ありゃ一切の物理的な力を受け付けない、特殊な魔法が掛かっとるんじゃよ。じゃからして、どんなに大きな火薬玉で吹き飛ばそうとしたところで、しょせん無理なのじゃ。わしが黙っとったばかりに、お前さんにはすまないことをしたのう」

古くから伝えられている『魔法の玉』とは、その特殊な魔法を打ち消す成分が入っていなければならなかったのです。『魔法の玉』の造り方は、まず通常の火薬の原料に、一定量の無煙火薬の原料（真綿を硝酸か塩酸で焼いたもの）を混ぜ合わせ、赤ゴムの樹液と爆弾岩のエキスを加えて練りあげる。そして、黒褐色の粘土状になったら、目の細かい網で裏ごしして、丸く形を整え、固まるまでおよそ三か月。こんなに手の込んだモノなのでした。爆弾岩のエキスの採り方は、トップシークレットですが……。

時の流れは早いもので、もうアリアハンには北風が吹く季節になってしまいました。しかしドーラは、まだ宿屋の二階にいるようです。そこへ、町の噂話を聞いたオルテガの息子、つまり選ばれた真の勇者とその仲間たちが、魔王討伐の旅に出発する前に、噂の人ドーラのお見舞いにやって来ました。

勇者たちが、おもむろにドーラに話し掛けました。

「やあ、ドーラさん。いろいろと大変でしたね。でも安心してください。ボクたちが、ドーラさんの代りに、必ず魔王を倒してみせますよ」

「……」

「どうか、早く元気になってくださいね」

「……」

「そうさ、オレたちにまかしてくれよっ」

「……」

持ってきたきれいな花束(はなたば)を窓辺に飾(かざ)りつけると、勇者たちは静かに立ち去ろうとしました。そのときです、終始無言で全身包帯でグルグル巻きになって横たわっていたドーラが、突然口を開いたのは……。

「おい、あんたら、あの封印の壁を見たか？」

「……いえ、これから行くところなので、まだ何も……」

「ホ～、そうか。あそこに行ったら、右下の地面からコブシ二つ分のところを、よく見てくれよ。小さなキズの横に、オレ様のサインが書いてあっからよ。なんせ、何人たりとも壊せないっちゅうあの壁にキズをつけたのは、このオレ様くらいしかいねぇだろうからよ。へへッ、これでオレ様も有名人ってものさ、ハハハハッ」

「……はぁ、アハハ、そ、そうですね……。では、まぁそういうことで」

彼らが宿の外に出てから、顔を見合わせ、よくよく考えて大笑いしたのは言うまでもありません。

アリアハンは、まだ平和のようですね。チャンチャン。

モンスター、装備への道

みんな!!聞いたか!?つ、ついに勇者たちが近くまで来たらしい!!
オレたちも装備して対抗するんだ!!
えっ勇者が!!でもボクたちお金ないっ!!

よし!!
じゃあ、ボクとホイミスライムでみんなの薬草を売ってくるよ!!
え?ボクも行くの…?

たのんだぞ、笑い袋!!そしてホイミ・スライム…
まかしとけ!!ぬいぐるみ着て行ってくるぜ。
やっぱり行くの?ねえ…

こうして笑い袋とホイミスライムはみんなの薬草を手に朝早く町へたった…
たのんだぞーっ、笑い袋、ホイミスライム!!
おーっ

どうぐ
町へついた笑い袋とホイミスライム…。
いいか?行くぞ!!ホイミスライム!!
動きにくいなァ…

いらっしゃいませ、ここは道具屋です
え?薬草ですか?
1コ8Gよ、おいくつ?
やくそう

え!?そんなにいっぱいですか!?
じゃあ…10コで80Gになりますね。

そして…
えっ!?売りに行ったのに買って来ちゃったの!?
ごめんよーっ。
お金なくなっちゃった。

ARMOR OF KING

光の鎧

（伝承の地　樫の里）

ARMOR OF KING

アレフガルド暦　二三四八年……

帝都ラダトームはかつてなかった混乱の渦中にあった。突如出現した異界の怪物、竜王配下の魔物の大軍団が攻め寄せてきたのである。

家々の木戸は堅く閉ざされ、罵声と悲鳴がそこかしこから聞こえていた。

数カ月前。陸海、数万の軍勢からなる第一次討伐軍は竜王の魔力の前に全滅していた。そして今、体勢を整えた竜王軍は、一気に決着をつけんと王都に総攻撃をかけたのである。

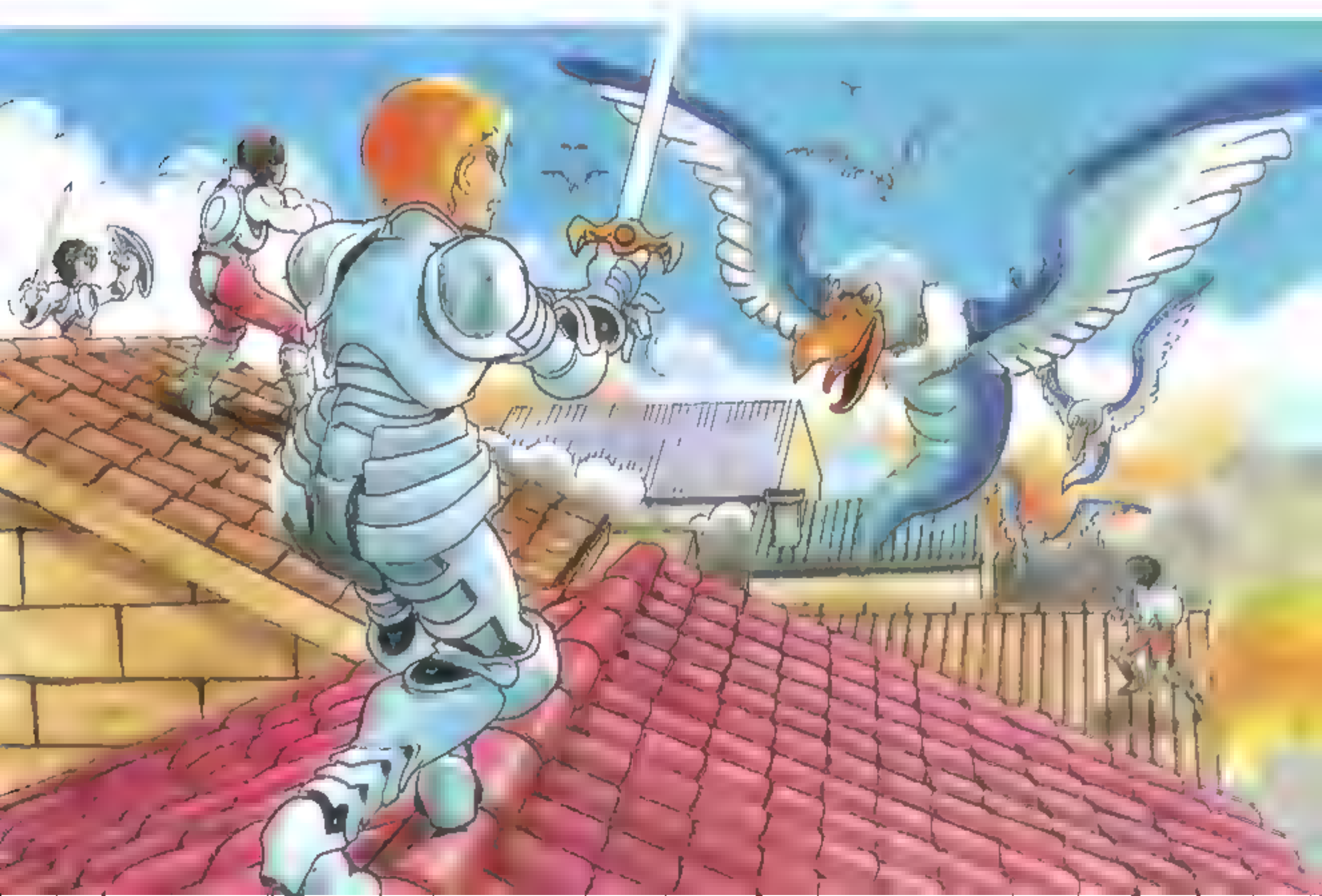
二日前、第一派の攻撃を辛うじて退けたものの、ラダトーム側の劣勢は誰の目にも明らかだった。

「上だ、奴ら今度は空からきやがったゾ！」

槍を手にした兵士が叫んだ。百を越える数のキメラが、市内の中心部を目がけて奇襲をかけてきたのだ。

「副隊長、オルノフの店に火を放たれたようです！」

「まずいな、油樽の蔵は大丈夫なのか？」

街一番の道具屋であるオルノフの店の裏手には十数棟の蔵が立ち並び、そのいくつかには大量の油が貯蔵されていた。キメラ集団の目的はその蔵に火を放ち、市内の中心部

を焼き払うことだったのだ。

「弓隊は各自キメラを攻撃！　グリードは二個小隊を連れて消火に当たれ、ラオスは残った連中を指揮して油樽を城の蔵に移せ！」

副隊長と呼ばれた若い戦士はてきぱきと命令をくだすと、先頭に立ってオルノフの店に向かった。

彼の名はグレイ。半年前までは一匹狼の放浪戦士だった男である。竜王出現の報に、ラダトームにはアレフガルド全土から義勇兵が殺到した。農夫は鋤を捨て、木こりは斧を捨て兵士として魔物と戦う道を選んだのだ。

そして今や第一次討伐軍の敗退で、精鋭のほとんどを失ったアレフガルド軍の大半が、こうした志願兵から成り立っていたのである。当初、歩兵小隊の小隊長という身分で軍籍についたグレイは、その剣の腕と剛胆にして無駄のない戦いぶりからたちまち頭角を現し、一月前に兵五百人からなる大隊の副隊長に任官していた。

「なんとしても延焼を食い止めろ！　火の手が広がる前に消し止めるんだ！」

グレイたちの一団が火元であるオルノフの店に到着したとき、既に数棟の蔵が炎に包まれていた。

赤々と燃え狂う炎の前で、数十人の兵士が呆然と立ち尽くしているその時だった。

「フハハハハッ　見たか、我ら魔族の力を！」

不気味な哄笑を響かせ、金色の法衣をまとった魔物が出現した。竜王の側近にして六魔将と言われる幹部集団の軍師格、大魔道カトゥサである。

カトゥサはまるで重さがないかのように空中に浮かび、兵士の一群をにらみつけている。

「き、貴様はカトゥサ？」

魔道師の顔を見たグレイの表情がとたんに険しくなった。

以前、竜王から新たな魔物を創造せよとの勅命を受けたカトゥサは、魔界から精霊族のフレイムとブリザードを召還し、その力によって、身につけた者を魔物に変える鎧、ブラックメイルを造り出した。

そしてドムドーラの近衛兵だったグレイの実弟、アンガスはカトゥサの計略によって魔物、鎧の騎士に変身してしまったのだ。

仲間の兵士たちはおろか婚約者にまで襲いかかった弟を、グレイはやむなく斬り捨てた。戦士グレイは竜王とカトゥサに対する火のような憎しみを胸に、魔物と戦いつづけて

いたのだった。
「間もなくこのラダトームを、いやアレフガルドの街という街を破壊し尽くす魔物が到着する。それまで貴様らはドラゴンとでも遊んでおれ!」
カトゥサはそう言うなり手にした杖を振り上げた。
燃え盛る蔵から上がる黒煙を、杖の先端から放たれた電光が切り裂き、グレイたちの目の前に濃緑色の鱗に全身を覆われた十数匹のドラゴンが出現した。そして同時にカトゥサの身体は出現した時と同じように消え失せていた。
「おのれカトゥサ!」
叫ぶグレイをめがけて先頭のドラゴンが襲いかかる。グレイは吐き出された炎が身体を捉えるより一瞬早く、グレイは石畳を蹴って跳躍した。空中で抜きはなった剣を逆手に持ち、着地と同時に先頭の一匹を斬り倒す。
「グレイ殿!」
小隊長のラオスやグリードを初めとする兵士たちが、後方のドラゴンに攻めかかった時、グレイは既に四匹目のドラゴンを血祭りにあげていた。
「残りの一匹俺がもらった!」
部隊で一番若い小隊長のラオスが、血気にはやって最後に残った手負いのドラゴンに斬りかかる。
が、それよりわずか早くグレイは苦し紛れに炎を吐き散らす怪物の首を斬り落としていた。ドラゴンが全滅すると同時にわずかに残ったキメラたちも、空の彼方に姿を消していく。
「チェッ、いつも副隊長にいいとこさらわれちまうもんナ」
グレイは部下のそんな軽口に取り合わず、剣を納めると黙って火事場に向き直った。付近の家々からは魔物が去ったのを知った男たちが詰めかけ、兵士たちを手伝って懸命に消火作業に当たっている。

ロトの鎧

市内で起こったこの小戦闘の一部始終を、じっと見守っている数人の男たちがいた。場所はラダトーム城の奥、今は作戦会議室となった観のある謁見の間である。
「やはりあの男しかいないようでございますナ……」
白い髭を蓄えた長身痩躯の老賢者デビアスは、手にした水晶球に映ったグレイの顔を見てつぶやいた。かつてはこの水晶球を通して、アレフガルド国内ならいたる所を見

ることができたのだが、竜王の悪しき力に覆われてから、市内の様子を見るのがやっとの状態になっていた。

「しかしデビアス殿、いかに腕が立とうともあのような新参者……」

大臣の一人が賢者の言葉に異を唱え、残った男たちも同様の意見らしく首を振っている。そして彼らの中央、どっしりとした玉座に腰を降ろした国王ラルス八世は、じっと目を閉じ沈黙していた。

その日の夕刻。城内の自室に戻っていたグレイは、国王じきじきの呼び出しを受けて謁見の間へと急いだ。

「第四大隊副隊長グレイ、お召しにより参上いたしました」

謁見の間には衛士の姿さえ見あたらず、国王の側には老賢者デビアス一人がつき従っている。そして玉座のかたわらには一抱えもある鉄製の箱が置かれていた。ラルス王家の紋章が刻まれた蓋には、高位の魔道師にしか施せない厳重な封印の証である聖なる文様が描かれている。

「そちの活躍、将軍たちからいろいろと聞いておる」

ラルス八世はそう言うと、すっと玉座から腰を上げ戦士の前に立った。グレイは国王の意を、自分が何のために呼び出されたのかを測りかねていた。

「知っての通り戦況は日に日に悪化しておる。ここラダトームばかりでない、リムルダールや不可侵都市といわれたメルキドも同様の状態じゃ、だが案ずるな。わしはまだ諦めてはおらん。確かに緒戦の敗戦で我が軍は精鋭の多くを失った。しかし先日の戦いでは攻め寄せた竜王軍の方がはるかに多くの犠牲をだしておる」

そこまで言うと、ラルス八世は不安そうに自分を見ているグレイに微笑んだ。そして今度は、賢者デビアスが話し始めた。

「陛下の申される通りじゃ。それに近々近隣の国々からの援軍も到着する手はず、始祖、ラルス一世が精霊神ルビス様の導きで築かれたこのアレフガルド。そう簡単に魔物どもの勝手にはさせんわい」

そして老賢者と国王は、いまだ自分がここに呼び出された理由を知らずにいる戦士に、鉄の箱を開けるよう命じた。

「封印は先ほどわしが解き放った。今やその文様はただの飾りじゃ。安心して蓋を開けるがよい」

「こ、これは……」

デビアスの言葉に促され、箱の蓋を開いたグレイは言葉

に詰まった。中には燦然と輝く一組の鎧が入っていたのだ。
国王に命じられグレイは箱の中から鎧を取り出した。
深い濃青色の表面はまるで宝石のような光沢を帯び、肩当ての部分には美しい翼の飾りが施してある。そして胸の部分の中央には、黄金色の紋章が刻まれていた。
不死鳥が雄々しく飛翔している図柄、ロトの紋章である。
「見ての通りこれがロトの鎧じゃ」
ラルス八世は呆然と鎧を見つめているグレイに向かいゆっくりと、そして重々しい口調で話しはじめた。
「わしは第一次討伐軍が敗退すると同時に、今日のような状況を予想しておった……」
為政者たる者、常に最悪に備えて行動しなければならない。それがラルス王家の家訓であった。ラルス八世は第一次討伐軍の敗退と同時に、城内に秘蔵されている多くの国宝を秘密裡にほかの所へ移す計画を立てていたのである。
「書画、骨董。そして宝石の類いなぞはどうでもよい。問題は先祖から伝わる魔道書や、この鎧のようにロトに関わる品々じゃ。もしこれらの品が竜王の手に落ちるようなことになれば、計り知れぬ災いをもたらすことであろう」
国王はそう言うと鎧の肩に手をおいて、じっとグレイを

見つめた。
勇者ロトの伝説……それは王侯貴族はもとよりグレイのような戦士、いやどのような階層の者でさえアレフガルドの住人ならば絶対に知っている伝承であった。
今を去る千有余年の昔、魔界から降臨した大魔王ゾーマによって、誕生後間もないアレフガルドは闇に包まれたのだ。この地を創造した精霊神ルビスさえゾーマの手に捕らわれ、人々は絶望の中であえいでいたという。
その時異界から仲間とともにやってきた一人の勇者がルビスを助けだし、ゾーマを倒したのである。
勇者はアレフガルドに伝わる伝説の称号、ロトの名を与えられ、その覇業は今に伝えられている。
そしてロトの勇者が使った武具。剣と盾、そして兜と鎧はそれぞれロトの剣、ロトの盾としてラダトームを統べるラルス王家に伝えられてきたのだ。
「ほかの武具の剣と兜、そして盾は既に近衛の兵の中から選んだ強者に託して城から運び出した。残っているのはこの鎧だけなのだ。そなたをここへ呼んだのはこの鎧を城外へ運びだし、安全な場所に隠してもらうためなのだ」
国王の言葉にグレイは戸惑った。元よりこの戦が始まっ

てから死は覚悟している。だがなぜ自分のような新参者が？
いかに多くの勇士を失ったとはいえ、城内には勇敢で家柄もある戦士がまだいくらでも残っているではないか……。
と、そんなグレイの思いを察したかのように老賢者デビアスが話をつづけた。
「疑問に思うのは当然じゃ、確かに貴公は多くの手柄こそ立てたとはいえ、この城に仕えて日も浅い。そのことを問題にして、鎧を貴公に託すという考えに異を唱える者がいたのも事実じゃ。だがこの役目は普通の兵士、城勤めの戦士などより、貴公のような経歴の者にこそふさわしいのじゃ」
市内を一歩出ればそこは戦場である。竜王配下の魔物ばかりではなく、本来さして凶暴ではなかったはずの野生の生き物たちさえ、近頃では人間を襲うようになっているのだ。
秩序立った集団戦闘においては有能な兵士といえども、野戦となればかつてのグレイのような放浪戦士の方が、絶対に上手のはずであった。
「分かりました。その役目喜んで務めさせていただきます」
グレイは二人に向かって答えた。
「それで、この鎧をどこまで。どの街まで運べばよろしいのですか？」
戦士の問いに国王と賢者は顔を見合わせて沈黙した。
「実はそれはわれらにも分からんのだ……」
沈痛な表情で口を開いた国王は王家に伝わるロト伝承、そしてそれにつづくルビスの予言について語り始めた。
大魔王ゾーマが滅んで後、精霊神ルビスはたった一度だけ、時の国王、ラルス一世の前に姿を現したという。
そしてその時、ルビスは恐るべき予言を残したのだ。
――いつの日か、この地に再び魔界の悪が降りてくるでしょう。その魔界の侵入者を倒すのは勇者ロトの血を引く者。それも王の年、王の月、王の日に生まれた男子でなければならないのです。その魔王、新たな侵略者の力はゾーマよりはるかに強大で、この城も、あなた方ラダトームの人々も無事ではすまないかも知れません。
万一、この城内にまで危険が迫るようなことになれば、ロトの使った武具を選りすぐった強者の手に託して、早々に街の外に運び出しなさい。後は天運が、勇者ロトの魂が武具を継承者の手に渡してくれることでしょう――

「精霊神ルビスはそれだけ告げると、ラルス一世の前から姿を消されたそうだ」

国王は遠い昔、幼い日に父から聞かされた時のことを思い出しながら語った。

「つまり我らにもその鎧をどこへ運び、どんな場所に隠せば良いのかわからんのじゃ」

そして老賢者は、ロトの鎧には身につけた者が真の勇士であるなら、必ずその命を守る不思議な力があると話した。

「強いて言えば鎧の行き先は鎧だけが知っているということかの。すべては神々のお導き。貴公の心の赴くままに行くがよい。光は常に正しい者とともにあるのじゃからナ」

こうして戦士グレイはロトの鎧を身につけるとその夜のうちにラダトームの城を出た。

見送る者とてない寂しい旅立ちであった。

逃避行

バシューッ！　闇の中で一条の閃光と化した剣がきらめく、金色の体毛と血しぶきを巻き散らし、キラーリカントの巨体が地面に倒れた。

「これで十匹、あとまだ半分は残ってるって勘定……」

剣を構え直しながら、グレイは闇の中から近づいてくる魔物の気配に神経を集中させた。

野営したところをキラーリカントの群れに襲われてからかなり時間が経ち、既に東の峰には微かに夜明けの兆しが見え始めていた。最初、グレイは戦いを避け何とか魔物たちを捲くつもりだった。だがリカントの群れは予想のほか執拗で、襲われた場所から相当離れたこの場所まできても、一向に諦める様子がなかったのだ。

背後と左右から三匹の魔物が一斉に飛びかかり、グレイは身体を反転させて攻撃をかわした。右からきたリカントの首をすれ違いざまに斬り落とし、そのまま返す刀で正面の敵の喉を突く。左から襲った魔物はグレイの素早い動きに目標を失い、背後にいた数匹の仲間の間に飛び込んでいた。

ラダトームの城から離れてから一月が経過していた。魔物の群れは山野に満ち溢れ、グレイはこれまでにも何度か窮地を脱していた。時に戦い、時には相手をやり過ごし、戦士はロトの鎧と己の命を守るため、厳しい試練の旅をつづけてきたのだった。

その間、満を辞して押し寄せた竜王軍はラダトーム守備隊、必死の防戦と間一髪でこの戦いに参戦した友邦ベラヌールの援軍によって、撤退を余儀なくされた。

この戦いで竜王旗下の六魔将のうち、怪力を誇るギガンテスが戦死し、ほかの部隊もかなりの被害を受けていた。

また同時期にアレフガルド、南の要衝である城塞都市メルキドの攻防戦において、悪魔、死神の両騎士は敗退をつづけ、援軍として送り込まれた大魔道カトゥサも、敗戦の責任から竜王自らの手により粛正されていた。さらにアレフガルド防衛軍側にとって有利に働いたのは、本来ラダトーム攻撃用に用意されていた魔物、ストーンマンの一群が全滅した点であった。

だがこの場のグレイがそのような出来事を知るはずもなかった。戦士は宿敵カトゥサの死すら知らず、目前に迫ったキラーリカントの群れと戦いつづけていたのである。

すさまじい悲鳴を上げ最後のリカントが倒れた。

グレイは周囲に散らばった魔物の死骸を見回すと、ガックリと膝をついた。疲労は極限に達し、立っていることさえやっとだった。かなりの高さまで昇った太陽が、点在する魔物の屍を照らしていた。

「ともかくどこか休むところを捜さなくてはな……」

グレイは自分に言いきかせるように呟くと、手にした剣

を支えに立ち上がった。これだけの数の魔物が死に、大量の血が流されたのである。死臭が新手の敵を呼び寄せないうちに、何としてもこの場を離れる必要があった。

時果つる国の夢

その洞窟を発見した時、陽は既に西に傾きかけていた。入口はグレイがやっとくぐれる位の大きさだが内部は意外と広く、奥行きもかなりありそうだった。

「ともかくこの入り口の幅なら、大型の魔物が入ってくることだけはなさそうだナ」

安堵のため息を漏らすと、グレイは入り口から死角になった壁際に横になった。身体全体を押し包んだ疲労は、戦士を瞬く間に深い眠りへと、誘っていった。

——ここは……ここは一体どこなんだ？——

夢を視ているのは分かっていた。音はまったく聞こえず、声を出すこともできないのだ。それでいて全身を形容し難い感覚が包んでいる。強いて言うなら酒に酔ったような、どこか定まらず、それでいて決して不快ではない不可思議な感覚。ただ、何かしら大気の流れのようなものが感じられた。

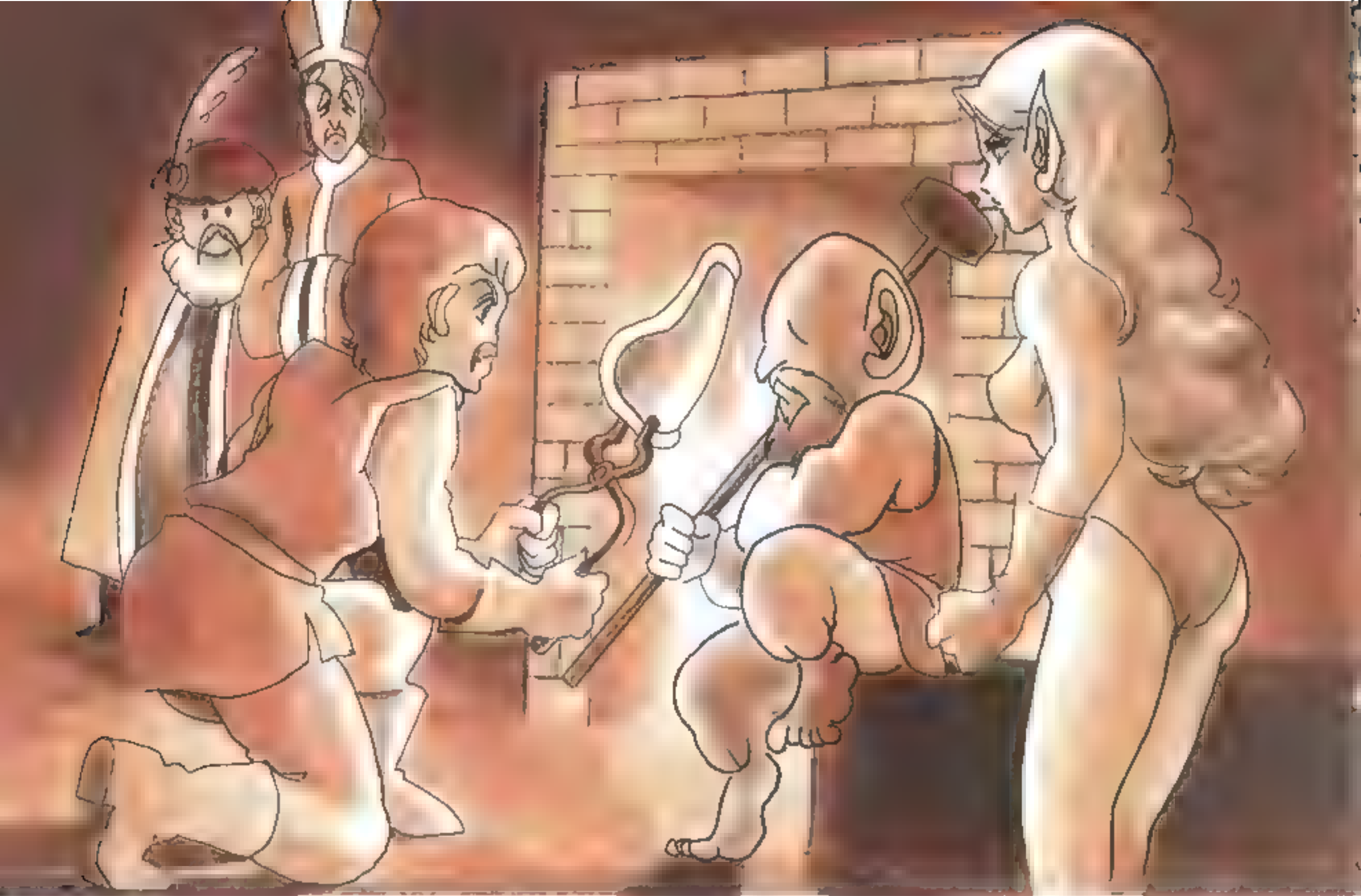
——飛んでいるのか？——

グレイは子供の頃よく視た夢を思い出していた。その夢の中でグレイは一羽の大きな鳥だった。連なる山々や蛇行する河川を眼下に見おろし、鳥になったグレイはどこまでも飛んで行くのだ。そしてそういった夢の結末はいつも同じだった。突然翼が力を失い、地面に向かって真っ逆さまに落下するのだ。恐怖に震え、汗びっしょりになって目覚めた夜のことをグレイははっきりと思いだしていた。だが、今感じているのはそんな夢とも異なった感覚だった。

と、一瞬目の前が明るくなった。どことも知れぬ光景が広がり、今までとは異なった感覚が全身を捉える。

目の前に展開されている光景はどこかの作業場……どうやら鍛冶屋か武器職人の仕事場のようだった。

だが奇妙なのはそこで働いてる者たちだった。真剣な顔で炉の様子を見ているのは頑固そうな中年の男。この男だけは、こんな場所にいて当然といえる職人風のいで立ちをしていた。そして少し離れた位置から、やはり真剣な表情でそれを見守ってるのは、高位の聖職者らしい老人と貴族らしい服装の男だった。どちらも作業場とはおよそ不釣合

いな人物である。
だが何よりグレイが驚いたのは残る二人を目にした時だった。
ハンマーにもたれるように腰を降ろしているのはホビットの男であり、またその横に立っているのは美しいエルフの少女だったのだ。
ホビットもそしてエルフも古い一族である。その起源はアレフガルドの創世神話よりさらに過去とさえ伝えられていた。
――なぜ彼らが人間と一緒に……？――
両者の種族とも、今では滅多に人前に姿を現しはしなかった。若い頃から全国を放浪してきたグレイでさえ、ずっと以前ホビットらしい人影を、山奥でみかけたことがあるだけだったのだ。
一心に炉に石炭をくべていた職人が振り返り口を開いた。
相変わらず音はまったく聞こえず、この光景がどこの国の、いつの時代のものかを判断することはできなかった。人物の衣装からだけでは、アレフガルド以外の土地であるとしか判断できなかったのだ。
職人は、どうやら炉の温度が作業をするのにふさわしいものになったと告げたらしく、控えていたホビットがハンマーを手に立ち上がった。同時にエルフの少女がかたわらに置かれた流白銀の鉱石らしい岩塊を職人に手渡す。
炉に入れられた鉱石が、灼熱の炎の中で真っ赤に熱せられると、職人はそれを大きな金床の上に乗せた。
ホビットが手にしたハンマーを鉱石めがけて振り下ろすと、鮮やかな白銀色の火花が散った。
すると……突然その光景が揺らめき薄らいだ。
グレイの目に再び作業場が映った時、既に最前の作業は終わった様子で、ホビットと職人は新たな仕事を始めていた。
今度炉に入られたのは、グレイが見たこともない鉱石だった。全体は鮮やかな濃青色で、表面に点々と金色の斑紋がある。そして今度の鉱石はよほど融点が高いらしく、職人は狂ったように手元のフイゴを押しつづけていた。
革でできた蛇腹が世話しなく前後し、吹き込まれた空気に炉はいよいよ盛んに炎を上げている。
――青い鉱石……ハテ、どこかで聞いたような？――
グレイは必死で記憶をたどり、目の前で無音のうちに鍛えられていく鉱石の名を思いだそうとした。

そうしている間にも目の前の光景は、再び揺らめき薄れていった。そしてグレイがやっと鉱石の名前を思い出した時、まるでそれを待っていたかのようにまたも同じ場所が見え始めた。

——青鍛鋼（ブルーメタル）！　あの鉱石は青鍛鋼（ブルーメタル）なんだ——

作業場の床には今、グレイが身につけているものと寸分違わぬ鎧が置かれていた。人間の職人もホビットも自らの仕事に満足の表情を浮かべている。

——あれがロトの鎧とすれば、俺が今見ているのは——

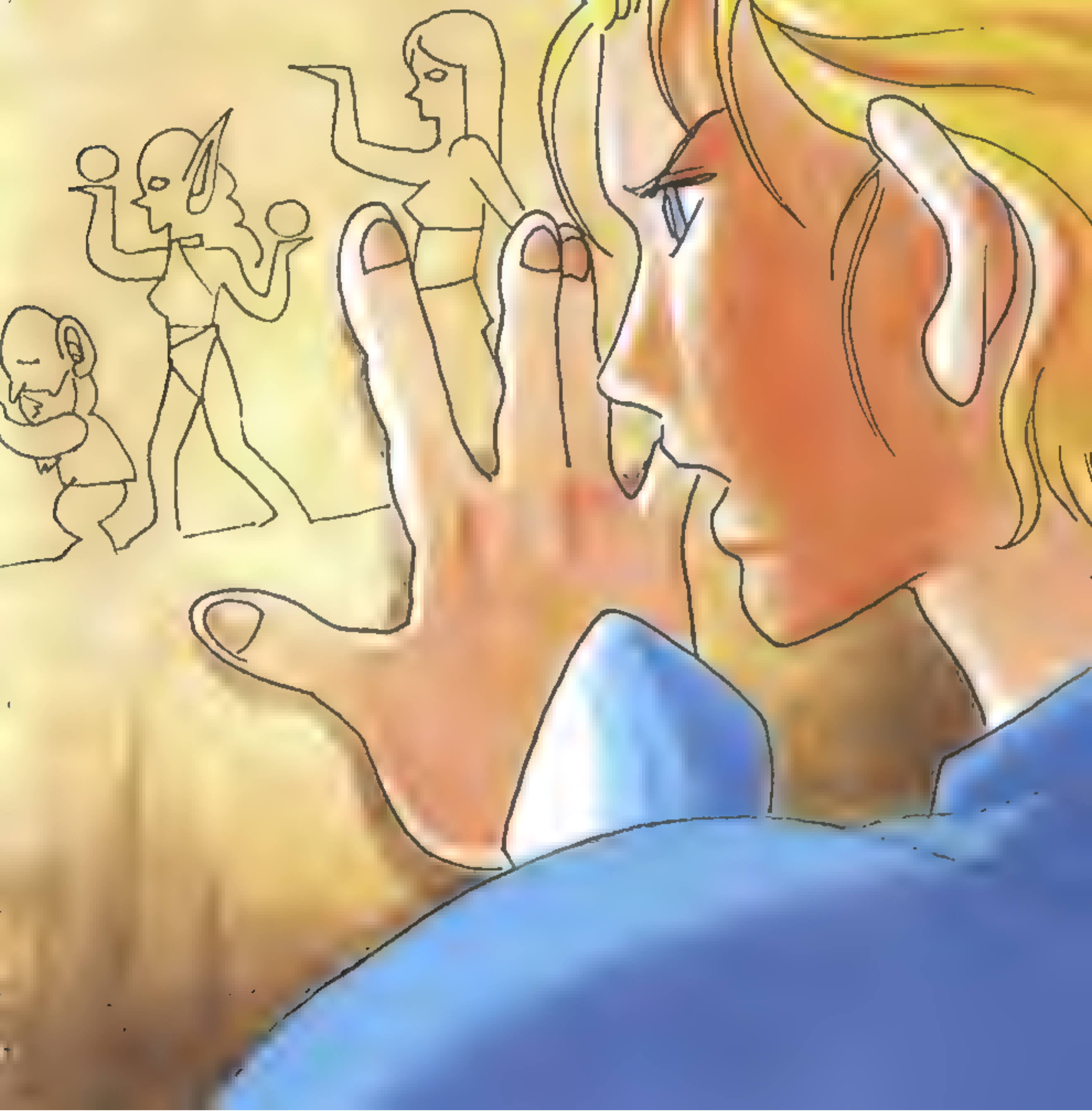
グレイがそう口にした瞬間、あたりは完全な闇に閉ざされた。作業場も鎧もホビットや職人たちも瞬時にして消え去り、夢の始まりと同様の感覚だけが戦士を包んでいた。

作業場の光景が見え始める前と同様の移動感に、グレイは自分がこの奇妙な夢から覚めつつあるのを知った。

だが夢はこれで終わりではなかった。薄（うす）らぎつつある闇の中に暖かな光が差したのである。

光はゆっくりと凝縮（ぎょうしゅく）し、やがて一人の女性の姿となった。

白く薄い羽毛のような衣装をまとったその女性は、グレイがかつて見たこともないほどの気品と美しさを兼（か）ね備え

ていた。
「グレイ……」
その女性は低く、それでいて透き通ったような声で話し始めた。
「遠路御苦労でした。そなたの試練は、宿命の旅は間もなく終わりを告げるでしょう。後はただ己の心の命じるままに進むのです。ロトの残せし鎧は、そなたの新しき故郷に、守るべき家族と暮らす家のそばに埋めなさい」
――それは、わたしの新しい故郷とはいったいどこなのです？　そして家族とは？――
グレイの問いにその女性は答えず。ただ優しく微笑んだだけだった。
「いずれすべてが分かるときがきます……。光は常に正しき者とともにあるのを忘れぬよう……」
そう言い残し、美しい女性の姿は闇に溶けるように薄ぎ消えていった。グレイの目の前には洞窟の岩肌が広がっていたのだ。
「今のは、今の夢はいったい……？」
起き上がったグレイは、たった今経験した出来事のあまりの不思議さに、しばし呆然として立ち尽くしていた。

ふと、我に帰ると疲労は嘘のように消えていた。全身に力がみなぎり、今まで魔物との戦いで受けた傷さえ完全にいえていたのだ。

気がつくと太陽は西の地平に没しかけていた。差し込む西日が洞窟の岩肌を茜色に染め上げ、そこに刻まれた何かの浮き彫りを照らしている。

そしてこのことは今の眠りが、あの不思議な夢を見ていたのがさして長い時間でなかった証拠といえた。もしまる一日以上眠っていたのでなければ、この洞窟に入ってまだ半時と経っていないはずであった。

「この浮き彫りは……」

グレイはここに入った時には暗くて気づかなかった、壁の浮き彫りに近づいた。

それは古代の楔形文字といくつかの情景からなる、一連の物語のようであった。

「この絵は、この浮き彫りは今見た夢と同じじゃないか！」

そこには人間とホビット、そしてエルフらしい少女が作業場で働き、一組の武具を造り出すまでの物語が描かれていたのだ。長い年月、風雨と気候の変化でかなりの部分が崩れ、詳細な部分までは判然としなかった。

だがそこに描かれた鎧が、今自分が身につけているロトの鎧であることをグレイは確信した。そして夢の最後に現れた女性が誰なのかを悟っていた。

ただ一つ夢の内容と違うのは十数編の情景のうち、最後の一枚が鍛冶屋の作業場ではないという点だった。

その浮き彫りは一人の男が巨木の根元にたたずんでいる場面だった。だが傷みがひどく男の格好や木の種類までは分からなかった。

「精霊神ルビスよ」

グレイは既に半ば以上沈みかけた太陽に向き直ると、このアレフガルドを創造したルビスの名を呼んだ。

「今までわたくしの身とこの鎧を守ってくださったことを感謝します。しかしこれからさき、わたくしはどこへ赴けば良いのですか？　新しい故郷とは、守るべき家族とは一体何のことなのですか？」

グレイの悲痛な声は夕暮れの風と共に消えていった。

樫の里　伝承の地

――魔物か？――

正面の草むらから伝わってくる気配にグレイは剣に手をかけた。夜明けを待ってあの洞窟を出てから半日あまり、運良く魔物とは出会わなかったものの、グレイは完全に道に迷っていた。キラーリカントの群れと出くわしたのがラダトーム南西の山であったことだけは確かなのだが、その後、進んで来た道と方角については皆目見当がつかなかったのだ。

　ガサッ、草むらが揺れ動き、殺気とともに何者かが飛び出した。

　反射的に剣を抜いたグレイは相手の顔を見て思わず立ちすくみ、一瞬後に大声を上げた。

「ノブル、なぜあなたがこんな場所に？」

　現れたのはドムドーラの兵士、以前、グレイの弟アンガスの上官であったノブルだった。

「グレイ、貴公はほんとうにグレイなのか？」

　ノブルもまた信じられぬ様子でグレイに近づき、まじまじと顔を見た。

　背後の草むらから出てきた数人の兵士の中には、グレイの知った顔も二、三混じっている。

　半年前、自らの手で魔物に変身した弟アンガスを倒したグレイは、ドムドーラの執政官フィドス子爵の近衛隊長であるノブルの制止を振り切って、ラダトームに向かったのである。

「ラダトームで仕官して大層出世したとは聞いていたがどうしてここに？」

　驚いたことにこの場所は、ドムドーラのちょうど真北にあたる連峰の一つだったのだ。ノブルは部下を連れて魔物の動きを偵察中だったのである。

　グレイはここに来るまでの経緯をかい摘んで話した。

「ともかく俺たちと一緒にドムドーラにこいヨ。鎧は部下を先にやって着替えを用意させるから取り替えればいい」

　ノブルはそう言うと、部下の一人に先に戻り着替えと鎧が入る箱を用意するよう命じた。

「言うまでもないだろうがロトの鎧のことは他言無用だぞ」

　隊長の言葉に若い兵士は敬礼すると走り去った。

「おまえがくると知ったらドグルの親父さんも、エリザも大喜びするぞゾ」

　ノブルがそう言うと残った兵士たちも一斉にうなずいた。

「しかし隊長、我がドムドーラは昨日、今日と客人がつづ

きますな」

兵士の中で一番年長らしい一人が嬉しそうに言う。

「昨日も誰か来たのか？」

久しぶりに顔なじみと再会した安堵感と、ノブルに対する気安さから、グレイはいつになく陽気に尋ねた。

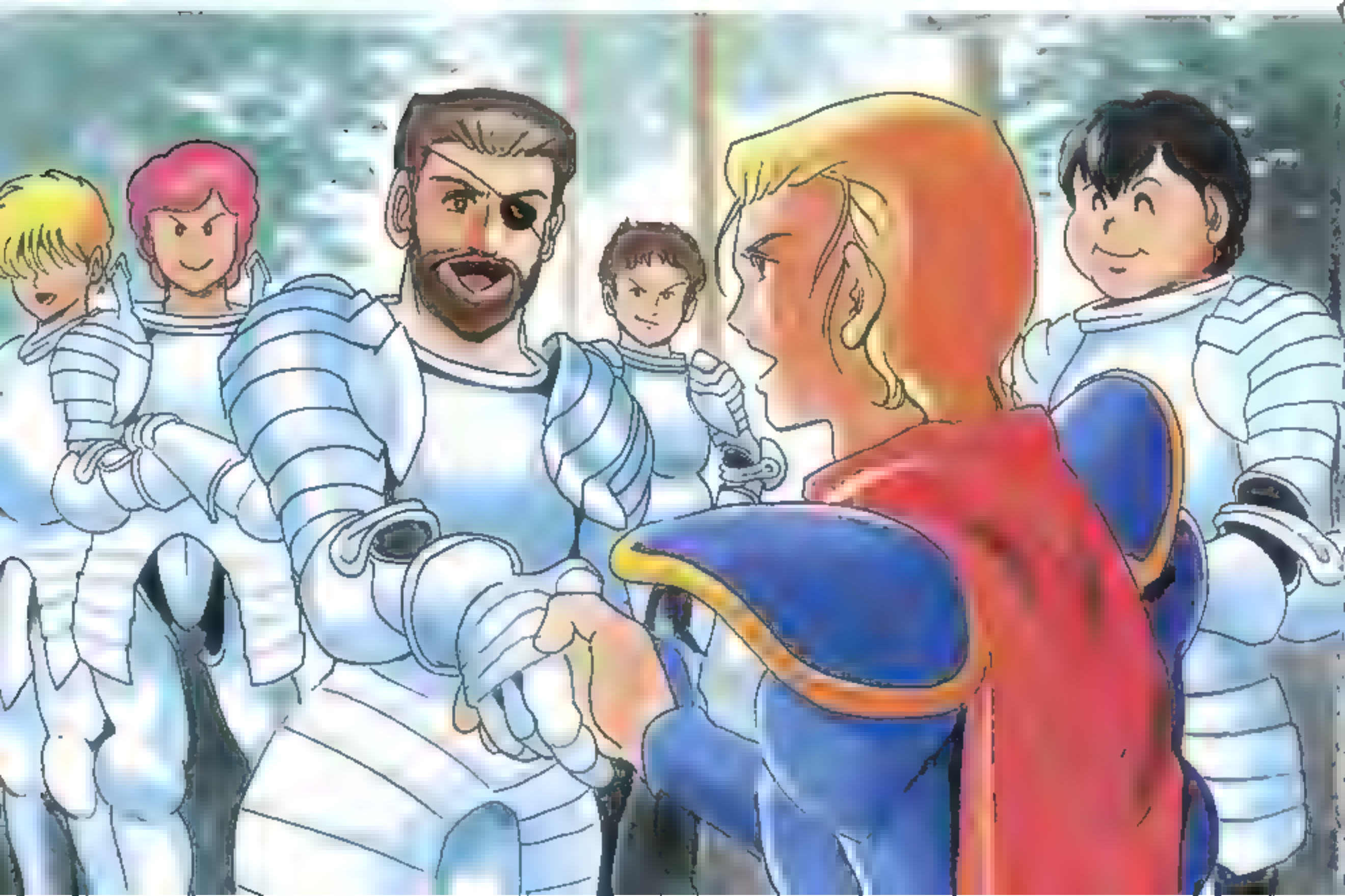
「ああ、変な二人連れでな、最初は夫婦者かと思ったんだがそうでもないらしい」

「アレっ？　隊長は知らなかったんですか男はメルキドの西にある何とかいう村のモンで、娘の方はやっぱり山奥の修道院の巫女さんとか……」

話好きらしい中年の兵士は、二人の出会いを面白そうに語り始めた。

どちらも魔物に襲われ、村と修道院を逃げだしさらに山奥で仲間たちとはぐれてしまったというのだ。

「男はまぁどこにでもいる普通の若者なんですが、娘っ子の方がちっとばかりかわってましてネ、メルキドにいこうって言う男を、強引にドムドーラの方へ引っ張ってきたそうなんですよ」

聞けば確かに二人が出会った森というのは、ドムドーラよりメルキドの方が近い場所であった。

「なんでも巫女さんの夢枕にルビス様が現れて、でっかい樫の木のある街に行けって言ったんだそうでヨ」

「精霊神ルビスが?!」

グレイは昨夜見た夢を思いだして叫んだ。

「そいでね。野郎の方がついうっかりでっかい樫の木ならドムドーラにあるっていっちまったらしいんでヨ。ホラ、覚えていませんか? ドグルさんの店の横にある樫の木」

やはりルビスに導かれたらしい二人の話を聞いたグレイは、いまはっきりと自分の運命を悟っていた。

浮き彫りの最後に描かれた絵の、そしてルビスの告げた新しい故郷と守るべき家族という言葉の意味を、彼は完全に理解していた。

「ほーら話していたら例の樫の木が見えてきましたぜ」

見ればいく手には懐かしいドムドーラの町並みと、あの巨木がグレイを迎えていた。

運命の地　ロトを継ぎし者たち

抱えもある巨大な水盤の面は、鏡のように澄み渡っていた。

そしてそこにはグレイを迎えて涙ぐむドグルとエリザの姿が映し出されていた。

「やっと二つの血が、離れていたロトの血が出会いましたナ。すべてはあなた様の思惑通り……」

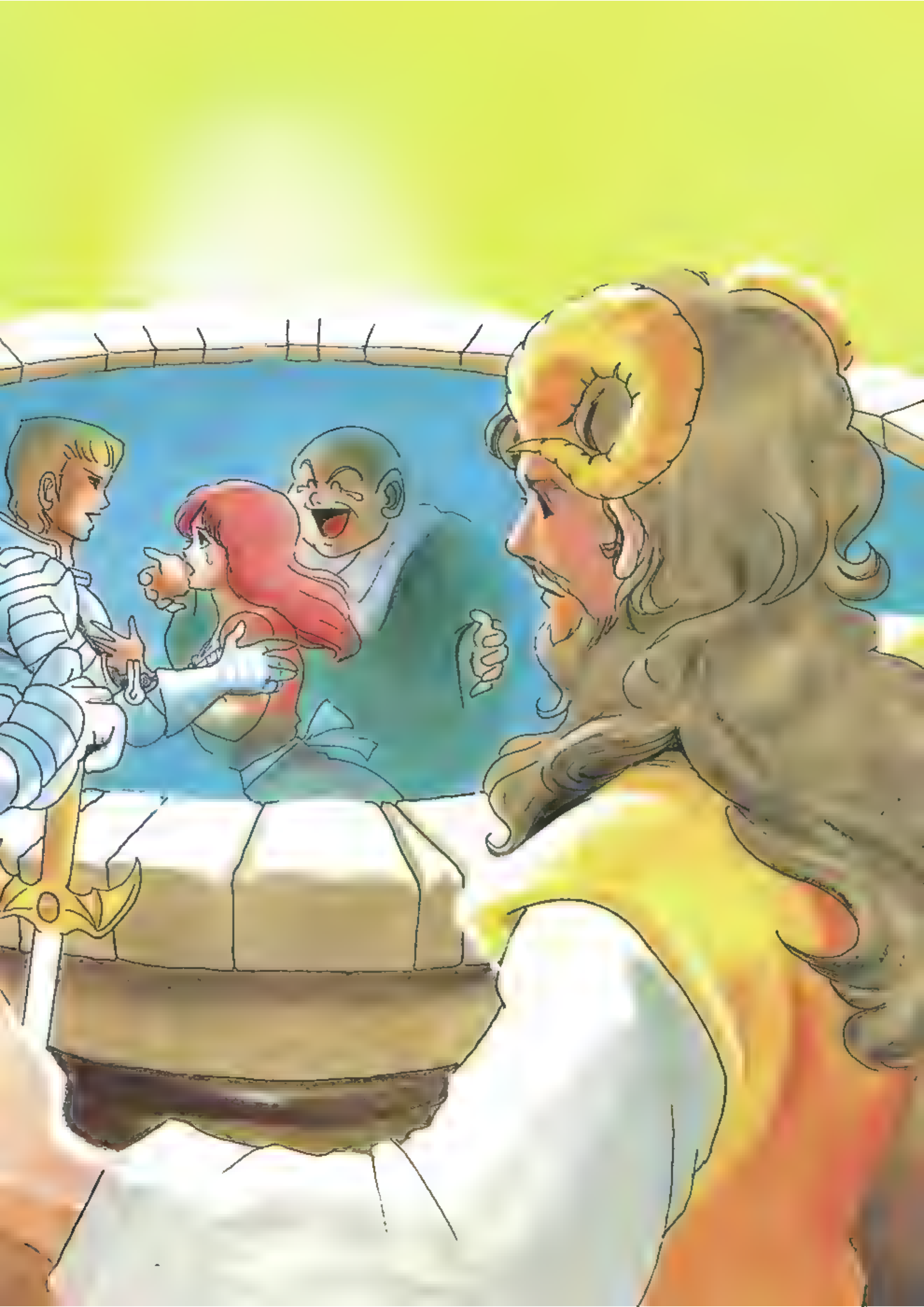
水盤のかたわらに立つ壮漢が振り返った。

「だが問題はこれからじゃ。選ばれし血筋。運命の二つ星が真に結ばれるまでには、まだ多少の時間がかかる」

壮漢、すべての戦士の長であるマルス神の後ろで、じっと水盤に映る光景に目をやっていた主神ミトラは、自分にいい聞かせるように低くつぶやいた。

長い間山奥の修道院でつづいた雨と、そうとは知らずにグレイが宿していた太陽の血筋は、いま出会いの時を迎えたのだ。

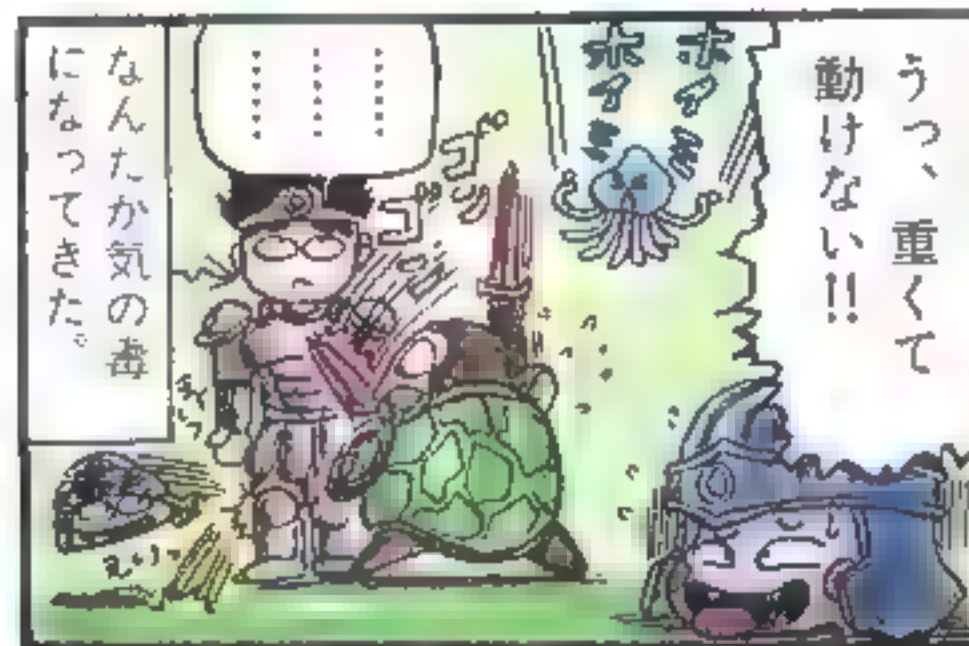
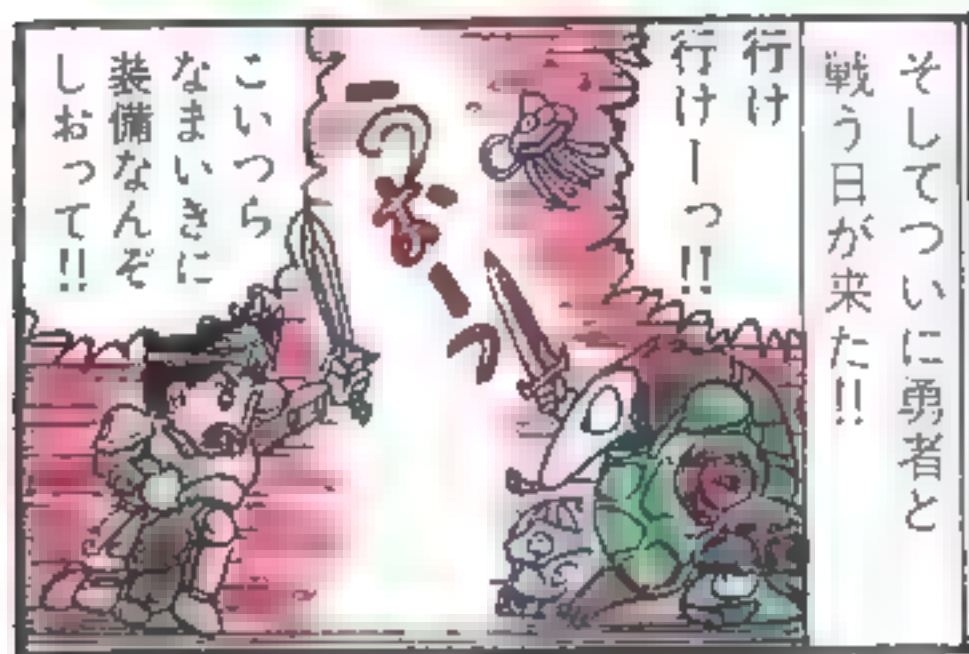
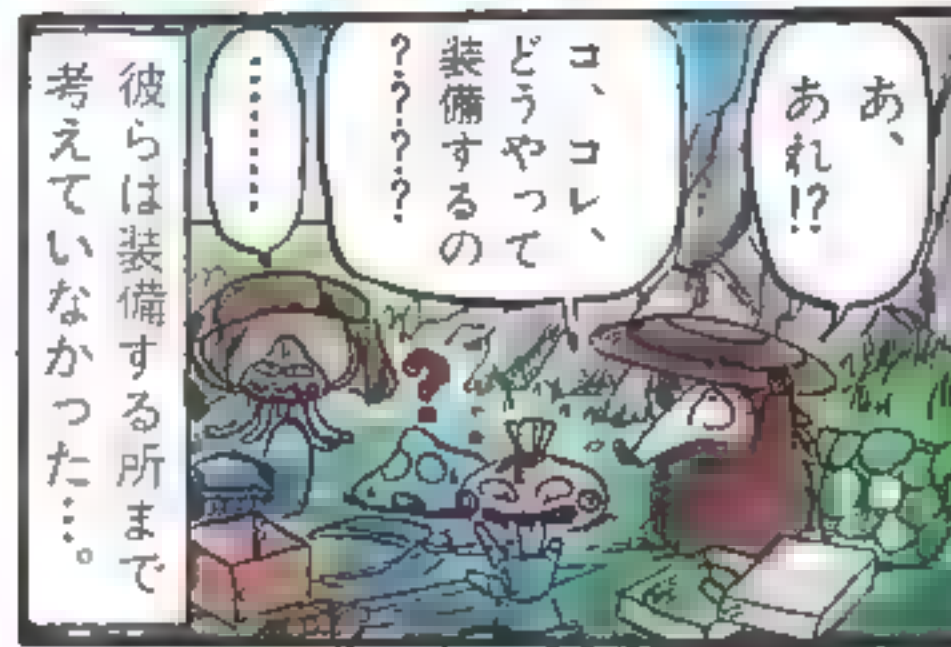
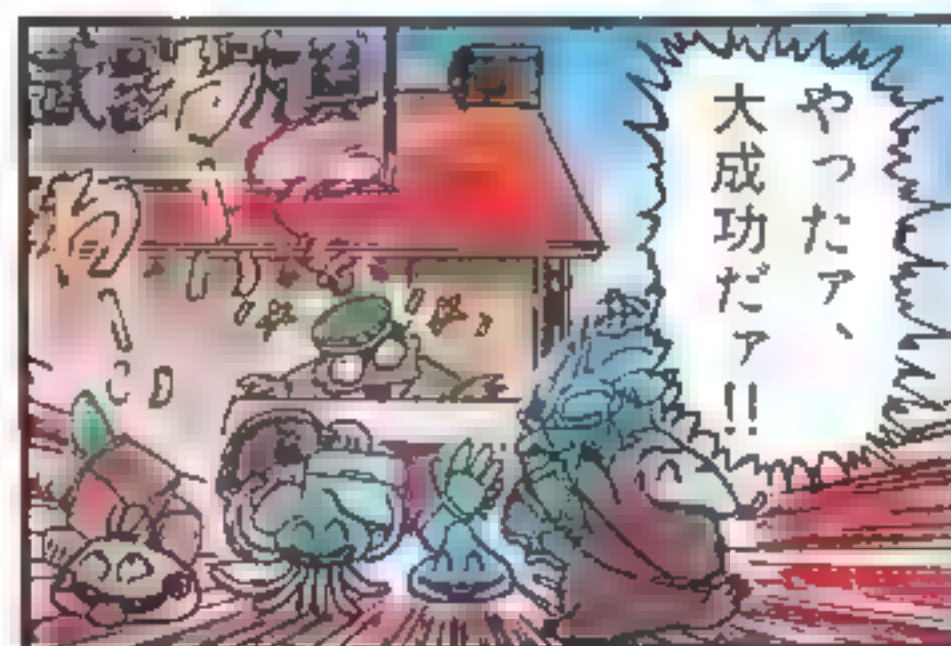
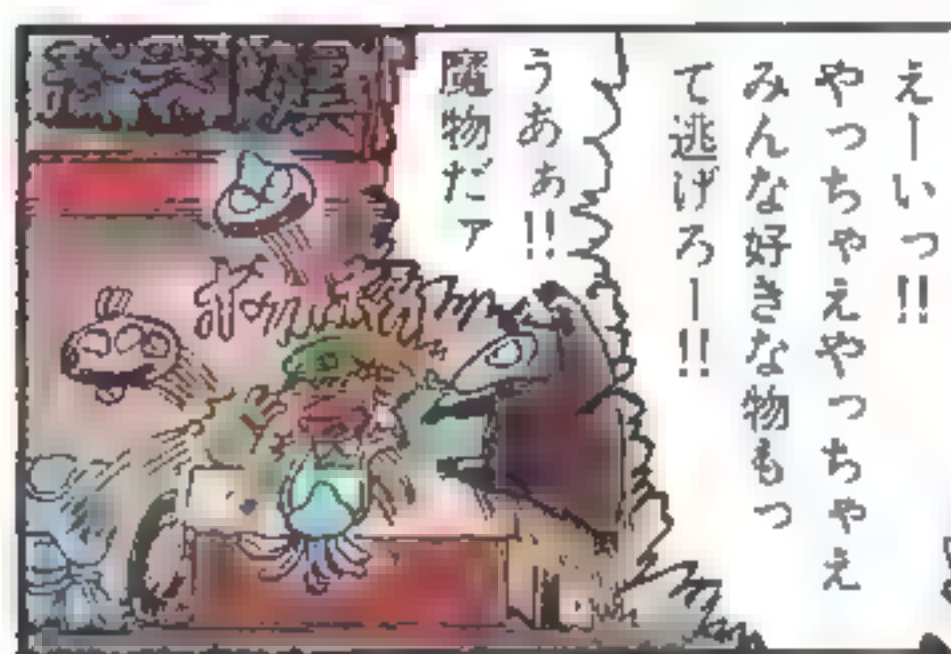
ミトラ神には分かっていた。数年先、心の傷がいえたグレイは剣を捨て武器屋となるが……。やがて彼がエリザと結ばれ、ドグルの家に古くから伝わる、ユキノフの名前を継ぐことが……。二人の間には、元気な男の子が生まれるだろう。

そして一方。数百年ぶりに世に出る雨の血筋、強大な魔力を秘めたロトの血筋の末裔たる巫女は、道中をもとにした青年と結ばれ愛らしい女の子を産むだろう。

主神ミトラが待望する勇者は、その二つの血が交わった時に初めて誕生するのだ。

「雨と太陽が合わさる時、虹の橋がかかる。その橋の向こうに平和と繁栄が待っているのだ。だが人間たちよ、虹の橋に到る道のりは険しいぞ」

ミトラ神はそう言うと水盤に手をかざした。ドグルの家の光景は跡形もなく消え失せ、水の面には天上界の晴れ渡った空だけが映っていた。

アレフガルド小劇場

モンスター、装備への道II

モンスター、装備への道III

アレフガルド教養講座

「草花と鉱物の産出地」

第１部／世界の役にたつ草花

第２部／アレフガルドの金属

【第1部】

世界の役に立つ草花

オイラの名はレグル。ムオルって小さな村で道具屋をやってるんだ。今日はオイラが世界中の役にたつ草の話をすることになっちまったんだ。

隣の地図にどこでどんな植物が栽培されてるかが載ってるから参考にしてよネ。

地図を見れば分かると思うけど、植物によって栽培されている場所が違うだろ？　薬草は平地の畑、満月草は森って具合いにネ。これは土地によってはなかなかうまく育たない作物もあるからなんだ。

ンートそいじゃまず、みんな一度はお世話になったと思う消え去り草からいくことにしようか。消えさり草の特産地として有名なのは、知っての通りランシールって島なんだ。ま、いってみりゃあの島の神殿にやって来る旅行者相手のおみやげ用の特産品ってわけサ。だから値段も結構高いだろ。後はいくつかの村で細々と栽培してるだけなんだ。

満月草はしびれをとる薬草の一種で、昔は気つけ薬につかわれたんだヨ。でもアレって一人旅の時はもってても意味ないから買うだけ無駄なんだ。だって魔物にシビレ攻撃を受けたら、仲間に治してもらわない限りアウトだもんネ。

毒消し草も今は品種改良でどんな魔物の毒にも効くようになったけど、昔は何十種類もあったんだゼ。バブルスライムにはこの草、人喰い蛾にはこの草って具合いにネ。まったく便利な世の中になったもんサ。

最後は一番ポピュラーな薬草。実はアレってどこででも栽培できる植物の葉からできているんだ。特殊な薬品に浸して乾燥させた後、ホイミの魔法が使える人間か呪文をかけて作るんダ。葉の繊維の中に染み込んだ薬品にホイミの呪文が反応して使ったときに体力が回復するってわけサ。

エッ？　その薬品はどうやって作るかって？　ダメダメ、それは企業秘密ってやつになってて教えられないヨ。

それじゃオイラの話はこれでおしまい。もしムオルの村に来ることがあったら寄ってくれよナ。

ドラゴンクエストIIIの草花と鉱物

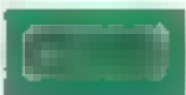
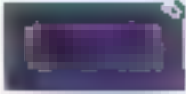
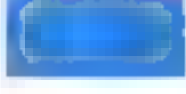
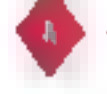
【第2部】

アレフガルドの金属

なんじゃ今度はこのドミノ様にアレフガルドで使われとる金属の説明をしろとナ、面倒じゃのう。そりゃわしゃ鍛冶屋だから金属や鉱石についちゃ詳しいが、人に話すのは苦手なんじゃヨ。ナニ、ナニ？一杯おごるとナ、それじゃ話すとしようか。

まずは銅、カッパーじゃ。この世界で大きな銅山はラダトームの北とローレシアの南にあるんじゃ。銅の剣は安いが、あんまし丈夫ではないんで、ほとんどは鍋や釜などの台所用品になっちまうがナ。強い魔物のいない地方じゃ結構、武器や防具としても使われとるヨ。

つぎは鉄、アイアンってヤツじゃす。こいつも鉱石自体の仕入れ値は銅とあんまし変わらないんじゃヨ。値段の違いは加工賃じゃナ。硬い鉄は鍛えるのにそれだけ手間がかかるってわけサ。例えば山で採れた鉱石を精錬するにしたって、銅と鉄では必要な石炭の量が全然違うんじゃ。

さてとつぎは水鏡の盾なんかに使われている流白銀。ミスリルって銀の一種じゃ。軽い上に丈夫だから、武器や防具を作るには最高の金属なんじゃ。こいつの産地はメルキドと後はテパ周辺が有名なくらいじゃナ。流白銀は貴重で魔物も欲しがっとるから、鉱山の警備も大変なんじゃ。

そしてなんといっても貴重なのは青鍛鋼、ブルーメタルと神剛鋼、オリハルコンじゃ。この二つは人間界の金属じゃない。つまり神様たちの国でしか採れないんじゃ。青鍛鋼には身につけた者の体力を回復させる力が、そして神剛鋼には雷鳴を呼んで電撃を放つ力があるんじゃ。それぞれが大地と大気の精霊に共鳴するかららしいんじゃが、詳しいことは誰にも分かりゃせん。なんといっても、神々の身につけなさる武器や防具を造るための物なんじゃからナ。その上この二つの鉱石を鍛えるには、それはそれは高い温度が必要なんじゃ。一説では燃える太陽の表面より高温でなければ無理とさえいわれておる。もしそうだとすれば到底普通の炉では無理ということじゃ。どんなに純度の高い石炭で火をおこしても、太陽の温度までは造り出せないじゃろうからナ。

実はわしも神剛鋼と青鍛鋼はまだ扱ったことがないんじゃヨ。どこかでカケラでも見つけたら持ってきてくれよナ。

ワシの店はムーンペタにあるんじゃ。待っとるからナ。

ドラゴンクエストIIIの草花と鉱物

(緑)	薬草	▲	銅
(紫)	毒けし草	▲▲	銀
(赤)	満月草	▲▲▲	金
(青)	消え去り草	◆	ミスリル

DRAGON QUEST WORLD GOODS

ドラゴンクエスト　ワールドグッズ

夢にまでみた3種のカギがセットになった。

●デパート玩具売場
玩具専門店で
発売中！

ゲームに出てくるアイテム、武器、防具がオールカラーで勢ぞろい！

●グッズの価格は消費税が含まれておりません。

最後、魔法盗賊の鍵セット
EP0065　380円

防具ハンカチ
EP0064 380円

ワールドマップクロス
EP0019　480円

武器ハンカチ
EP0063　380円

勇者と仲間たちクロス
EP0018　480円

モンスター大好きクロス
EP0017　480円

アイテムハンカチ
EP0062　380円

●貯金箱

商人の宝箱
EP0022　1,000円

ラーの鏡
EP0052　1,500円
直径20cm鏡部直径13.5cm

スライムシャープペンシル
EP0048　380円

スライムベスボールペン(赤)
EP0049　380円

メタルスライムボールペン(黒)
EP0050　380円

スライムPバッグ
EP0058　380円
よこ35cm×たかさ37cm×マチ22cm

メタルスライムぬいぐるみ
EP0041　3,900円
銀の糸がぬいこんであります。

スライムベスぬいぐるみ
EP002　3,500円
直径30cm×たかさ27cm

スライムぬいぐるみ
EP0001　380円

ドラゴンクエスト
勇者の記録帳I(無地)
EP0059　250円
48ページ・B5判

ロト・メモリアルペンセット EP0051　1,580円
ロトの判定規(18cm目盛)
スライムシャープペンシル
スライムベスボールペン(赤)
メタルスライムボールペン(黒)

スライムベビーぬいぐるみ
EP0055　1,200円
直径16cm×たかさ15cm

メタルベビーぬいぐるみ
EP0057　1,200円

ベスベビーぬいぐるみ
EP0056　1,200円

ドラゴンクエスト
勇者の記録帳II(方眼)
EP0060　250円
48ページ・B5判

ドラゴンクエスト
勇者の記録帳III(横ケイ)
EP0061　250円
48ページ・B5判

オールカラー48ページ。
Iが無地、IIが5mm方眼、IIIが8mmケイ。

通信販売のお申し込み先が変わりました。

新住所　〒135　東京都江東区深川2-24-6
カニエ　ダイレクト・メール内
ドラゴンクエストワールドグッズ　通信販売係
TEL. 03-641-8220

●通信販売のお申し込み方法――通販をご希望の方は、住所、氏名(フリナガ)、電話番号、生年月日、希望商品名、数量を明記し、代金と消費税3%分に送料手数料400円をそえ、現金書留でお申し込みください。
送金額＝グッズ代金合計＋消費税＋400円

エニックスではドラゴンクエストワールドグッズを、いち早くみなさんにお届けするために、新しく通信販売専用の窓口をもうけました。1989年11月以降、エニックスでは通販のお申し込みはうけたまわりません。あしからずご了承下さい。なお、ファミコンカセット、ボードゲームは通販いたしません。

株式会社 エニックス　TEL.03(369)8982
〒160　東京都新宿区西新宿7－5－25西新宿木村屋ビル5F

ドラゴンクエスト　アイテム物語

原作　ゲームドラゴンクエストシリーズ
シナリオ　堀井雄二

編集人　千田幸信
制作
エニックス出版局
本文構成
ダイナミックプロ
横倉廣
本文
横倉廣
メディアプラス
木村茂
松本多津子
イラスト
中沢数宣
冨所和子
あさみつよし
今井修司
塚田幸夫
成田保宏
コミック
栗本和博
レイアウト・デザイン
杉本正人（CREATIVE PYXIS）

当編集部では、この本のご意見・ご感想をお待ちしております。お寄せいただいた方々の中から、抽選で「ドラゴンクエストワールドグッズ」をプレゼントいたします。
《あて先》
〒160　東京都新宿区西新宿7—3—4　仁杉ビル4F
㈱エニックス出版局「アイテム物語」係

1989年12月25日　初版
発行人　福嶋康博
発行所　株式会社エニックス
営業部　東京都新宿区西新宿7-5-25
西新宿木村屋ビル5F　TEL 03(369)8982㈹
出版局　東京都新宿区西新宿7-3-4
仁杉ビル4F　TEL 03(369)8978㈹
印刷所　図書印刷
乱丁・落丁本はお取り替えいたします